

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2023年3月30日
【計算期間】	第1期（自 2022年8月10日 至 2022年12月31日）
【発行者名】	全共連第2回劣後ローン流動化株式会社
【代表者の役職氏名】	代表取締役 関口 陽平
【本店の所在の場所】	東京都千代田区丸の内三丁目1番1号東京共同会計事務所内
【事務連絡者氏名】	北川 久芳
【連絡場所】	東京都千代田区丸の内三丁目1番1号東京共同会計事務所内
【電話番号】	(03)5219-8777(代表)
【縦覧に供する場所】	該当事項はありません。

- d 当社は、2022年10月7日付で大和証券及び当社の間で締結された劣後ローン債権譲渡契約並びにこれに関する一切の変更契約（以下「本劣後ローン債権譲渡契約」といいます。）に基づき、2022年10月18日付で原保有者から本劣後ローン債権の譲渡を受けました。本劣後ローン債権の取得資金は本社債の発行によって調達しました。かかる本劣後ローン債権の原保有者から当社に対する譲渡については、本劣後ローン債権の債務者であるJA共済連の上記本劣後ローン債権の譲渡実行日の確定日付ある証書による承諾によって債務者及び第三者に対する対抗要件が具備されました。
- e 本劣後ローン債権譲渡契約に基づく本劣後ローン債権の原保有者から当社に対する譲渡の後においては、JA共済連による本劣後ローン債権の利息の支払及び元本の償還は当社に対して直接行うものとされています。
- f 当社は、原保有者から譲渡を受けた本劣後ローン債権から生じるキャッシュ・フローを裏付けとして、日本国内市場において、本社債を発行し、大和証券、野村證券株式会社及び三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社を幹事会社とする引受会社が引受を行いました。
- g 本社債は一般募集です。
- h 本社債及び本劣後ローン債権の利率は同率であり、いずれも年2回利息支払が行われ、その元金は、それぞれ最終償還日（以下に定義されます。）及び本劣後ローン最終弁済日（以下に定義されます。）に一括して償還されます。但し、本劣後ローン契約の規定に基づき、本劣後ローン最終弁済日が延長された場合には、最終償還日は延長後の本劣後ローン最終弁済日の直後の利払日まで延長されるものとされます。また、当社がJA共済連から本劣後ローンの元本が期限前弁済される旨の通知を受領した場合、本社債の元金は、一括して期限前償還されます。なお、当社は、後記4「証券所有者の権利」（3）「償還期限及び償還の方法」②「償還の方法及び期限」eの記載に従い本社債買入消却を行うことができ、この場合、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」e「弁済の方法及び期限」(b)(vii)「本社債買入消却に伴う弁済」の記載に従い本劣後ローンの元本の全部又は一部は期限前弁済されます。本社債に基づく債務の履行は、会社法その他適用法令に従い本劣後ローン債権等より得られる金銭をもって行うことが予定されています。
- i 当社は、2022年10月7日付で当社及び三井住友信託銀行株式会社（以下「本資産管理受託会社」といいます。）の間で締結された資産の管理及び処分に係る業務の委託に関する契約並びにこれに関する一切の変更契約（以下「本資産管理委託契約」といいます。）に基づき、本資産管理受託会社に対し、本劣後ローン債権の管理及び処分に係る業務を委託しています。

本報告書で使用される以下の用語は、別途定義される場合を除き、それぞれ下記の意味を有します。

「会社更生法」とは、会社更生法（平成14年法律第154号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「改定後利率適用期間」とは、各利率改定日につき、当該各利率改定日の翌日（当日を含みます。）から次の利率改定日（当日を含みます。）までのそれぞれの期間をいいます。

「貸金業法」とは、貸金業法（昭和58年法律第32号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「元金償還勘定」とは、本社債関連口座に元金償還勘定として設けられた勘定をいいます。

「幹事会社」とは、大和証券、野村證券及び三菱UFJモルガン・スタンレー証券を総称していいます。

「業務規程等」とは、後記⑩「振替機関に関する事項」記載の振替機関の振替業に係る業務規程その他の規則及び事務指針を総称していいます。

「銀行営業日」とは、東京において法令等により銀行が休日とされる日以外の日をいいます。

「金融商品取引法」とは、金融商品取引法（昭和23年法律第25号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「グロスアップ事由」とは、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」g「利息支払の方法及び制限」(e)「グロスアップ」の記載に基づきJA共済連が追加の支払を義務付けられ、又は義務付けられることとなり、かつ、かかる義務が、JA共済連のとり得る合理的な措置によってもこれを回避できない場合をいいます。

「グロスアップ事由弁済日」とは、本劣後ローン貸付実行日以降にグロスアップ事由が生じ、かつ継続している場合において、JA共済連が、その選択により行うグロスアップ事由による本劣後ローンの弁済のために設定する日をいいます。

「経過利息」とは、既に経過した期間に係る本社債の利息のうち、利払日が到来していないため支払われていないものをいい、後記4「証券所有者の権利」（1）「利率」記載の利率により後記4「証券所有者の権利」（2）「利払日及び利息支払の方法」の記載に準じて計算されるものとします。但し、未払残高を含まないものとします。

「原保有者」とは、本劣後ローン契約における劣後ローンの貸付人であり、当初の本劣後ローン債権の保有者である大和証券をいいます。

「口座管理機関」とは、業務規程等に定める口座管理機関をいいます。

「国債金利情報ページ」とは、財務省ウェブサイト内「国債金利情報」ページにおける「金利情報」（https://www.mof.go.jp/jgbs/reference/interest_rate/jgbcn.csv）（その承継ファイル及び承継ページを含みます。）又は当該「国債金利情報」ページ（その承継ファイル及び承継ページを含みます。）からリンクされる日本国債の金利情報を記載したページ若しくはダウンロードできるファイルをいいます。

「最終償還日」とは、2052年10月21日をいいます。

「資産流動化法」とは、資産の流動化に関する法律（平成10年法律第105号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「資産流動化法施行令」とは、資産の流動化に関する法律施行令（平成12年政令第479号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「支払金額」とは、未払残高支払事由が生じた場合における、当該未払残高支払事由に係る本劣後ローン未払残高支払額相当額をいいます。

「支払金額の一通貨あたりの利子額」とは、業務規程等に従い、支払金額を残存する本社債の元金で除したものをいいます。但し、小数点以下第13位未満の端数が生じた場合にはこれを切り捨てます。

「支払余力比率」とは、その時点において有効な農業協同組合法若しくはその他の法令、告示又はそれらの解釈における意味を有します。

「資本事由」とは、農業協同組合連合会等の支払能力の充実状況に関する農業協同組合法若しくはその他の関連法令、告示又はそれらの解釈に係る改正又は変更が公表され、その結果（経過措置（グラントファザリング）若しくはこれに類する規定の効果は考慮されます。）、本劣後ローンが農業協同組合法及びその他の関連法令における負債性資本又はその時点において適用のある規制上の要件において負債性資本と同等の資本性を有するものとして取り扱われないこととなり、JA共済連のとり得る合理的な措置によってもこれを回避できない場合をいいます。

「資本事由弁済日」とは、本劣後ローン貸付実行日以降に資本事由が生じ、かつ継続している場合において、JA共済連が、その選択により行う資本事由による本劣後ローンの弁済のために設定する日をいいます。

「資本性変更事由」とは、株式会社日本格付研究所、株式会社格付投資情報センター、S&Pグローバル・レーティング・ジャパン株式会社及びムーディーズ・ジャパン株式会社又はその格付業務を承継した機関のうちいずれか（本定義において、以下「格付機関」といいます。）が、当該格付機関における資本性に係る評価基準、ガイドライン又は手法に改正又は変更が生じたか又は生じる予定である旨を公表し、当該改正又は変更により、(a)本劣後ローンについて当該格付機関から特定の水準の資本性が認められる期間が、本劣後ローン貸付実行日において当該格付機関により当該水準の資本性が認められることが見込まれていた期間に比べて短くなった場合、又は、(b)本劣後ローンについて、本劣後ローン貸付実行日において当該格付機関から認められていた水準の資本性よりも資本性が低いものとして取り扱われることとなった場合をいいます。

「資本性変更事由弁済日」とは、本劣後ローン貸付実行日以降に資本性変更事由が生じ、かつ継続している場合において、JA共済連が、その選択により行う資本性変更事由による本劣後ローンの弁済のために設定する日をいいます。

「資本不足事由」とは、(a)(i)JA共済連の支払余力比率が200%（資本規制が変更された場合は、変更後の要求水準）を下回った場合、若しくは適用ある規制（当該規制に関する解釈を含みます。）上、本劣後ローン利息の支払の繰延べが要求される場合、若しくは、(ii)当該本劣後ローン基準日に係る本劣後ローン利払日における本劣後ローン利息の支払を行うことにより、JA共済連の支払余力比率が200%（資本規制が変更された場合は、変更後の要求水準）を下回ることとなる場合、若しくは適用ある規制（当該規制に関する解釈を含みます。）上、本劣後ローン利息の支払の繰延べが要求されることとなる場合、又は(b)農林水産省若しくはその他権限のある監督官庁からJA共済連に対して早期是正措置が発動されている場合をいいます。

「出資金勘定」とは、本社債関連口座に出資金勘定として設けられた勘定をいいます。

「償還日」とは、後記4「証券所有者の権利」（3）「償還期限及び償還の方法」②「償還の方法及び期限」aからcまでの記載に基づき本社債が償還されるべき日をいいます。

「商法」とは、商法（明治32年法律第48号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「税制事由」とは、日本の法令又はその運用若しくは解釈の改正又は変更により、JA共済連に課される法人税の計算において本劣後ローン利息の全部又は一部が損金に算入されなくなるおそれが相当程度増大し、JA共済連のとり得る合理的な措置によってもこれを回避できない場合をいいます。

「税制事由弁済日」とは、本劣後ローン貸付実行日以降に税制事由が生じ、かつ継続している場合において、JA共済連が、その選択により行う税制事由による本劣後ローンの弁済のために設定する日をいいます。

「当社上位債務」とは、当社同順位劣後債務、本社債に係る当社の債務及び当社の清算手続における支払につき本社債に係る債務に劣後することが明示された当社の債務を除く、劣後的破産債権に係る債務を含むあらゆる当社の債務をいいます。

「当社同順位劣後債務」とは、当社の清算手続における支払につき本社債に係る債務と同順位となることが明示された当社のその他の債務をいいます。

「当社劣後事由」とは、以下のいずれかの事由が生じた場合をいいます。

(a) 当社について、清算手続（会社法に基づく通常清算手続及び特別清算手続を含みます。）が開始された場合。

(b) 管轄権を有する日本の裁判所が、当社について、破産法の規定に基づく破産手続開始の決定をした場合。

- (c) 管轄権を有する日本の裁判所が、当社について、会社更生法の規定に基づく更生手続開始の決定をした場合。
- (d) 管轄権を有する日本の裁判所が、当社について、民事再生法の規定に基づく再生手続開始の決定をした場合。但し、再生手続開始の決定がなされた後、簡易再生の決定若しくは同意再生の決定が確定した場合、再生計画不認可の決定が確定した場合、再生手続開始決定の取消若しくは再生手続の廃止により再生手続が終了した場合、又は再生計画取消の決定が確定した場合には、本(d)による当社劣後事由は生じなかったものとみなされます。
- (e) 当社について日本法によらない外国における清算手続、破産手続、更生手続、再生手続又はこれらに準ずる手続が開始された場合。

「当初利率適用期間」とは、本劣後ローン貸付実行日の翌日（当日を含みます。）から2027年10月21日（当日を含みます。）までの期間をいいます。

「特定調停法」とは、特定債務等の調整の促進のための特定調停に関する法律（平成11年法律第158号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「農業協同組合法」とは、農業協同組合法（昭和22年法律第132号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「野村證券」とは、野村證券株式会社をいいます。

「破産法」とは、破産法（平成16年法律第75号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「払込期日」とは、2022年10月18日をいいます。

「保管振替機構」とは、株式会社証券保管振替機構をいいます。

「本格付機関」とは、JCRをいいます。

「本資産管理委託契約」とは、2022年10月7日付で当社及び三井住友信託銀行の間で締結された資産の管理及び処分に係る業務の委託に関する契約並びにこれに関する一切の変更契約をいいます。

「本資産管理受託会社」とは、本資産管理委託契約における受託者である三井住友信託銀行をいいます。

「本社債買入消却」とは、当社による本社債の買入消却をいいます。

「本社債買入消却関連合意」とは、本劣後ローン貸付人が当社である場合において、当社が本社債買入消却を行う場合に、本劣後ローン貸付人が、JA共済連と本社債買入消却及びこれに伴う本劣後ローンの元本の弁済に関して行う事前の書面による合意をいいます。

「本社債管理委託契約」とは、2022年10月7日付で当社及び三井住友信託銀行の間で締結された全共連第2回劣後ローン流動化株式会社第1回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債（劣後特約及び責任財産限定特約付）社債管理委託契約並びにこれに関する一切の変更契約をいいます。

「本社債管理者」とは、本社債の社債管理者である三井住友信託銀行をいいます。

「本社債関連口座」とは、本社債管理委託契約に基づき当社が本社債関連口座として開設した口座又は開設する口座をいいます。

「本社債期限前償還日（利払日）」とは、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」e「弁済の方法及び期限」(b)(i)「JA共済連の選択による弁済」の記載に基づき、当社が、本劣後ローン期限前弁済が本劣後ローン利払日において行われる旨の通知を受領した場合における、その直後の利払日をいいます。

「本社債期限前償還日（利払日以外）」とは、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」e「弁済の方法及び期限」(b)(i)「JA共済連の選択による弁済」の記載に基づき、当社が、本劣後ローン期限前弁済が本劣後ローン利払日以外の日において行われる旨の通知を受領した場合における、当該本劣後ローン期限前弁済が行われる日の3銀行営業日後の日をいいます。

「本社債権者」とは、本社債の社債権者をいいます。

「本社債事務委託契約」とは、2022年10月7日付で当社及び三井住友信託銀行の間で締結された全共連第2回劣後ローン流動化株式会社第1回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債（劣後特約及び責任財産限定特約付）事務委託契約並びにこれに関する一切の変更契約をいいます。

「本社債事務受託会社」とは、本社債事務委託契約における受託者である三井住友信託銀行をいいます。

「本社債税制事由」とは、日本の法令又はその運用若しくは解釈の改正又は変更により、当社に課される法人税の計算において本社債の利息の全部又は一部が損金に算入されなくなるおそれが相当程度増大し、当社のとり得る合理的な措置によってもこれを回避できない場合をいいます。

「本社債税制事由弁済日」とは、本劣後ローン貸付実行日以降に本社債税制事由が生じ、かつ継続している場合において、JA共済連が、その選択により行う本社債税制事由による本劣後ローンの弁済のために設定する日をいいます。

「本社債要項」とは、本社債の社債要項をいいます。

「本社債利息」とは、後記4「証券所有者の権利」（2）「利払日及び利息支払の方法」①の記載に従い決定される、各利払日に支払われるべき本社債の利息をいいます。

「本引受契約」とは、2022年10月7日付で当社、JA共済連及び幹事会社の間で締結された全共連第2回劣後ローン流動化株式会社第1回利払繰延条項・期限前償還条項付無担保社債（劣後特約及び責任財産限定特約付）引受契約並びにこれに関する一切の変更契約をいいます。

「本劣後ローン」とは、本劣後ローン契約に基づく貸付をいいます。

「本劣後ローン貸付実行日」とは、2022年10月18日をいいます。

「本劣後ローン貸付人」とは、本劣後ローン債権の保有者をいいます。

「本劣後ローン期限前弁済」とは、本劣後ローンの元本の期限前弁済をいいます。

「本劣後ローン基準日」とは、本劣後ローン利払日の15銀行営業日前の日をいいます。

「本劣後ローン強制停止」とは、JA共済連が、本劣後ローン基準日の5銀行営業日前において、(a)資本不足事由が生じ、かつ継続している場合、又は(b)本劣後ローン若しくは本劣後ローン同順位劣後債務がその直前の支払期日において支払を停止している場合には、当該本劣後ローン基準日までに本劣後ローン貸付人に対して通知した上で、当該本劣後ローン基準日に係る本劣後ローン利払日以降、当該事象が解消されるまでの間に到来する本劣後ローン利払日における本劣後ローン利息の支払の全部を繰り延べなければならないことをいいます。

「本劣後ローン強制停止金額」とは、本劣後ローン強制停止により繰り延べられた本劣後ローン利息の未払金額をいいます。

「本劣後ローン経過利息」とは、既に経過した期間に係る本劣後ローン利息のうち、本劣後ローン利払日が到来していないため支払われていない本劣後ローン利息をいい、その対象となる計算期間について後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」g「利息支払の方法及び制限」(a)「利息支払の方法」(ii)の記載に従って計算されるものとします。但し、本劣後ローン未払残高を含まないものとします。

「本劣後ローン契約」とは、2022年10月7日付で、大和証券及びJA共済連の間に締結された劣後ローン契約及びこれに関する一切の変更契約をいいます。

「本劣後ローン後順位劣後債務」とは、JA共済連の清算手続における支払につき本劣後ローンに係る債務に劣後することが明示されたJA共済連の債務をいいます。

「本劣後ローン債権」とは、本劣後ローン契約に基づく、JA共済連に対する劣後ローンの元利払請求権及びこれらに関連する一切の権利を総称していいます。

「本劣後ローン債権譲渡契約」とは、2022年10月7日付で、大和証券及び当社の間で締結された劣後ローン債権譲渡契約及びこれに関する一切の変更契約をいいます。

「本劣後ローン最終弁済日」とは、2052年10月21日（当該日が銀行営業日でない場合には、その前銀行営業日とします。）の3銀行営業日前の日をいいます。

「本劣後ローン債務」とは、本劣後ローン契約に基づく、JA共済連の劣後ローンの元利払債務及びこれに関連する一切の債務を総称していいます。

「本劣後ローン上位債務」とは、本劣後ローン同順位劣後債務、本劣後ローンに係る債務及び本劣後ローン後順位劣後債務を除く、劣後的破産債権に係る債務を含むあらゆるJA共済連の債務をいいます。

「本劣後ローン同順位劣後債務」とは、JA共済連の清算手続における支払につき本劣後ローンに係る債務と同順位となることが明示されたJA共済連のその他の債務をいいます（下記の債務を含みますが、これに限られません。）。

本劣後ローン同順位劣後債務に含まれる債務の例としては、本報告書提出日現在、下記の契約に係るJA共済連の債務があります。

(a) 全共連第1回劣後ローン流動化株式会社との間の劣後ローン契約及びこれに関する一切の変更契約（原契約締結日：2021年10月15日）

「本劣後ローン任意停止」とは、JA共済連が、その裁量により、本劣後ローン基準日までに当社に対し通知を行うことにより、当該通知に係る本劣後ローン利払日における本劣後ローン利息の支払の全部（一部は不可）を繰り延べらることをいいます。

「本劣後ローン任意停止金額」とは、本劣後ローン任意停止により繰り延べられた本劣後ローン利息の未払金額をいいます。

「本劣後ローン任意弁済日」とは、いずれかの利率改定日の3銀行営業日前の日をいいます。

「本劣後ローン弁済日」とは、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」e「弁済の方法及び期限」(a)又は(b)の記載に基づき本劣後ローンが弁済されるべき日をいいます。

「本劣後ローン弁済要件」とは、本劣後ローンの元本の弁済を行うために充足すべき要件をいいます。本劣後ローン弁済要件は、(a)当該弁済を行った後においてJA共済連が十分な支払余力比率を維持することができると見込まれること、又は(b)JA共済連が当該弁済額以上の額の資本調達を行うことを条件とし、かつ、農林水産省の事前の承認の取得（かかる承認が必要な場合に限り。）その他その時点において適用のある規制上の要件を充足する場合に充足されます。

「本劣後ローン未払残高」とは、本劣後ローンに関してその時点で残存する全ての本劣後ローン利払停止金額をいいます。

「本劣後ローン未払残高支払額」とは、各未払残高支払事由に関し、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」g「利息支払の方法及び制限」(d)「本劣後ローン未払残高の支払」の記載に基づき支払われた本劣後ローン未払残高の金額をいいます。

「本劣後ローン利息」とは、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」g「利息支払の方法及び制限」(a)「利息支払の方法」に従い決定される、各本劣後ローン利払日に支払われるべき本劣後ローンの利息をいいます。

「本劣後ローン利息計算期間」とは、各本劣後ローン利払日について、当該本劣後ローン利払日の直前の利息計算基準日の翌日（当日を含みます。）から当該本劣後ローン利払日の直後に到来する利息計算基準日（当日を含みます。）までの期間をいいます。

「本劣後ローン利払停止金額」とは、本劣後ローン任意停止金額及び本劣後ローン強制停止金額を総称していいます。

「本劣後ローン利払日」とは、2023年4月21日（当該日が銀行営業日でない場合には、その前銀行営業日とします。）の3銀行営業日前の日を第1回として、その後毎年4月21日（当該日が銀行営業日でない場合には、その前銀行営業日とします。）の3銀行営業日前の日及び10月21日（当該日が銀行営業日でない場合には、その前銀行営業日とします。）の3銀行営業日前の日をいいます。

「本劣後ローン劣後事由」とは、以下のいずれかの事由が生じた場合をいいます。

- (a) JA共済連について、清算手続（農業協同組合法に基づく清算手続を含みます。）が開始された場合。
- (b) 管轄権を有する日本の裁判所が、JA共済連について、破産法の規定に基づく破産手続開始の決定をした場合。
- (c) 管轄権を有する日本の裁判所が、JA共済連について、民事再生法の規定に基づく再生手続開始の決定をした場合。但し、再生手続開始の決定がなされた後、簡易再生の決定若しくは同意再生の決定が確定した場合、再生計画不認可の決定が確定した場合、再生手続開始決定の取消若しくは再生手続の廃止により再生手続が終了した場合、又は再生計画取消の決定が確定した場合には、本(c)による本劣後ローン劣後事由は生じなかったものとみなされます。
- (d) JA共済連について日本法によらない外国における清算手続、破産手続、再生手続又はこれらに準ずる手続が開始された場合。

「本劣後ローン劣後事由（本社債）」とは、本劣後ローン劣後事由が発生した場合をいいます。

「三井住友信託銀行」とは、三井住友信託銀行株式会社をいいます。

「三菱UFJモルガン・スタンレー証券」とは、三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社をいいます。

「未払残高」とは、各本社債に関してその時点で残存する全ての利払停止金額をいいます。

「未払残高支払事由」とは、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」g「利息支払の方法及び制限」(d)「本劣後ローン未払残高の支払」の記載に基づき、本劣後ローン未払残高が支払われたことをいいます。

「民事再生法」とは、民事再生法（平成11年法律第225号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「民事執行法」とは、民事執行法（昭和54年法律第4号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「民法」とは、民法（明治29年法律第89号。その後の改正を含みます。）をいいます。

「利息計算基準日」とは、2022年10月18日を第1回として、その後毎年4月21日及び10月21日（但し、2022年10月21日を除きます。）をいいます。

「利息支払勘定」とは、本社債関連口座に利息支払勘定として設けられた勘定をいいます。

「利払停止」とは、利払停止事由が生じた場合に、当社が、本社債権者及び本社債管理者に対し、速やかに（但し、当該利払日の10銀行営業日前までに）通知を行うことにより、当該通知に係る利払日における本社債利息の支払の全部（一部は不可）を繰り延べることをいいます。

「利払停止金額」とは、利払停止により繰り延べられた本社債利息の未払金額をいいます。

「利払停止事由」とは、各利払日の直前の本劣後ローン利払日において、本劣後ローン契約に基づき、本劣後ローン利息の支払が任意に又は強制的に停止される旨の通知を当社が受領したことをいいます。

「利払日」とは、2023年4月21日を第1回とし、その後毎年4月21日及び10月21日をいいます。

「利率改定日」とは、2027年10月21日及びその5年後ごとの応当日のそれぞれをいいます。

「利率基準日」とは、各改定後利率適用期間につき、当該改定後利率適用期間の開始日の直前の利率改定日の2銀行営業日前の日をいいます。

「利率決定日」とは、各利率基準日の翌銀行営業日をいいます。

「劣後支払条件（当社劣後事由）」とは、以下に該当する場合をいいます。

- (a) 当社の清算手続において、債権の申出期間に申出がなされた債権又は当社に知れている債権者に係る全ての当社上位債務が、会社法の規定に基づき、全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足を受けた場合。
- (b) 当社の破産手続において、最後配当のための配当表に記載された全ての当社上位債務が、法令上認められる全ての配当によって、全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足（供託による場合を含みます。）を受けた場合。
- (c) 当社の更生手続において、会社更生法に基づき更生計画認可の決定が確定したときにおける更生計画に記載された全ての当社上位債務が、その確定した債権額について全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足を受けた場合。
- (d) 当社の再生手続において、民事再生法に基づき再生計画認可の決定が確定したときにおける再生計画に記載された全ての当社上位債務が、その確定した債権額について全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足を受けた場合。
- (e) 当社に対する日本法によらない外国における清算手続、破産手続、更生手続、再生手続又はこれらに準ずる手続において、上記に準じて当社上位債務が全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足を受けた場合。但し、当該手続上そのような条件を付すことが認められない場合には、本社債に基づく元利金の支払請求権の効力は当該条件に服することなく発生します。

「劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）」とは、以下に該当する場合をいいます。

- (a) JA共済連の清算手続において、債権の申出期間に申出がなされた債権又はJA共済連に知れている債権者に係る全ての本劣後ローン上位債務が、農業協同組合法の規定に基づき、全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足を受けた場合。
- (b) JA共済連の破産手続において、最後配当のための配当表に記載された全ての本劣後ローン上位債務が、法令上認められる全ての配当によって、全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足（供託による場合を含みます。）を受けた場合。
- (c) JA共済連の再生手続において、民事再生法に基づき再生計画認可の決定が確定したときにおける再生計画に記載された全ての本劣後ローン上位債務が、その確定した債権額について全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足を受けた場合。
- (d) JA共済連に対する日本法によらない外国における清算手続、破産手続、再生手続又はこれらに準ずる手続において、上記に準じて本劣後ローン上位債務が全額支払われた場合、又はその他の方法で全額の満足を受けた場合。但し、当該手続上そのような条件を付すことが認められない場合には、本劣後ローンに基づく元利金の支払請求権の効力は当該条件に服することなく発生します。

「劣後事由」とは、当社劣後事由及び本劣後ローン劣後事由（本社債）を総称していいます。

「A種優先株式」とは、当社がその株主総会の決議及び普通株式に係る種類株主総会の決議に従ってJA共済連に発行したA種優先株式をいいます。

「JCR」とは、株式会社日本格付研究所をいいます。

③ 管理資産の管理の方法及び管理の形態

管理資産である本劣後ローン債権は当社の資産であり、本資産管理受託会社が本資産管理委託契約に従って管理資産である本劣後ローン債権の管理を当社のために行います。本社債管理委託契約において、当社は、本劣後ローン債権を含む当社の資産につき、本社債要項及び本社債管理委託契約に定められたところによる場合並びに本社債管理者の事前の書面による承諾がある場合を除き、貸付、譲渡、交換、その他の処分を行うことが禁止されています。本劣後ローン債権の利息の支払による回収金は当社の利息支払勘定に、本劣後ローン債権の元本の弁済による回収金は当社の元金償還勘定において保管され、後記3「管理及び運営の仕組み」（1）「資産管理等の概要」①「管理資産の管理」 a「管理資産からの支出」(b)の(i)ないし(iv)に記載されている方法及び順序によってのみ利用することが可能とされています。

④ 元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因

a 元金償還資金又は利息支払資金が不足するリスク

当社は、通常の事業会社等とは異なり、普通株式及びA種優先株式の払込金並びに原保有者から取得した本劣後ローン債権のほかには、特段の資産を有しません。普通株式及びA種優先株式の払込金は専ら当社の当初費用並びに当社の維持、管理及び運営のための期中費用の支払資金に充当され、本社債の元利金の支払に充当されることはなく、かつ、払込期日後に当社が追加の普通株式又はA種優先株式を発行する場合においてその引受を約束している第三者は存在しません。従って、本社債の利息の支払はJA共済連が支払う本劣後ローン利息の支払金によって行われ、本社債の元金の償還はJA共済連が支払う本劣後ローンの元本の弁済金によって行われることとなりますが、本劣後ローン債権の債務者であるJA共済連による債務の履行につき、他のいかなる第三者も保証を行っているものではありません。このため、本社債の償還及び利息の支払は本劣後ローン債権の債務者であるJA共済連による本劣後ローン債権の元本の弁済及び利息の支払の状況に影響されることになります。そのため、JA共済連による本劣後ローン債権の元本の弁済及び利息の支払の状況如何によっては、本社債の元金の償還又は利息の支払に支障が生じる可能性があります。

このように本社債の元金の償還及び利息の支払は専らJA共済連の信用力に依存しており、その時々JA共済連の信用力によっては、本社債の元金の償還又は利息の支払に支障が生じる可能性があります。

なお、JA共済連の財務状況については、後記第4「発行者及び関係法人情報」2「現保有者その他関係法人の概況」「その他関係法人の概況」をご参照下さい。

これらのリスク要因については、JA共済連の財務状況に起因するものであり、当社において特段の管理体制を整えることができる性質のものではありません。従って、かかるリスクが全て排除されている訳ではありません。

b 本社債の元金の償還に関するリスク

(a) 本社債の元金が最終償還日に償還されないリスク

本社債の元金の償還は、後記4「証券所有者の権利」（3）「償還期限及び償還の方法」②「償還の方法及び期限」b又はcの記載に基づき期限前償還される場合及び同eの記載に基づき買入消却される場合を除き、最終償還日である2052年10月21日に、その残存総額を、最終償還日を利払日とする利息及び未払残高の支払とともに償還することを予定しています。但し、本劣後ローン契約に基づき、本劣後ローン最終弁済日が延長された場合には、本社債の最終償還日は延長後の本劣後ローン最終弁済日の直後の利払日まで延長されるものとされています。

そして、本劣後ローン契約上、本劣後ローンの元本は、本劣後ローン弁済要件を充足した場合に限り、本社債の最終償還日（当該日が銀行営業日でない場合には、その前銀行営業日とします。）の3銀行営業日前の日である本劣後ローン最終弁済日に、その残存総額を、本劣後ローン最終弁済日を本劣後ローン利払日とする本劣後ローン利息及び本劣後ローン未払残高の支払とともに弁済するものとされています。本劣後ローン最終弁済日に本劣後ローン弁済要件が充足されなかった場合、本劣後ローン最終弁済日は次の本劣後ローン利払日まで延長され、その後も同様とするものとされています。

以上から、本劣後ローン最終弁済日において本劣後ローン弁済要件を充足できない場合には、本劣後ローン弁済要件が充足される最初の本劣後ローン利払日まで本劣後ローンの元本の弁済を行うことができず、その間、本社債の元金の償還も行われないこととなります。その結果、本社債権者による投資資金の回収が、潜在的には無期限に延長される可能性があります。

かかるリスク要因については、本社債の商品性に起因するものであり、当社による対応が不可能な要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

(b) 当社及び本社債権者が、それぞれ本劣後ローン及び本社債の期限の利益を喪失させる権利を有しないリスク

本劣後ローンには期限の利益喪失に関する特約が付されず、本劣後ローンが期限の利益を喪失させられることはありません。従って、本劣後ローンの元本の弁済若しくは利息の支払が行われなかった場合、JA共済連が本劣後ローンに関し負う義務に違反した場合又はその他の事由が生じた場合であっても、本劣後ローンについて期限の利益が失われるものではなく、かかる事由が生じたことを理由とした本劣後ローンの元本の弁済は行われません。その結果、本社債の元金の償還又は利息の支払に支障が生じる可能性があります。

加えて、本社債にも期限の利益喪失に関する特約が付されません。また、本社債権者は、会社法第739条に基づく決議を行う権利を有さず、本社債が同条に基づき期限の利益を喪失させられることはありません。従って、本社債の元金の償還若しくは利息の支払が行われなかった場合、当社が本社債に関し負う義務に違反した場合又はその他の事由が生じた場合であっても、本社債について期限の利益が失われるものではなく、かかる事由が生じたことを理由とした本社債の元金の償還は行われません。

かかるリスク要因については、本劣後ローン及び本社債の商品性に内在するものであり、当社による対応が不可能な要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

(c) 本社債の期限前償還に関するリスク

当社は、本劣後ローン契約に基づき本劣後ローンの元本の期限前弁済が行われる旨の通知を受領した場合に、残存する本社債の元金の全部（一部は不可）を期限前償還するものとされています。

そして、本劣後ローン契約上、JA共済連は、その選択により、2027年10月21日及びその5年後ごとの応当日である利率改定日の3銀行営業日前の日である本劣後ローン任意弁済日に、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、残存する本劣後ローンの元本の全部（一部は不可）を期限前弁済することができるものとされています。さらに、資本事由、税制事由、資本金変更事由、グロスアップ事由又は本社債税制事由が生じ、かつ継続している場合、JA共済連は、その選択により、JA共済連が当該弁済のために設定する日に、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、残存する本劣後ローンの元本の全部（一部は不可）を期限前弁済することができるものとされています。

以上から、本劣後ローン契約に従いJA共済連が本劣後ローンの期限前弁済を行った場合には、本社債の期限前償還も行われます。この場合、本社債権者は、当該償還金をもって本社債よりも不利な条件での再投資しか行うことができない可能性があります。それに対する補償は当社及びJA共済連を含むいかなる当事者も行いません。なお、本劣後ローン契約に従ったJA共済連による本劣後ローンの期限前弁済はいずれもJA共済連の権利であり、JA共済連に期限前弁済を義務付けるものではなく、JA共済連がかかる権利を行使して期限前弁済を行うとの保証はありません。

また、本社債権者は、当社に対して本社債の期限前償還を求める権利及びJA共済連に対して本劣後ローンの期限前弁済を求める権利を有していません。

かかるリスク要因については、本社債の商品性に内在するものであり、当社による対応が不可能な要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

c 本社債の利息の支払に関するリスク

本社債の利息の支払は、後記4「証券所有者の権利」（2）「利払日及び利息支払の方法」記載のとおり利払日において、同項記載の利息支払の方法に従って行われることを予定しています。しかしながら、JA共済連による本劣後ローン債権の利息の支払及び元本の弁済状況並びにJA共済連の財務状況によっては、本社債のその時々における利息支払資金が不足する可能性があります。

当社は、各利払日の直前の本劣後ローン利払日において、本劣後ローン契約に基づき、本劣後ローン利息の支払が任意に又は強制的に停止される旨の通知を当社が受領した場合、当該通知に係る利払日における本社債利息の支払の全部（一部は不可）を繰り延べる利払停止を行うこととされています。なお、利払停止により繰り延べられた本社債利息の未払金額である利払停止金額には利息は付されないものとされています。そして、本劣後ローン契約上、JA共済連は、その裁量により、本劣後ローン利息の支払の全部（一部は不可）を繰り延べる本劣後ローン任意停止を行うことができ、また、資本不足事由が生じ、かつ、継続している場合、又は本劣後ローン若しくは本劣後ローン同順位劣後債務がその直前の支払期日において支払を停止している場合には、当該事実が解消されるまでの間に到来する本劣後ローン利払日における本劣後ローン利息の支払の全部を繰り延べる本劣後ローン強制停止を行わなければならないものとされています。

以上から、JA共済連が本劣後ローン任意停止を行い、又は上記事由が生じ本劣後ローン強制停止が行われている場合には、支払が停止された本劣後ローン利息の金額である本劣後ローン利払停止金額相当額の本社債利息の支払が繰り延べられることとなります。

このように、JA共済連による本劣後ローン債権の利息の支払及び元本の弁済状況並びにJA共済連の財務状況によっては、本劣後ローン利息の支払が本劣後ローン契約に基づき繰り延べられる可能性があり、ひいては、本社債利息の支払が繰り延べられ、その結果、予定された利払日において本社債利息の支払が行われない場合があります。また、支払が繰り延べられた本社債利息については、その原因となった本劣後ローン利息の支払の繰延べに係る本劣後ローン利払停止金額である本劣後ローン未払残高がJA共済連から支払われない限り、当該繰延べが生じた後においても支払われませんが、JA共済連は、本劣後ローン最終弁済日までの間、本劣後ローン未払残高を支払う義務を負わず、また、本劣後ローン未払残高の支払を希望する場合でも、適用ある規制上の要件を充足し、資本不足事由が発生しておらず、原則として本劣後ローン同順位劣後債務がその支払を停止していないことが支払の条件とされています。なお、本劣後ローン契約上、本劣後ローン利息の支払が繰り延べられる場合においても、JA共済連による剰余金の配当並びに持分の払戻し及び譲受けは禁止されないものとされています。さらに、本劣後ローン契約上、JA共済連が剰余金の配当並びに持分の払戻し及び譲受けを行っている場合や、本劣後ローン同順位劣後債務の弁済を行っている場合であっても、JA共済連による本劣後ローン任意停止は禁止されません。

かかるリスク要因については、本社債の商品性に内在するものであり、当社による対応が不可能な要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

d 本劣後ローン債権及び本社債がそれぞれ上位債権に劣後するリスク

本劣後ローン契約上、本劣後ローン劣後事由が発生し、継続している期間中、本劣後ローンに関する一切の請求権は、劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）が成就した場合にのみ発生するものとされています。また、当社劣後事由が発生し、継続している期間中、本社債に関する一切の請求権は、劣後支払条件（当社劣後事由）が

成就した場合にのみ発生し、さらに、本劣後ローン劣後事由（本社債）が発生し、継続している期間中、本社債に関する一切の請求権は、劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）が成就した場合にのみ発生するものとされています。

破産法上、債務者について破産手続が開始された場合、破産法第99条第2項により、約定劣後破産債権についての配当の順位は劣後的破産債権を含む他の全ての破産債権に後れるものとされ、また、同法第142条第1項により、破産手続上議決権を有しないものとされています。

これに対し、民事再生法上は、債務者について再生手続が開始された場合、民事再生法第155条第2項により、劣後的破産債権に後れる約定劣後再生債権の順位を考慮して、再生計画の内容に公正かつ衡平な差を設けなければならないとされています。また、会社更生法上は、株式会社について更生手続が開始された場合、会社更生法第168条第3項により、更生計画においては、異なる種類の権利を有する者の間においては、以下に掲げる種類の権利の順位を考慮して、更生計画の内容に公正かつ衡平な差を設けなければならないとされています。この場合の権利の順位とは、(a)更生担保権、(b)一般の先取特権その他一般の優先権がある更生債権、(c) ((b)及び(d)に掲げるもの以外の) 更生債権、(d)約定劣後更生債権、(e)残余財産の分配に関し優先的内容を有する種類の株式、(f) ((e)に掲げるもの以外の) 株式の順序となります。従って、約定劣後再生債権又は約定劣後更生債権は、必ずしも他の再生債権又は更生債権に絶対的に劣後することまで要求されているわけではありません。

もっとも、上記の会社更生法等の規定は、前述のような契約当事者が停止条件構成を用いて劣後債権に係る絶対劣後扱いについて合意すること自体を否定する趣旨ではなく、債務者について更生手続、破産手続又は再生手続が開始された場合においても、かかる劣後債権に係る絶対劣後扱いについての合意もその効力が認められると解されています。

以上のとおり、本社債の元利金の全額が支払われる以前において、JA共済連が法人として解散又は倒産した場合においては、当社が本劣後ローン債権の元利金の支払につきJA共済連の他の債権者に劣後する結果、本社債の元利金の全額を支払うために十分な資金を得られない可能性があり、その結果本社債の元利金を支払えなくなる可能性があります。また、JA共済連が解散又は倒産しない場合でも、本社債の元利金の全額が支払われる以前において、当社が株式会社として解散又は倒産した場合においては、本社債権者が本社債の元利金の支払につき当社の他の債権者に劣後する結果、本社債の元利金を支払えなくなる可能性があります。

なお、本社債の発行日以後、JA共済連が本劣後ローン債権と同順位の債権又はこれに優先する債権に係る債務を負担することは何ら制限されていません。

かかるリスク要因については、破産法、会社更生法及び民事再生法等に基づく法制度並びにJA共済連及び当社の財務状況に起因するものであり、当社において特段の管理体制を整えることができる性質のものではありません。従って、かかるリスクが全て排除されている訳ではありません。

e 原保有者の破産等に伴うリスク

当社は本劣後ローン債権譲渡契約に基づき原保有者から本劣後ローン債権の譲渡を受けていますが、かかる本劣後ローン債権の譲渡につき、原保有者の破産手続、更生手続、再生手続その他の倒産手続において、裁判所あるいは管財人等により、本劣後ローン債権は原保有者の破産財団、更生会社の財産、再生債務者の財産等に属するものであって、当社の本劣後ローン債権に対する権利は原保有者の破産手続、更生手続、再生手続その他の倒産手続との関係で担保権に過ぎないものとして取り扱われるリスクは、以下のような理由から極めて低いものと当社は考えています。

- (a) 原保有者及び当社は、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき、本劣後ローン債権の真正な売却及び購入を意図していること。
- (b) 原保有者は、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき本劣後ローン債権が当社に移転した後は、本劣後ローン債権に対して一切の権利を有さないこと。
- (c) 本劣後ローン債権譲渡契約上、当社は、原保有者に対して本劣後ローン債権の買戻しを請求する権利を有さず、また、原保有者は本劣後ローン債権の買戻しを行う義務を負担していないこと。
- (d) 原保有者は、本劣後ローン債権譲渡契約上、本劣後ローン債権の譲渡実行日現在における本劣後ローン債権に関する一定の事実表明及び保証を行っている以外には、本劣後ローン債権の回収可能性について、何らの責任を負担していないこと。
- (e) 本劣後ローン債権譲渡契約に基づく原保有者から当社に対する本劣後ローン債権の譲渡についてはJA共済連の確定日付ある証書による承諾を取得する方法によって債務者及び第三者対抗要件が具備されていること。

かかるリスク要因については、上記のとおり極めて低いものと当社は考えていますが、かかるリスクが排除されている訳ではありません。

f 当社が目的以外の債務を負うリスク

当社が、本社債の元金全額が償還されるまでに、本社債発行に関係のない債務を負うことにより、本社債権者が不測の損害を被る可能性があります。当社は、本社債管理委託契約において、本社債管理者に対し、本社債の元利金の全てが償還され又は支払われるまでの間、本社債要項及び本社債管理委託契約に定められたところによる場合並びに本社債管理者の事前の書面による承諾がある場合を除き、以下のことを約束しています。

(a) 当社は、本社債以外の現在又は将来の当社又は第三者の債務を担保するために、当社の資産の全部又は一部に抵当権、質権その他一切の担保権を設定せず、また第三者の債務を担保するために保証債務を負担しません。

(b) 当社は、当社の資産を、貸し付け、譲渡し、交換し、その他の処分を行いません。

(c) 当社は、(i)本劣後ローン債権の価値を維持・増加するために必要な資金を借り入れる場合（但し、本社債に劣後する借入に限ります。）、本社債の元利金を支払い、若しくは償還するために必要な資金を借り入れる場合（但し、本社債に劣後する借入に限ります。）、又は後記(d)に記載する業務及びその付帯業務に関連して必要若しくは有益な債務の負担をする場合（当社がA種優先株式又は普通株式を発行する場合において、私募の取扱契約を締結することを含みますがこれに限られません。）かつ(ii)本格付機関が本社債に付与した格付が当該債務負担行為により低下させられるものではないことを事前に本格付機関に確認した場合を除き、借入又はその他一切の債務負担行為をしません。当社は、かかる債務負担行為をする場合には、その旨及びその内容につき、事前に本社債管理者に通知しなければなりません。

(d) 当社は、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき大和証券から当社に譲渡された本劣後ローン債権の取得、管理及び処分並びに本社債の元利金支払債務の弁済並びにその付帯業務以外のことは行わず、かかる業務に必要な資産を購入し、あるいはリースを受けず、かかる業務遂行に必要な従業員を雇用しません。

かかるリスク要因については、上記の本社債管理委託契約における当社の約束により、当社が本社債とは関係のない債務を負担し、本社債権者が不測の損害を被る可能性を低減する対応が図られています。しかしながら、かかるリスクが全て排除されている訳ではありません。

g 当社及び本一般社団法人に係る諸費用の支払原資に関するリスク

当社及び本一般社団法人は、払込期日までに、それぞれ普通株式及びA種優先株式並びに基金の払込金として、それぞれが最終償還日までに支払うことが見込まれる当初費用並びに維持、管理及び運営のための期中費用（以下、本gにおいて「諸費用」と総称します。）の支払資金相当額以上の金銭の払込みを受けました。そして、当該払込金は、最終償還日までのそれぞれの諸費用の支払に充当される予定です。

しかし、最終償還日までに、税制の変更等による公租公課の負担の増加その他の事情により諸費用が当初の想定よりも増加する可能性があります。また、本劣後ローン契約に基づき、本劣後ローン最終弁済日が延長された場合には、本社債の最終償還日は延長後の本劣後ローン最終弁済日の直後の利払日まで延長され、当初想定していない最終償還日後の諸費用の支払が必要となることがあります。

これらの場合において、JA共済連は、当該諸費用増加額相当額の当社のA種優先株式及び本一般社団法人の基金を払い込む義務又は当社若しくは本一般社団法人に代わって当該諸費用増加額相当額を支払う義務をいずれも負担しておらず、さらに、JA共済連以外の第三者もかかる義務を負っていません。従って、当社及び本一般社団法人がJA共済連その他の第三者から当該諸費用増加額相当額の資金調達を行うことができる、又はJA共済連その他の第三者が当社若しくは本一般社団法人に代わって当該諸費用増加額相当額の支払を行うことができる、とは限りません。かかる資金調達を行うことができない場合、当社又は本一般社団法人において諸費用の支払を行うことができず、その結果、当社又は本一般社団法人の業務が遂行できず、ひいては当社又は本一般社団法人が存続できなくなる可能性があります。その結果、当社による本社債の利息の支払又は元金の償還ができなくなる可能性があります。

かかるリスク要因は、本社債の商品性に内在するものであり、当社による対応が不可能な要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

h 当社の破産等に伴うリスク

当社が株式会社として解散又は倒産した場合においては、本社債の元利金の支払は、当該解散又は倒産手続の影響を受け、その結果、当社は本社債の元利金を支払えなくなる可能性があります。また、前記d「本劣後ローン債権及び本社債がそれぞれ上位債権に劣後するリスク」に記載のとおり、当社が株式会社として解散又は倒産した場合においては、本社債権者が本社債の元利金の支払につき当社の他の債権者に劣後する結果、本社債の元利金を支払えなくなる可能性があります。

この点、当社の普通株式（以下「本普通株式」といいます。）は全て本一般社団法人に保有されており、A種優先株式は全てJA共済連に保有されています。A種優先株式については、当社の定款において、全ての事項につき株主総会において議決権を有しないものとされており、かつ、当社が会社法第322条第1項各号に掲げる行為をする場合には、法令に別段の定めがある場合を除き、A種優先株式を有する株主を構成員とする種類株主総会の

決議を要しないものとされています。従って、当社の通常の業務執行や運営に際して議決権を有する株式を保有している者は本一般社団法人のみとなります。

その上で、本一般社団法人及び株式会社東京共同会計事務所（以下「事務受託者」といいます。）は、本一般社団法人及び事務受託者が当社及び本社債管理者に対して差し入れた本社債管理委託契約の締結日と同日付の誓約書において、当社の資産の流動化に係る業務の円滑な遂行が妨げられるおそれのある当社の定款の変更、取締役及び監査役の選解任又は当社の業務遂行及び債務負担を生ぜしめ、又は生ぜしめるおそれのあるいかなる行為も行わず、また、当社の取締役をして行わしめないことを約束しているなどの倒産予防措置がとられているほか、後記⑧「倒産手続の放棄等」記載の倒産不申立特約及び責任財産限定特約が本社債要項に規定され、また、その他当社が締結する各契約においても同種の規定がされているなど倒産手続防止措置もとられており、倒産状態が発生し又は倒産状態が発生したときに倒産手続が開始される可能性を低減する対応が図られています。しかしながら、かかるリスクが全て排除されている訳ではありません。

i 当社が株式会社であることに関するリスク

資産流動化法上の特定目的会社においては、本劣後ローン債権を保有する場合には、資産流動化法第5条第2項及び資産流動化法施行令第3条第3号により、その計画期間（資産の流動化に係る業務の開始期日から終了期日（資産流動化計画に従って、優先出資の消却、残余財産の分配並びに特定社債、特定約束手形及び特定借入れに係る債務の履行を完了する日をいいます。）までの期間であって、特定目的会社が定める期間をいいます。）の上限は50年とされています。本劣後ローンの元本の弁済までの期間は50年を超える可能性があるため、本劣後ローン債権を保有し、本劣後ローン債権の回収金によって本社債の元金の償還及び利息の支払を行う本社債の発行会社として資産流動化法上の特定目的会社を用いることが困難であり、本社債については、その発行会社を、会社法に基づき設立された株式会社としています。従って、当社に対しては、特定目的会社の業務の遂行に関わる規制（資産流動化法第195条から第214条まで）や、特定目的会社の監督に関わる規制（資産流動化法第215条から第221条まで）その他の資産流動化法上の特定目的会社に課される法律上の規制は課されていません。また、本社債は、資産流動化法上の特定社債ではないため、資産流動化法第128条第1項に基づく一般担保は付されていません。

かかるリスク要因は、本社債の商品性に内在するものであり、当社による対応が不可能な要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

j 当社の普通株式の株主が一般社団法人であることに関するリスク

全ての本普通株式は、本一般社団法人により保有されています。本一般社団法人及び事務受託者は、前記h「当社の破産等に伴うリスク」記載の本一般社団法人及び事務受託者が当社及び本社債管理者に対して差し入れた誓約書において、本社債の全額が償還されるまで、第三者に対し、本普通株式を譲渡し、又は質権、譲渡担保権その他の担保権の目的としないことを約束していますが、本一般社団法人について倒産や解散等の事由が発生した場合には、本普通株式が本一般社団法人から当社の倒産隔離上不適切と考えられる者に譲渡され、その結果として当社の運営に悪影響が及ぶリスクがあります。しかしながら、本一般社団法人及び事務受託者は、上記の誓約書において、本一般社団法人につき破産手続開始、再生手続開始又はこれらに類似する倒産手続開始の申立てを行わないことを誓約しており、また、本一般社団法人の理事、監事及び社員も、それぞれ、本一般社団法人及び本社債管理者に差し入れた本社債管理委託契約の締結日と同日付の誓約書において破産手続開始、再生手続開始又はこれらに類似する倒産手続開始の申立権を行使しないことを誓約しています。さらに、本一般社団法人の定款において、本一般社団法人の基金の拠出者は、本一般社団法人の倒産申立てを行うことができないものとされています。また、本一般社団法人及び事務受託者は、上記の誓約書において、当社の資産の流動化に係る業務の円滑な遂行が妨げられるおそれのある債務負担行為をしないこと等、本一般社団法人について破産手続開始原因としての支払停止、支払不能及び債務超過の発生を回避する観点から一定の事項につき誓約しています。従って、これらの誓約が遵守される限りにおいて、かかるリスクが現実化する実際上の可能性は高くないものと当社は考えています。

さらに、本一般社団法人の解散による悪影響の回避のため、解散事由が生じることのないよう、以下のような対応を採っています。一般法人法第148条には解散事由として社員が欠けたことが規定されており、かかる解散事由が生じるリスクを回避又は軽減するため、本一般社団法人の当初の社員を3人とし、当該社員は、それぞれ上記の誓約書において、本一般社団法人を退社する際には、速やかに新たな社員を入社させ、社員を3名維持するよう遵守する旨誓約しています。また、事務受託者は、本一般社団法人との契約において、本一般社団法人の社員が3名を下回らないよう、社員を提供することとされています。以上より、社員が欠けたことで本一般社団法人の解散事由が生じる可能性は低いものと当社は考えています。

また、本一般社団法人の理事の不適切な業務執行又は本一般社団法人の社員の不適切な社員権の行使により、当社の運営に悪影響が及ぶリスクがありますが、本一般社団法人は、上記の誓約書において、当社の資産の流動化に係る業務の円滑な遂行が妨げられるおそれのある当社の定款の変更、当社の取締役及び監査役の選解任その他の業務遂行又は債務負担を生ぜしめないこと等を誓約しており、本一般社団法人の理事、監事及び社員もそれぞれの誓約書において当社の資産の流動化に係る業務の円滑な遂行が妨げられるおそれのある議決権の行使等を

行わないことを誓約しており、これらの誓約が遵守される限り、かかるリスクが現実化する実際上の可能性は高くないものと当社は考えています。なお、本一般社団法人の定款において、理事、監事及び社員については、本一般社団法人の基金の拠出者や本一般社団法人が保有する株式等に係る会社等に対して資産を譲渡した者の役員又は従業員ではないこと等、その資格を有する者が限定され、典型的に適切な業務執行又は権利行使を期待できない者が理事、監事及び社員となる可能性が排除されています。

k 本一般社団法人が他の会社の株式等を取得・保有することに伴うリスク

本一般社団法人は現在、本普通株式及び全共連第1回劣後ローン流動化株式会社の普通株式を保有しているほか、他の会社の株式等を取得・保有しておらず、借入による資金調達を行っていません。しかし、将来において、本一般社団法人が他の会社の株式等を追加的に取得しつつ、かかる株式等の取得、租税支払、維持費用その他全ての支払債務の履行に必要な金額の基金の拠出を受けず、借入金等でその資金調達を行う可能性があります。当該株式等の発行体が社債その他の有価証券の発行又は借入により債務を負担し、かかる債務につき当該株式等の発行体がデフォルトに陥った場合、その株式等の価値が毀損する結果、本一般社団法人は債務超過に陥る可能性があります。また、拠出された基金が本一般社団法人が負担する支払債務の履行以外の目的のために流用された場合、本一般社団法人は支払不能に陥る可能性があります。しかしながら、本一般社団法人は、前記h「当社の破産等に伴うリスク」記載の本一般社団法人及び事務受託者が当社及び本社債管理者に対して差し入れた誓約書において、かかる追加的な株式等を取得する場合には、事前に、その取得代金その他かかる取得に付随関連する一切の費用を支払うために十分な金額の基金の拠出を受け、その基金払込金を一定の口座で管理し、かつ、かかる株式等の追加取得が本社債の格付を低下させることにはならないことを本格付機関に確認すること並びにその負担する債務を履行するために十分な金額の基金の拠出を受け、かつ、かかる基金を一定の口座で管理することを誓約していますので、かかる誓約が遵守される限りにおいて、本一般社団法人が他の株式等の取得を原因として、債務超過や支払不能に陥り、倒産手続が開始することになる可能性は低いと当社は考えています。

l 本社債権者が担保を有しないことに伴うリスク

本社債権者は、当社の特定の資産に対し担保権（対抗要件の具備の有無を問いません。）を有しておらず、当社に関する破産手続、更生手続、再生手続又は特別清算手続の場合、本社債権者は、配当額の分配において無担保債権者として扱われ、当社の資産に対して設定された対抗要件を具備した担保権（抵当権、質権等）等を有する債権者に劣後することになります。

かかるリスク要因に対しては、本社債管理委託契約において、当社は、本社債管理者に対し、前記f「当社が目的以外の債務を負うリスク」記載の約束を行っており、本社債権者に優先又は競合して当社の資産から回収することのできる重要な債権者が他に存在する可能性を低減する対応が図られています。しかしながら、かかるリスクが全て排除されている訳ではありません。

m 法令の変更等に関するリスク

本社債は本社債の発行日現在の法令に基づいて発行され、本劣後ローン契約その他関係する契約も、当該契約締結日時点の法令に基づいて締結されています。これらの時点以降、本社債又は本劣後ローン契約の有効性その他の事項に悪影響を与える法令の変更等が行われた場合、本社債の元金の償還又は利息の支払に悪影響が及ぶ可能性があります。

なお、法令の変更等により、資本事由、税制事由、資本金変更事由、グロスアップ事由又は本社債税制事由が生じ、かつ継続している場合、JA共済連は、その選択により、残存する本劣後ローンの元本の全部を期限前弁済することができ、その場合、当社は、残存する本社債の元金の全部を期限前償還することとされています。本社債の期限前償還が行われるリスクについては、前記b「本社債の元金の償還に関するリスク」(c)「本社債の期限前償還に関するリスク」をご参照下さい。

n 税制の変更等に関するリスク

本報告書提出日以降、税制の変更等により、当社の公租公課の負担が増加した場合、本社債の元金の償還又は利息の支払の資金が不足し、当社による本社債の元金の償還又は利息の支払ができなくなる可能性があります。

なお、税制の変更等により、税制事由、グロスアップ事由又は本社債税制事由が生じ、かつ継続している場合、JA共済連は、その選択により、残存する本劣後ローンの元本の全部を期限前弁済することができ、その場合、当社は、残存する本社債の元金の全部を期限前償還することとされています。本社債の期限前償還が行われるリスクについては、前記b「本社債の元金の償還に関するリスク」(c)「本社債の期限前償還に関するリスク」をご参照下さい。

o 本社債の性質が市場価格に及ぼす影響に関するリスク

前記b「本社債の元金の償還に関するリスク」(a)「本社債の元金が最終償還日に償還されないリスク」及びc「本社債の利息の支払に関するリスク」に記載のとおり、本劣後ローン任意停止若しくは本劣後ローン強制停

止又は本劣後ローン弁済要件の未充足による本劣後ローン最終弁済日の延長により、本社債の利払停止が行われ、又は最終償還日が延長される可能性があります。

利払停止の可能性がある本社債の市場価格は、かかる可能性のない通常の社債に比べて市場価格が不安定なものとなるおそれがあります。仮に、本社債の利払停止が行われ、又は最終償還日が延長された場合、本社債の市場価格に悪影響を及ぼす可能性があります。かかる利払停止又は最終償還日の延長中に本社債を売却する場合、当社が当該繰り延べられた利息の支払又は延長された元金の償還を受けるまで本社債を保有する場合に比べ低い利益しか得られない可能性があります。

また、本社債権者は、かかる利払停止又は最終償還日の延長により特段の救済を得られるわけではありません。なお、本劣後ローン契約上、本劣後ローン任意停止若しくは本劣後ローン強制停止又は本劣後ローン弁済要件の未充足による本劣後ローン最終弁済日の延長によっても、JA共済連の剰余金の配当並びに持分の払戻し及び譲受けは禁止されないものとされています。

このような性質をもつ有価証券である本社債に対する投資者の需要は、市場参加者、監督官庁、格付機関等の第三者による評価により変わり得ます。従って、本社債権者は、本社債を売却する場合において、その取得価格よりも大幅に低い価格でしか売却できず、売却損を生じるリスクがあります。

かかるリスク要因は、本社債の商品性の他、市場の金利水準や、流通市場の整備状況等に内在するものであり、当社による対応が不可能な外的要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

p 市場性に関するリスク

本社債の処分価格は、当社及びJA共済連の財務状態、法制や税制の変更、市場の金利水準等様々な要素の影響を受けます。特に、市場の金利水準が上昇する過程では本社債の価格は下落し、逆に市場の金利水準が低下する過程では本社債の価格は上昇することが想定されます。従って、本社債の第三者への譲渡に際しては、当該譲渡時点における市場の金利水準によって売却損を生じるリスクがあります。

また、本社債の流通市場は現在確立されておらず、本社債の流通性は何ら保証されるものではありません。流通市場の未整備により、本社債の売却が困難となることや、売却価格に悪影響が及ぶ可能性もあります。

かかるリスク要因は、市場の金利水準や、流通市場の整備状況等当社による対応が不可能な外的要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

q 本劣後ローン同順位劣後債務並びに本劣後ローン債務及び本社債に関する通知の時期に関するリスク

本社債の償還（期限前償還を含みます。）、利払停止及び未払残高の支払に関する本社債権者及び本社債管理者への通知並びにその他JA共済連から通知される事項に基づき本社債権者及び本社債管理者に通知される事項に関する通知（以下「本社債JA共済連関連通知」といいます。）は、全て、JA共済連から本劣後ローン債務の弁済（期限前弁済を含みます。）、本劣後ローン任意停止及び本劣後ローン強制停止、本劣後ローン未払残高の支払並びにその他のJA共済連から通知される事項に関する通知（以下「本劣後ローンJA共済連関連通知」といいます。）を当社が受領した後に行われます。従って、JA共済連が本劣後ローン同順位劣後債務に関し、本劣後ローンJA共済連関連通知と同趣旨の通知を同時に行った場合であっても、本社債JA共済連関連通知は、かかるJA共済連の本劣後ローン同順位劣後債務に関する通知に遅れることがあります。その結果、本社債権者は、本劣後ローン同順位劣後債務の債権者が本劣後ローン同順位劣後債務に関するこれらの事項を知るよりも後に、本社債に関するこれらの事項を知ることがあり、かかる通知を受ける時点の差に起因して、本劣後ローン同順位劣後債務の債権者に比べて本社債の売却その他の回収手段につき制約を受ける可能性があるほか、本社債の価格変動その他の影響を受ける可能性があります。

かかるリスク要因は、本社債の商品性に内在するものであり、当社による対応が不可能な要因にかかわるものであるため、当社による特段の対応は図られていません。

⑤ 期限前償還

本社債の元金は、後記4「証券所有者の権利」（3）「償還期限及び償還の方法」②「償還の方法及び期限」b又はcの記載に基づき期限前償還されることがあります。

⑥ 期限の利益喪失事由

本社債は期限の利益喪失に関する特約を付しません。また、本社債権者は、会社法第739条に基づく決議を行う権利を有さず、本社債が同条に基づき期限の利益を喪失せしめられることはありません。

⑦ 利息支払の停止

本社債の利息は、後記4「証券所有者の権利」（2）「利払日及び利息支払の方法」⑥「利息支払の停止」の記載に基づき、その支払が繰り延べられることがあります。

⑧ 倒産手続の放棄等

a 本社債権者は、本社債の元利金全てが償還され又は支払われてから1年と1日を経過するまでの間は、当社又はその資産について、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始、特別清算開始その他法令上適用のあり得る同様の法的倒産手続の開始を自ら又は第三者を通じて申し立てたり、第三者による申立てに対し参加、同意等をしていないものとされています。

b 本社債権者は、当社による本社債に基づく元利金その他の債務の履行は、当社の財産（以下本⑧において「本責任財産」といいます。）のみを責任財産として、かつ、後記3「管理及び運営の仕組み」（1）「資産管理等の概要」①「管理資産の管理」a「管理資産からの支出」(b)の(i)ないし(iv)に記載されている順序及び方法によってのみ行われることに合意し、本社債権者は、ここにおいて、かかる債務の履行による満足を得るために本責任財産以外の財産について、強制執行、差押、仮差押、保全処分その他類似の手続の申立てを行わないことに合意するものとされています。

c 本社債権者は、償還日が到来した場合において、本責任財産から支払が行われた後に、なお本社債について未償還の元金又は未払の利息が存在する場合、本社債の未償還元金総額及び未払利息額が本責任財産が換価された金額を超過する範囲においてその債権を放棄するものとされています。

⑨ 劣後条件等

a 劣後特約（当社劣後事由）

当社は、当社劣後事由の発生後速やかに、本社債権者及び本社債管理者に対して、当社劣後事由が発生した事実を通知します。当社劣後事由が発生し、継続している期間中、本社債に関する一切の請求権は、劣後支払条件（当社劣後事由）が成就した場合にのみ発生します。

b 劣後特約（本劣後ローン劣後事由（本社債））

当社は、本劣後ローン劣後事由が発生した場合である本劣後ローン劣後事由（本社債）が発生した場合には、速やかに、本社債権者及び本社債管理者に対して、本劣後ローン劣後事由（本社債）が発生した事実を通知します。本劣後ローン劣後事由（本社債）が発生し、継続している期間中、本社債に関する一切の請求権は、劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）が成就した場合にのみ発生します。

c 上位債権者に対する不利益変更の禁止

本社債要項の各条項は、いかなる意味においても上位債権者に対して不利益を及ぼす内容に変更されてはならず、そのような変更の合意はいかなる意味においても、またいかなる者に対しても効力を生じません。この場合に、上位債権者とは、当社に対し、当社上位債務に係る債権を有する全ての者及びJA共済連に対し、本劣後ローン上位債務に係る債権を有する全ての者をいいます。

d 劣後特約に反する支払の禁止

劣後事由発生後、劣後支払条件（当社劣後事由）及び劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）が成就していないにもかかわらず、本社債の元利金の全部又は一部が本社債権者に支払われた場合には、その支払は無効とし、当該本社債権者は受領した元利金を直ちに当社に返還するものとされています。

e 相殺禁止

- (a) 当社について清算手続が開始され、かつ継続している場合、破産手続開始の決定がなされ、かつ破産手続が継続している場合、更生手続開始の決定がなされ、かつ更生手続が継続している場合、再生手続開始の決定がなされた場合（但し、再生手続開始の決定がなされた後、簡易再生の決定若しくは同意再生の決定が確定した場合、再生計画不認可の決定が確定した場合、再生手続開始決定の取消若しくは再生手続の廃止により再生手続が終了した場合、又は再生計画取消の決定が確定した場合を除きます。）、又は日本法によらない外国における清算手続、破産手続、更生手続、再生手続若しくはこれらに準ずる手続が行われている場合には、劣後支払条件（当社劣後事由）が成就しない限りは、本社債権者は、当社に対して負う債務と本社債に基づく元利息の支払請求権を相殺してはなりません。
- (b) 本劣後ローン劣後事由（本社債）が発生し、継続している場合には、本社債権者は、劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）が成就しない限りは、当社に対して負う債務と本社債に基づく元利息の支払請求権を相殺してはなりません。

⑩ 本社債に関する信用格付

本社債について、当社は、JCRからAA-の予備格付を2022年9月9日付で取得し、その後、JCRからAA-の本格付を本社債の払込期日に取得しました。なお、2023年2月末日においても当格付に変更がないことを本格付機関のホームページで確認しております。

JCRの信用格付は、格付対象となる債務について約定通り履行される確実性の程度を等級をもって示すものです。

JCRの信用格付は、債務履行の確実性の程度に関してのJCRの現時点での総合的な意見の表明であり、当該確実性の程度を完全に表示しているものではありません。また、JCRの信用格付は、デフォルト率や損失の程度を予想するものではありません。JCRの信用格付の評価の対象には、価格変動リスクや市場流動性リスク等、債務履行の確実性の程度以外の事項は含まれません。

JCRの信用格付は、格付対象の発行体の業績、規制等を含む業界環境等の変化に伴い見直され、変動します。また、JCRが、その信用格付の付与にあたり利用した情報は、JCRが格付対象の発行体及び正確で信頼すべき情報源から入手したのですが、当該情報には、人為的、機械的又はその他の理由により誤りが存在する可能性があります。

⑪ 振替機関に関する事項

本社債の振替機関は、保管振替機構です。

(2) 【管理資産に係る法制度の概要】

当社は、2022年8月10日付で設立登記を行った株式会社です。当社の行いする業務は、当社の定款に目的として記載されている、劣後ローン債権の取得並びにその保有、管理及び処分、当該劣後ローン債権を裏付けとする社債の発行、並びにこれらに附帯又は関連する一切の業務とされており、かかる目的に従って業務を営んでいます。

当社の義務及び責任に関しては、破産法等の日本法上適用ある倒産処理法の適用を受け、社債を発行及び募集するにあたっては、会社法、社債等振替法及び金融商品取引法の適用を受けています。

管理資産を構成する本劣後ローン債権は、民法及び商法のほか、農業協同組合法及びその他の関連法令、告示並びにそれらの解釈の適用を受けています。本劣後ローン債権は、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき、原保有者である大和証券から株式会社である当社に譲渡され、当該譲渡については本劣後ローン債権譲渡契約に基づき本劣後ローン債権の債務者であるJA共済連が確定日付ある証書による承諾を行うことにより当該譲渡の日に債務者及び債務者以外の第三者対抗要件が具備されました。

本劣後ローン債権に関する農業協同組合法及びその他の関連法令、告示並びにそれらの解釈の適用の態様については、前記（1）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元本の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」b「本社債の元本の償還に関するリスク」及びc「本社債の利息の支払に関するリスク」をご参照下さい。

（３）【管理資産の基本的性格】

管理資産は、本劣後ローン契約に基づき大和証券が取得し、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき大和証券から当社に譲渡されたJA共済連に対する1個の貸付債権である本劣後ローン債権です。

本劣後ローン契約の内容については、後記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」をご参照下さい。また、当該管理資産たる本劣後ローン債権の債務者であるJA共済連の概要については、後記第4「発行者及び関係会社法人情報」2「原保有者その他関係法人の概況」「その他関係法人の概況」「全国共済農業協同組合連合会」をご参照下さい。

（４）【管理資産の沿革】

管理資産を構成する資産である本劣後ローン債権は、本劣後ローン契約に基づき大和証券が取得し、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき2022年10月18日に原保有者である大和証券から当社に譲渡されました。

当社は、本社債要項及び本社債管理委託契約に定められたところによる場合並びに本社債管理者の事前の書面による承諾がある場合を除き、本社債の発行から償還時まで当該管理資産を保有し続けます。

（５）【管理資産の管理体制等】

①【管理資産の関係法人】

大和証券は、本劣後ローン契約に基づき、管理資産である本劣後ローン債権を取得した上で、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき管理資産を当社に譲渡しました。本劣後ローン債権の移転と同時に、当社は、大和証券が有する本劣後ローン契約上の地位の一切を承継しました。

JA共済連は、本劣後ローン契約に基づき大和証券から貸し付けを受け、本劣後ローン債権の債務者となりました。

当社は、本資産管理受託会社である三井住友信託銀行に対して、本資産管理委託契約に基づき、本劣後ローン債権の管理及び処分に関する業務を委託しています。

三井住友信託銀行は、本社債の社債管理者です。社債管理者は、その管理の委託を受けた社債につき、社債権者のために社債に係る債権の弁済を受け、又は社債に係る債権の実現を保全するために必要な一切の裁判上又は裁判外の行為をする権限を有し、これらの行為等をするために必要があるときは、裁判所の許可を得て、当該社債を発行した会社の業務及び財産の状況を調査することができます（会社法第705条第1項及び第4項）。

②【管理資産の管理及び処分に関する基本的態度】

本資産管理受託会社である三井住友信託銀行は、本資産管理委託契約において、以下の事項を遵守しています。

- a 本資産管理受託会社は本劣後ローン債権譲渡契約に基づいて当社が取得したJA共済連に対する本劣後ローン債権、その回収金、本社債関連口座内の預金及びその余裕金からの投資その他当社に帰属すべき資産（以下本②において「本資産等」といいます。）を、自己の固有財産その他の財産と分別して管理します。
- b 本資産管理受託会社は、当社の求めに応じ、本資産等の管理及び処分の状況について説明します。
- c 本資産管理受託会社は、本資産等の管理及び処分の状況を記載した書類を主たる事務所である東京都千代田区丸の内一丁目4番1号所在の本資産管理受託会社たる三井住友信託銀行株式会社資産金融部に備え置き、当社の求めに応じ、これを閲覧させます。
- d 本資産管理受託会社は、当社の同意なく本資産管理委託契約に定める業務の再委託を行いません。

③【管理資産の管理体制】

a 管理資産の管理を行う会社の統治に関する事項

(a) 法人の機関の内容

管理資産である本劣後ローン債権の管理者は、本資産管理受託会社としての三井住友信託銀行です。

三井住友信託銀行は、迅速な経営判断による柔軟かつ機動的な業務執行を推進するとともに、監査・監督機能の維持・強化を図るため、監査等委員会設置会社の形態を採用しております。社外取締役が過半数を占める「監査等委員会」を設置しており、三井住友トラスト・ホールディングス株式会社の監査委員会と連携した監査を行っております。

(i) 取締役会

2019年6月の機関設計の移行に伴い、個別の業務執行に係る決定権限を取締役会から業務執行取締役へ大幅に委任しており、取締役会は、経営の基本方針を決定するとともに、業務執行取締役等の職務の執行を監督することをその中心的役割としております。また、取締役21名のうち6名を社外取締役とすることにより、経営の透明性向上と監督機能強化を図っております。

(ii) 監査等委員会

三井住友信託銀行は監査等委員会設置会社であり、監査等委員会は5名の監査等委員である取締役で構成されており、うち3名は社外取締役となっております。

監査等委員会は、取締役会等の重要な会議への出席、取締役等から職務の執行状況についての報告聴取、内部監査部からの報告聴取、重要書類の閲覧等により、業務執行取締役の職務執行状況を監査いたします。

(iii) 経営会議等

三井住友信託銀行では、経営の意思決定プロセスにおける相互牽制機能の強化と透明性の確保を図るため、経営に関する重要事項を協議又は決定する機関として経営会議を設置しております。経営会議では、取締役会で決定した基本方針に基づき、業務執行上の重要事項について協議又は決定を行うほか、取締役会決議事項の予備討議等を行っております。

また、重要な投融資案件を協議又は決定する「投融資審議会」、ALMに関する方針等を協議又は決定する「ALM審議会」、受託財産の運用に関する重要事項を協議又は決定する「受託財産運用審議会」を設置しているほか、「商品審査委員会」、「オペレーショナル・リスク管理委員会」、「コンプライアンス委員会」等各種委員会を設置しております。

(b) 内部統制システムの整備状況

三井住友信託銀行の取締役会は、親会社である三井住友トラスト・ホールディングス株式会社（(b)内部統制システムの整備状況において、以下「持株会社」といいます。）の経営管理のもと、持株会社、三井住友信託銀行及びその子会社等から成る企業集団の信託銀行として三井住友信託銀行及びその子会社等の経営管理を担う責任を十分に認識し、取締役会の「内部統制基本方針」に関する決議に基づいて、「取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制その他三井住友信託銀行の業務並びに三井住友信託銀行及びその子会社等から成る企業集団の業務の適正を確保するために必要な体制」を、以下のとおり整備しています。

(i) コンプライアンス（法令等遵守）体制の整備について

- i 持株会社が定めるグループのコンプライアンスに関する基本方針等を踏まえ、三井住友信託銀行のコンプライアンスに関する基本方針について定める。
- ii コンプライアンスに関する重要事項については、取締役会で決議・報告を行う。
- iii 持株会社が定めるグループの利益相反管理に関する基本方針を踏まえ、三井住友信託銀行において顧客の利益が不当に害されることのないよう管理態勢を整備する。
- iv 本部にコンプライアンスに関する統括部署を置き、また、各部の責任者・担当者を定める。
- v 毎年度、コンプライアンスを実現させるための具体的な実践計画（コンプライアンス・プログラム）を持株会社の承認を得て策定するとともに、子会社等の計画策定を指導する。あわせてその進捗・達成状況を把握・評価する。
- vi 役員及び社員のための手引書（コンプライアンス・マニュアル）を定め、コンプライアンスに関する教育・研修を継続的に実施する。
- vii 役員及び社員に対し三井住友信託銀行における業務運営に係る法令違反行為等について報告する義務を課するとともに、役員及び社員等が社内・社外の窓口に通報できるコンプライアンス・ホットライン制度を設置する。
- viii 反社会的勢力に対しては、毅然とした態度で臨み、一切の関係を持たない。不当要求等の介入に対しては、警察等の外部専門機関との緊密な提携関係のもと、関係部署が連携・協力して組織的に対応し、利益の供与は絶対に行わない。
- ix マネー・ローンダリング及びテロ資金供与は、健全な金融システムに対する重大な脅威であり、マネー・ローンダリング及びテロ資金供与に毅然とした態度で臨み、関連法令等を厳守する。

(ii) リスク管理体制の整備について

- i 持株会社が定めるグループのリスク管理基本方針を踏まえ、三井住友信託銀行のリスク管理に関する基本方針について定める。
- ii リスク管理に関する重要事項については、取締役会で決議・報告を行う。
- iii 三井住友信託銀行は、3つの防衛線を基本としたリスク管理体制を構築する。
- iv 本部にリスク管理に関する統括部署を置き、リスク・カテゴリー毎にリスク管理部署を置く。
- v リスク管理に関する持株会社が定めるグループの方針等を踏まえ、毎年度、三井住友信託銀行における計画（内部管理態勢整備計画）を持株会社の承認を得て策定するとともに、子会社等のリスク管理体制を整備する。
- vi 役員及び社員に対しリスク管理に関する教育・研修を継続的に実施する。
- vii 緊急事態に備えた業務継続に係る管理活動を定め、持株会社が定めるグループの正常な業務活動の維持、継続を図る。

(iii) 業務執行体制の整備について

- i 主要な取締役会決議・報告事項については、社長を議長とし関係役員が参加する経営会議において、予備討議を行う。

- ii 業務の円滑かつ適切な運営を図るべく、三井住友信託銀行における組織の機構・分掌並びに役員及び社員の職制・権限に関する基本的事項を、取締役会が定める。
- iii 社内規定は関連する法令等及び持株会社が定める基本方針等に準拠して制定するとともに、当該法令等の改廃があったときは、速やかに所要の改廃を行う。
- (iv) 経営の透明性確保について
 - i 会計処理の適切性及び財務報告の信頼性を確保するため、財務報告に係る内部統制を整備するとともに、その有効性を評価する。
 - ii 経営関連情報を適切に管理し、適時、正確かつ公平に開示する。
- (v) グループ管理体制の整備について
 - i 三井住友信託銀行のみならず子会社等のコンプライアンス体制及びリスク管理体制を整備する。
 - ii グループ内取引等を実施する場合は、アームズレングス・ルールに基づく検証等を行うとともに、持株会社グループの経営に重大な影響を与える可能性のあるものは持株会社に対し事前協議を行う。また、子会社等の行う重要度の高いグループ内取引等は、三井住友信託銀行がリスク管理面、コンプライアンス面等での検証を行う。
 - iii 子会社等は業務執行状況・財務状況等を定期的に三井住友信託銀行に報告する。
 - iv 三井住友信託銀行は子会社等の業務の規模・特性に応じ、子会社等の業務運営の適正性及び効率性を管理する。
- (vi) 情報の保存・管理体制の整備について
 - i 株主総会、取締役会及び経営会議について、議事の経過及び要領等を記録する議事録を作成し、関連資料とともに保存する。
 - ii 情報管理に関する組織体制や重要度に応じた管理区分など、情報の保存及び管理に関する基本的事項を、取締役会が定める。
- (vii) 内部監査体制の整備について
 - i 業務執行部門から独立し十分な牽制機能が働く内部監査部門を設置する。
 - ii 持株会社が定めるグループの内部監査基本方針を踏まえ、内部監査計画を策定の上、内部監査部門が各業務執行部門及び必要に応じて子会社等に対して監査を実施し、改善すべき点の指摘・提言等を行う。
 - iii 内部監査の結果等及び内部監査計画の進捗状況・達成状況を適時適切に取締役会及び監査等委員会に報告する。
- (viii) 監査等委員会監査に関する体制の整備について
 - i 監査等委員会の職務を補助すべき社員等
 - (イ) 監査等委員会の職務の執行を補助するため、監査等委員会室を設置し、室長1名を含む相当数の取締役、執行役員又は社員を配置する。
 - (ロ) 監査等委員会室員は監査等委員会の指揮命令のもとで監査等委員会の職務を補助する業務を行う。
 - (ハ) 監査等委員会室員の人事及び処遇に関する事項については監査等委員会と事前に協議する。
 - (ニ) 取締役は、監査等委員会室員が監査等委員会の職務を補助する業務を行う上で、不当な制約を受けることがないよう配慮する。
 - ii 監査等委員会への報告体制
 - (イ) 取締役（監査等委員である取締役を除く）、執行役員及び社員は、三井住友信託銀行若しくは子会社等に著しい損害を与えるおそれのある事実、信用を著しく失墜させる事実、内部統制の体制や手続等に関する重大な欠陥や問題についての事実、又は法令若しくは定款に違反する重大な事実を知った場合、直ちに監査等委員会へ報告しなければならない。
 - (ロ) コンプライアンス統括部は、コンプライアンス・ホットライン制度による通報内容について、その都度、監査等委員会に対して報告しなければならない。
 - (ハ) 内部監査部は、同部による三井住友信託銀行及び子会社等に対する内部監査の実施状況及び結果について、定期的に又は監査等委員会の求めに応じ、監査等委員会に対して報告しなければならない。
 - (ニ) 取締役（監査等委員である取締役を除く）、執行役員及び社員は、業務執行の状況その他の事項について監査等委員会から報告を求められた場合は、速やかに監査等委員会に対して報告しなければならない。
 - (ホ) 前記(イ)、(ロ)及び(ニ)に掲げる事項について、子会社等の取締役、監査役、執行役員及び社員又はこれらの者から報告を受けた者は、前記(イ)に掲げる事実を知った場合は直ちに、子会社等の内部通報制度による前記(ロ)に掲げる通報内容についてはその都度、及び子会社等の前記(ニ)に掲げる事項について監査等委員会から報告を求められた場合は速やかに、三井住友信託銀行の監査等委員会に報告する。
 - (ヘ) 監査等委員会は、必要に応じ、前記(イ)から(ニ)に掲げる事項について、前記(イ)から(ホ)に掲げる者に対して報告を求めることができる。

- (ト) 前記(イ)から(ヘ)に基づく報告をした者について、当該報告をしたことを理由として不利益な取扱いを行うことを禁止し、その旨を周知徹底する。

iii その他監査等委員会監査の実効性確保のための体制

- (イ) 取締役（監査等委員である取締役を除く）、執行役員及び社員は、監査等委員会の監査活動に誠実に協力する。
- (ロ) 監査等委員は、取締役会のほか、監査等委員会が必要と認める会議（子会社等における会議を含む。）に出席することができる。
- (ハ) 代表取締役は、定期的に又は監査等委員会の求めに応じ、監査等委員会と意見交換を行う。
- (ニ) 内部監査部門は、監査等委員会に対して、内部監査計画の策定に係る事前協議を行い同意を得るほか、監査等委員会が指示するときは、当該指示に従い調査等を行う。監査等委員会による調査等の指示は、取締役その他の者の指示に優先する。
- (ホ) 代表取締役又は人事部門を担当する取締役は、監査等委員会に対して、内部監査部門を担当する取締役、執行役員のほか、内部監査部門の一定以上の職位の任免に係る事前協議を行い同意を得る。
- (ヘ) 内部監査部門以外の財務、リスク管理、コンプライアンスなど内部統制に係わる部署においても、監査等委員会との円滑な連携に努める。
- (ト) 三井住友信託銀行は、監査の実効性を確保するため、監査等委員会及び監査等委員の職務の執行に必要な費用を支出する。

(ix) 監査等委員会と内部監査部門、会計監査人の連携状況

監査等委員会は、毎月1回内部監査部と定期的に会合をもち、内部監査計画の事前協議や内部監査結果の報告に加え、相互に意見・情報交換を実施し、内部監査の実施状況やリスク認識等についての報告を受けております。また、監査等委員会は、内部監査部とともに会計監査人と定期的に会合をもち、監査及び会計に関する情報、会計監査計画、監査の実施状況及び監査結果等について報告を受け、財務報告や内部統制の状況、改善提案についての意見交換を行っております。必要に応じて随時意見交換及び情報交換を実施する等、これらの内部監査部及び会計監査人との連携を緊密に行うことで監査の実効性及び効率性確保を図っております。

b 管理資産の管理を行う会社による管理資産に関するリスク管理体制の整備の状況

本資産管理受託会社は、管理資産の管理業務を資産金融部で行います。管理業務のための本資産管理委託契約その他の合意及び法令の遵守状況については、資産金融部により定期的に確認される体制が整備されております。

2【管理資産を構成する資産の概要】

（1）【管理資産を構成する資産に係る法制度の概要】

管理資産は、本劣後ローン契約に基づき大和証券が取得し、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき大和証券から当社に譲渡されたJA共済連に対する1個の劣後特約付の貸付債権である本劣後ローン債権です。

本劣後ローン債権には、民法及び商法が適用されるほか、貸金業法が適用されています。同法は、貸金業を営む者について登録制度を実施し、その事業に対し必要な規制を行う等により、その業務の適正な運営を確保し、資金需要者等の利益の保護等を図っています。原保有者である大和証券は、貸金業者として登録されています。当社にも、債権を譲り受けた者の書面交付義務についての規定のほか一定の規定が適用されています。

本劣後ローン債権には、農業協同組合法及びその他の関連法令、告示並びにそれらの解釈も適用されていますが、これらの農業協同組合法及び若しくはその他の法令、告示又はそれらの解釈の適用の態様については、前記1「概況」（1）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」b「本社債の元金の償還に関するリスク」及びc「本社債の利息の支払に関するリスク」をご参照下さい。

大和証券は、本劣後ローン契約に基づき、本劣後ローン貸付実行日において貸し付けを行い、同契約に従い、同日に本劣後ローン債権が発生しました。

劣後特約付の貸付債権の譲渡については、民法上の通常の債権の譲渡に関する対抗要件の規定が適用されています。本劣後ローン債権譲渡契約に基づく本劣後ローン債権の原保有者である大和証券から当社に対する譲渡については本劣後ローン債権が発生した2022年10月18日に効力が発生しており、本劣後ローン債権の債務者であるJA共済連の確定日付ある証書による承諾の方法により債務者及び債務者以外の第三者対抗要件が具備されています。

本劣後ローン債権の債務者に対する破産・強制執行等に関しては、破産法、民事再生法、特定調停法、農業協同組合法（清算及び業務の全部若しくは一部の停止若しくは財産の供託命令、又は財産の処分の禁止命令、若しくは制限命令その他監督上必要な命令等の場合）及び民事執行法の適用を受けます。破産法は、債務者がその債務を完済することができない場合に、債務者の総財産を全ての債権者に公平に弁済する裁判上の手続を規定する法律です。民事再生法は、債務者の事業又は経済生活の再生を図るための手続を規定する法律です。特定調停法は、支払不能に陥るおそれのある債務者等の経済再生に資するための特定調停の手続を定める法律です。民事執行法は、強制執行・担保権の実行等民事執行に関する手続を定める法律です。清算及び業務の全部若しくは一部の停止若しくは財産の供託命令、又は財産の処分の禁止命令、若しくは制限命令その他監督上必要な命令等の場合には、農業協同組合法中の当該手続を定める条項が適用されます。

（2）【管理資産を構成する資産の原保有者の事業の概要】

管理資産を構成する資産の原保有者である大和証券の事業概要については、後記第4「発行者及び関係法人情報」

2「原保有者その他関係法人の概況」「原保有者の概況」をご参照下さい。

（3）【管理資産を構成する資産の内容】

① 本劣後ローン債権の概要

管理資産は、本劣後ローン契約に基づき大和証券が取得し、本劣後ローン債権譲渡契約に基づき大和証券から当社に譲渡されたJA共済連に対する1個の劣後特約付の貸付債権である本劣後ローン債権です。

本劣後ローン契約に基づく本劣後ローン債権の概要は以下のとおりです。

a 金額

金489億円

b 用途

自己資本の充実を目的に、調達手段の多様化及び資本政策の柔軟性を確保する観点から本劣後ローンによる資金調達を行い、本劣後ローンの手取金を、運転資金等に充当します。

c 実行日

本劣後ローン貸付実行日

d 本劣後ローン最終弁済日

2052年10月21日（当該日が銀行営業日でない場合には、その前銀行営業日とします。）の3銀行営業日前の日をいい、後記e「弁済の方法及び期限」（a）の記載に基づき延長された場合には、当該延長後の日をいいます。

e 弁済の方法及び期限

(a) 本劣後ローンの元本は、後記(b)の記載に基づき期限前弁済される場合を除き、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、本劣後ローン最終弁済日に、その残存総額を、本劣後ローン最終弁済日を本劣後ローン利払日とする本劣後ローン利息及び本劣後ローン未払残高の支払とともに弁済します。

本劣後ローン弁済要件が充足されないことにより本劣後ローンが本劣後ローン最終弁済日に弁済されない場合、本劣後ローン最終弁済日は次の本劣後ローン利払日まで延長され、その後も同様とし、かかる延長が継続する間も後記g「利息支払の方法及び制限」（a）「利息支払の方法」に従って利息が発生するものとします。

JA共済連は、本劣後ローン最終弁済日（延長後の本劣後ローン最終弁済日を含みます。）より30日以上60日以内の事前の通知を行うことにより、本劣後ローン貸付人に対して、本劣後ローン弁済要件の充足の有無を通知するものとします。本劣後ローン弁済要件の充足の有無については当該通知の内容が本劣後ローン貸付人を拘束するものとします。

(b) JA共済連は、以下の場合において本劣後ローンを弁済することができます。

(i) JA共済連の選択による弁済

JA共済連は、その選択により、本劣後ローン任意弁済日に、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、本劣後ローン貸付人に対し本劣後ローン任意弁済日より30日以上60日以内の事前の通知（本劣後ローン弁済要件を充足した旨の記載を含むものとし、撤回不能とします。）を行うことにより、本劣後ローン任意弁済日時点で残存する本劣後ローンの元本の全部（一部は不可）を、本劣後ローン任意弁済日を本劣後ローン利払日とする本劣後ローン利息及び本劣後ローン未払残高の支払とともに弁済することができます。

(ii) 資本事由による弁済

本劣後ローン貸付実行日以降に資本事由が生じ、かつ継続している場合、JA共済連は、その選択により、JA共済連が当該弁済のために設定する日である資本事由弁済日に、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、本劣後ローン貸付人に対し資本事由弁済日より30日以上60日以内の事前の通知（撤回不能とします。）を行うことにより、資本事由弁済日時点で残存する本劣後ローンの元本の全部（一部は不可）を、i(イ)資本事由弁済日が本劣後ローン利払日以外の日である場合、資本事由弁済日の3銀行営業日後の日の直前の利息計算基準日の翌日（当日を含みます。）から資本事由弁済日の3銀行営業日後の日（当日を含みます。）までの期間を計算期間とする本劣後ローン経過利息又は(ロ)資本事由弁済日が本劣後ローン利払日に該当する場合の本劣後ローン利息及びii本劣後ローン未払残高の支払とともに弁済することができます。

(iii) 資本性変更事由による弁済

本劣後ローン貸付実行日以降に資本性変更事由が生じ、かつ継続している場合、JA共済連は、その選択により、JA共済連が当該弁済のために設定する日である資本性変更事由弁済日に、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、本劣後ローン貸付人に対し資本性変更事由弁済日より30日以上60日以内の事前の通知（撤回不能とします。）を行うことにより、資本性変更事由弁済日時点で残存する本劣後ローンの元本の全部（一部は不可）を、i(イ)資本性変更事由弁済日が本劣後ローン利払日以外の日である場合、資本性変更事由弁済日の3銀行営業日後の日の直前の利息計算基準日の翌日（当日を含みます。）から資本性変更事由弁済日の3銀行営業日後の日（当日を含みます。）までの期間を計算期間とする本劣後ローン経過利息又は(ロ)資本性変更事由弁済日が本劣後ローン利払日に該当する場合の本劣後ローン利息及びii本劣後ローン未払残高の支払とともに弁済することができます。

(iv) 税制事由による弁済

本劣後ローン貸付実行日以降に税制事由が生じ、かつ継続している場合、JA共済連は、その選択により、JA共済連が当該弁済のために設定する日である税制事由弁済日に、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、本劣後ローン貸付人に対し税制事由弁済日より30日以上60日以内の事前の通知（撤回不能とします。）を行うことにより、税制事由弁済日時点で残存する本劣後ローンの元本の全部（一部は不可）を、i(イ)税制事由弁済日が本劣後ローン利払日以外の日である場合、税制事由弁済日の3銀行営業日後の日の直前の利息計算基準日の翌日（当日を含みます。）から税制事由弁済日の3銀行営業日後の日（当日を含みます。）までの期間を計算期間とする本劣後ローン経過利息又は(ロ)税制事由弁済日が本劣後ローン利払日に該当する場合の本劣後ローン利息及びii本劣後ローン未払残高の支払とともに弁済することができます。

(v) グロスアップ事由による弁済

本劣後ローン貸付実行日以降にグロスアップ事由が生じ、かつ継続している場合、JA共済連は、その選択により、JA共済連が当該弁済のために設定する日であるグロスアップ事由弁済日に、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、本劣後ローン貸付人に対しグロスアップ事由弁済日より30日以上60日以内の事前の通知（撤回不能とします。）を行うことにより、グロスアップ事由弁済日時点で残存する本劣後ローンの元本の全部（一部は不可）を、i(イ)グロスアップ事由弁済日が本劣後ローン利払日以外の日である場合、グロス

アップ事由弁済日の3銀行営業日後の日の直前の利息計算基準日の翌日（当日を含みます。）からグロスアップ事由弁済日の3銀行営業日後の日（当日を含みます。）までの期間を計算期間とする本劣後ローン経過利息又は(ロ)グロスアップ事由弁済日が本劣後ローン利払日に該当する場合の本劣後ローン利息及びii本劣後ローン未払残高の支払とともに弁済することができます。

(vi) 本社債税制事由による弁済

本劣後ローン貸付実行日以降に本社債税制事由が生じ、かつ継続している場合、JA共済連は、その選択により、JA共済連が当該弁済のために設定する日である本社債税制事由弁済日に、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、本劣後ローン貸付人に対し本社債税制事由弁済日より30日以上60日以内の事前の通知（撤回不能とします。）を行うことにより、本社債税制事由弁済日時点で残存する本劣後ローンの元本の全部（一部は不可）を、i（イ）本社債税制事由弁済日が本劣後ローン利払日以外の日である場合、本社債税制事由弁済日の3銀行営業日後の日の直前の利息計算基準日の翌日（当日を含みます。）から本社債税制事由弁済日の3銀行営業日後の日（当日を含みます。）までの期間を計算期間とする本劣後ローン経過利息又は(ロ)本社債税制事由弁済日が本劣後ローン利払日に該当する場合の本劣後ローン利息及びii本劣後ローン未払残高の支払とともに弁済することができます。

(vii) 本社債買入消却に伴う弁済

本劣後ローン貸付人が当社である場合において、当社が本社債買入消却を行う場合においては、本劣後ローン貸付人は、JA共済連と本社債買入消却及びこれに伴う本劣後ローンの元本の弁済に関する事前の書面による合意である本社債買入消却関連合意を行うものとします。

本社債買入消却関連合意が成立した場合には、JA共済連は、本社債買入消却関連合意に従い、本劣後ローン弁済要件を充足した上で、i 本社債買入消却関連合意に規定する金額の本劣後ローンの元本を弁済し、ii 本社債買入消却関連合意に規定する金額の本劣後ローン利息（経過利息を含みます。）及び本劣後ローン未払残高（本社債買入消却関連合意において支払が合意された場合及び当該合意された金額に限ります。）を支払います。

JA共済連が本社債買入消却関連合意に基づき本劣後ローンの元本の弁済として支払った金額にかかわらず、本社債買入消却関連合意に基づく本劣後ローンの元本の弁済に伴い、本社債買入消却によって買入れられる本社債の金額相当額の本劣後ローンの元本が弁済されたものとみなされ、かつ、本社債買入消却によって買入れられる本社債の金額相当額の本劣後ローンの元本に対応する利息（経過利息を含みます。）及び本劣後ローン未払残高が支払われたものとみなされるものとします。

- (c) 前記(a)又は(b)に基づき本劣後ローンが弁済されるべき日である本劣後ローン弁済日が銀行営業日でない場合は、その支払は前銀行営業日にこれを繰り上げます。なお、かかる繰り上げは、本劣後ローン弁済日（当日を含みます。）までの本劣後ローン経過利息又は本劣後ローン弁済日が本劣後ローン利払日に該当する場合の本劣後ローン利息の金額に影響を与えるものではありません。

- (d) 本劣後ローンの元本の弁済については、本e「弁済の方法及び期限」の記載のほか、後記j「劣後条件等」

(a)「劣後特約」記載の劣後特約に従います。

f 利率

- (a) 本劣後ローンの利率は、(i)本劣後ローン貸付実行日の翌日（当日を含みます。）から2027年10月21日（当日を含みます。）までは年1.100%とし、(ii)2027年10月21日の翌日（当日を含みます。）から2032年10月21日（当日を含みます。）までは、利率改定日に改定され、当該利率改定日に係る改定後利率適用期間については当該改定後利率適用期間に係る利率基準日における5年国債金利に1.035%（年率）を加えた値とし、(iii)2032年10月21日の翌日（当日を含みます。）以降は、各利率改定日に改定され、当該各利率改定日に係る改定後利率適用期間については当該各改定後利率適用期間に係る利率基準日における5年国債金利に2.035%（年率）を加えた値とします。但し、当該利率は0%を下回りません。

- (b) 前記(a)(ii)及び(iii)における「5年国債金利」とは、利率基準日のレートとして利率決定日の午前9時30分（東京時間）以降に国債金利情報ページに表示されている5年国債金利をいいます。

ある改定後利率適用期間に係る利率決定日の午前10時（東京時間）に、国債金利情報ページに利率基準日のレートとしての5年国債金利が表示されていない場合、又は国債金利情報ページが利用不能となった場合には、利率決定日に本劣後ローン貸付人は全ての参照国債ディーラーに対し、利率基準日の午後3時（東京時間）現在提示可能であった参照5年国債の売買気配の仲値の半年複利利回り（本項において、以下「提示レート」といいます。）の提示を求めるものとします。

提示レートが4つ以上の参照国債ディーラーから提示された場合には、その最も高い値と低い値をそれぞれ1つずつ除き、残りの提示レートの算術平均値（小数第4位を四捨五入します。本(b)において以下同じです。）を当該改定後利率適用期間における各本劣後ローン利息計算期間に適用される5年国債金利とします。提示レートが2つ又は3つの参照国債ディーラーから提示された場合には、それらの算術平均値を当該改定後利率適用期間における各本劣後ローン利息計算期間に適用される5年国債金利とします。提示レートが2つに満たなかった場合には、当該利率決定日の午前10時（東京時間）において国債金利情報ページに表示済みの最新の5

年国債金利を当該改定後利率適用期間における各本劣後ローン利息計算期間に適用される5年国債金利とします。

本(b)における「参照国債ディーラー」とは、本劣後ローン貸付人が本社債管理者と協議の上で国債市場特別参加者（財務省が指定する国債市場特別参加者をいいます。）又は市場で国債の売買を活発に行っていると認められる金融機関から最大5者選定する金融機関をいいます。

本(b)における「参照5年国債」とは、参照国債ディーラーから本劣後ローン貸付人が選定する金融機関が選定する国債で、当該改定後利率適用期間の最終日又はその前後に満期が到来し、選定時において市場の慣行として5年満期の円建て社債の条件決定において参照するものをいいます。

- (c) 本劣後ローン貸付人は、利率決定日に、前記(a)(ii)及び(iii)並びに前記(b)に定める各利率を確認し、当該利率決定日から7銀行営業日以内に当該各利率をJA共済連に書面で通知します。

g 利息支払の方法及び制限

(a) 利息支払の方法

(i) 本劣後ローン利息は、本劣後ローン貸付実行日の翌日（当日を含みます。）からこれを付し、当初利率適用期間においては、i 第1回の本劣後ローン利払日に、(イ) 1円に前記 f 「利率」(a)(i)に記載の利率を乗じ、2で除して算出した金額（小数点以下13桁未満切捨）と、(ロ) 上記イの金額に、本劣後ローン貸付実行日の翌日（当日を含みます。）から2022年10月21日（当日を含みます。）までの実日数を乗じ、183で除して算出した金額（小数点以下13桁未満切捨）の合計額に、本劣後ローンの元本金額を乗じて算出した金額（円位未満の端数が生じた場合にはこれを切り捨てます。）を、ii 第2回以降の各本劣後ローン利払日に、同日までの実日数にかかわらず、本劣後ローンの元本金額に前記 f 「利率」(a)(i)に記載の利率を乗じ、2で除して算出した金額を支払います。当初利率適用期間における(イ) 第1回の本劣後ローン利払日に支払われるべき利息の金額は273,359,016円であり、(ロ) 第2回以降の各本劣後ローン利払日に支払われるべき利息の金額は268,950,000円です。

改定後利率適用期間においては、各本劣後ローン利払日に、同日までの実日数にかかわらず、本劣後ローンの元本金額に、前記 f 「利率」(a)(ii)又は(iii)に基づき決定される利率を乗じ、2で除して算出した金額を支払います。

(ii) 前記(i)に別段の定めがある場合を除き、半年に満たない期間につき本劣後ローンに係る利息を計算するときは、その半年の日割りをもってこれを計算し、円位未満の端数が生じた場合にはこれを切り捨てます。

(iii) 本劣後ローン弁済日以降、当該弁済額（本劣後ローンの元本の支払が不当に留保若しくは拒絶された場合又は本劣後ローンの元本の支払に関して債務不履行が生じている場合を除きます。）に係る本劣後ローン利息は発生しないものとします。なお、i (イ) 当該本劣後ローン弁済日において残存する本劣後ローン経過利息又は(ロ) 当該本劣後ローン弁済日が本劣後ローン利払日に該当する場合の本劣後ローン利息及びii 本劣後ローン未払残高は、前記 e 「弁済の方法及び期限」の記載に従い弁済とともに支払われます。

(iv) 本劣後ローン利息及び本劣後ローン経過利息の支払については、本 g 「利息支払の方法及び制限」の記載のほか、後記 j 「劣後条件等」(a)「劣後特約」記載の劣後特約に従います。

(b) 利払いの任意停止

JA共済連は、その裁量により、その本劣後ローン利払日の15銀行営業日前の日である本劣後ローン基準日までに本劣後ローン貸付人に対し通知を行うことにより、当該通知に係る本劣後ローン利払日における本劣後ローン利息の支払の全部（一部は不可）を繰り延べることができます。当該繰り延べられた本劣後ローン利息の未払金額である本劣後ローン任意停止金額には、利息を付しません。

(c) 利払いの強制停止

JA共済連は、本劣後ローン基準日の5銀行営業日前において、(i) 資本不足事由が生じ、かつ継続している場合、又は(ii) 本劣後ローン若しくは本劣後ローン同順位劣後債務がその直前の支払期日において支払を停止している場合には、当該本劣後ローン基準日までに本劣後ローン貸付人に対して通知した上で、当該本劣後ローン基準日に係る本劣後ローン利払日以降、当該事象が解消されるまでの間に到来する本劣後ローン利払日における本劣後ローン利息の支払の全部を繰り延べなければなりません。当該繰り延べられた本劣後ローン利息の未払金額である本劣後ローン強制停止金額には、利息を付しません。

(d) 本劣後ローン未払残高の支払

(i) JA共済連は、その裁量により、本劣後ローン未払残高の全部又は一部の支払を、10銀行営業日以上20銀行営業日以内の本劣後ローン貸付人に対する事前の通知（かかる通知には支払われる本劣後ローン利払停止金額を記載することを要します。）を行うことにより、いつでも行うことができます。但し、かかる支払は、当該通知の時点において、i 適用ある規制上の要件を充足し、ii 資本不足事由が発生しておらず、また、iii 本劣後ローン同順位劣後債務がその支払を停止していないことを条件とします。

(ii) 前記(i)iii、前記(b)「利払いの任意停止」及び(c)「利払いの強制停止」並びに後記 h 「本劣後ローン同順位劣後債務等の支払停止」の記載にかかわらず、本劣後ローン同順位劣後債務の支払が停止している

場合であっても、JA共済連は、直近の本劣後ローン利払日における本劣後ローン未払残高の全部又は一部の支払を行うことができます。但し、当該本劣後ローン同順位劣後債務の直近の利息支払期日における未払残高について、実質的に同時に、本劣後ローン未払残高に占める支払額の比率と同一の比率（かかる比率の算定において、外貨換算その他の要素については本劣後ローン借入人が適当と認める方法により行うものとします。）で支払うことをその条件とします。なお、当該本劣後ローン同順位劣後債務の要項上、かかる実質的に同時の支払ができない場合には、当該本劣後ローン同順位劣後債務の直後の利息支払期日における支払であっても上記の条件を満たすものとします。

(iii) JA共済連が本劣後ローン未払残高の一部を支払う場合、当該支払は、最も早い本劣後ローン利払日に係る本劣後ローン利払停止金額から順に充当されます。

(iv) 本劣後ローン未払残高の支払については、本(d)「本劣後ローン未払残高の支払」のほか、後記j「劣後条件等」(a)「劣後特約」記載の劣後特約に従います。

(e) グロスアップ

JA共済連は、本劣後ローン契約に基づく債務の支払につき、法令等により要求される場合を除き、公租公課等を控除してはなりません。JA共済連が支払うべき金額から公租公課等を控除しなければならない場合には、JA共済連は、本劣後ローン貸付人が公租公課等を課せられない場合に受領できる金額を受領できるように必要な金額を追加して支払うものとします。かかる場合、JA共済連は、源泉徴収に係る日本の租税当局その他の監督官庁により発行された納税証明書を、支払を行った日より30日以内に本劣後ローン貸付人に宛てて直接送付します。

h 本劣後ローン同順位劣後債務等の支払停止

JA共済連が本劣後ローンに係る利息の支払の停止に係る通知をした場合又は前記g「利息支払の方法及び制限」(a)「利息支払の方法」から(e)「グロスアップ」までの記載に従って本劣後ローン利息の支払が停止している場合、JA共済連は、本劣後ローン同順位劣後債務又は本劣後ローン後順位劣後債務（かかる債務の条件として支払を行わないことが許容されていない債務を除きます。）に係る利息若しくは配当の支払、償還、弁済又は買入消却を行うこと、又はJA共済連の子会社をして行わせることはできません。但し、JA共済連による剰余金の配当並びに持分の払戻し及び譲受けは禁止されません。

i 期限の利益喪失の禁止

本劣後ローン貸付人は、本劣後ローン契約に基づく本劣後ローンの元本の弁済並びに本劣後ローン利息、本劣後ローン経過利息及び本劣後ローン未払残高の支払につき、期限の利益を喪失させることはできません。

j 劣後条件等

(a) 劣後特約

JA共済連は、本劣後ローン劣後事由の発生後速やかに、本劣後ローン貸付人に対して、本劣後ローン劣後事由が発生した事実を通知します。本劣後ローン劣後事由が発生し、継続している期間中、本劣後ローンに関する一切の請求権は、劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）が成就した場合にのみ発生します。

(b) 本劣後ローン上位債権者に対する不利益変更の禁止

本劣後ローン契約の各条項は、いかなる意味においても本劣後ローン上位債権者に対して不利益を及ぼす内容に変更されてはならず、そのような変更の合意はいかなる意味においても、またいかなる者に対しても効力を生じません。この場合に、本劣後ローン上位債権者とは、JA共済連に対し、本劣後ローン上位債務に係る債権を有する全ての者をいいます。

(c) 劣後特約に反する支払の禁止

本劣後ローン劣後事由発生後、劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）が成就していないにもかかわらず、本劣後ローンの元利金の全部又は一部が本劣後ローン貸付人に支払われた場合には、その支払は無効とし、本劣後ローン貸付人は受領した元利金を直ちにJA共済連に返還します。

(d) 相殺の禁止

JA共済連について清算手続が開始され、かつ継続している場合、破産手続開始の決定がなされ、かつ破産手続が継続している場合、再生手続開始の決定がなされた場合（但し、再生手続開始の決定がなされた後、簡易再生の決定若しくは同意再生の決定が確定した場合、再生計画不認可の決定が確定した場合、再生手続開始決定の取消若しくは再生手続の廃止により民事再生手続が終了した場合、又は再生計画取消の決定が確定した場合を除きます。）、又は日本法によらない外国における清算手続、破産手続、再生手続若しくはこれらに準ずる手続が行われている場合には、劣後支払条件（本劣後ローン劣後事由）が成就されない限りは、本劣後ローン貸付人は、JA共済連に対して負う債務と本劣後ローンに基づく元利金の支払請求権を相殺してはなりません。

k 事実の表明及び保証

JA共済連は本劣後ローン貸付人に対し、本劣後ローン契約締結日及び本劣後ローン貸付実行日において、以下の事実を表明し、保証しています。これらの表明及び保証につき違反の事実が判明した場合には、当該違反と相当因果関係を有する本劣後ローン貸付人の被った全ての損害、損失及び費用についてJA共済連は賠償の責に任ぜられるものとされています。

- (a) JA共済連は、日本法に基づき適法に設立され、有効に存続する農業協同組合連合会です。
- (b) JA共済連は、本劣後ローン契約並びに本劣後ローン契約に基づいて交付される他の全ての証書及び文書の締結及び履行をなす権利能力を有しており、これらの締結及び履行に必要な一切の授權手続を履践しました。
- (c) JA共済連による本劣後ローン契約の締結及び履行は、農業協同組合法その他JA共済連に適用がある法令、規則、通達、JA共済連の定款その他の内部規則、裁判所その他の政府機関の命令若しくは判決、又はJA共済連を当事者とする若しくはJA共済連が拘束される第三者との間の契約上の規定に、重要な点で違反又は抵触しておらず、JA共済連の財産若しくは事業の上に先取特権、担保権その他の負担（本劣後ローン契約に基づき大和証券のために負担するものを除きます。）を成立させ、又はそのような負担の設定を必要ならしめたりするものではありません。
- (d) JA共済連による本劣後ローン契約の締結及び履行に際して、JA共済連の側において必要となる許可、認可、承認、通知又は事前の届出は存在しないか、又は全て完了済みかつ有効です。
- (e) 本劣後ローン契約の締結及び履行に先立ち、JA共済連から本劣後ローン貸付人に対して直近に提出された貸借対照表、損益計算書及び剰余金処分に関する決議書（写）は重要な点において正確であり、一般に公正妥当と認められる会計原則に基づき、当該書類作成時点におけるJA共済連の状態を適切かつ正確に反映したものです。これらの、貸借対照表、損益計算書及び剰余金処分に関する決議書（写）の書類作成時点以降、JA共済連の本劣後ローン契約に基づく債務の履行に重大な影響を与える事項は存在していないか、全て本劣後ローン貸付人に対して書面で開示されています。
- (f) JA共済連に対し、本劣後ローン契約の適法性、有効性若しくは執行可能性、又は本劣後ローン契約に基づく債務を履行する能力について重大な影響を与える訴訟、請求その他の司法手続、行政手続又はその他の係争は存在していません。
- (g) 本劣後ローン契約に基づき、JA共済連から本劣後ローン貸付人に対し提供された情報は、当該情報の提出日現在、全ての重要な点について真実かつ正確であり、JA共済連は本劣後ローン貸付人にとり重要と思われる情報を削除又は省略していません。また、当該情報には、本劣後ローン貸付実行日時時点で残存する全ての本劣後ローン同順位劣後債務の明細及び条件が含まれています。
- (h) JA共済連を当事者とする又はJA共済連が拘束される契約につき、本劣後ローン契約を締結し又はこれに基づく債務を履行する上で重大な影響を及ぼし得る債務不履行、期限の利益喪失事由若しくは潜在的な期限の利益喪失事由、解除事由、又は契約終了事由（これらの事由には、(i)支払の停止、破産手続開始再生手続開始の申立てがあったこと、(ii)共済事業承認取消の処分を受け、若しくは解散したこと、(iii)農業協同組合法第94条の2第2項に基づき、業務の全部若しくは一部の停止若しくは財産の供託、又は財産の処分を禁止し、若しくは制限し、その他監督上必要な命令が行われ、かつ、債務超過であることが判明したこと等を含みますが、これらに限られません。）は発生、継続しておらず、かかる事由はJA共済連による本劣後ローン契約の締結、又は本劣後ローン契約に基づく債務の履行の結果発生することはありません。

l 本劣後ローン債権のJA共済連による利息の支払及び元本の弁済に関しては、物的又は人的担保は付されていません。

m 本劣後ローン債権譲渡契約においては、本劣後ローン債権が一定の属性を有することは求められておらず、本劣後ローン債権が一定の属性を有しない場合に行われ又は行われ得る措置（例えば、大和証券による買戻し等）は定められていません。

② 本劣後ローン債権の債務者に関する事項

管理資産を構成する本劣後ローン債権の唯一の債務者であるJA共済連に関する事項は以下のとおりです。

a 名称

全国共済農業協同組合連合会

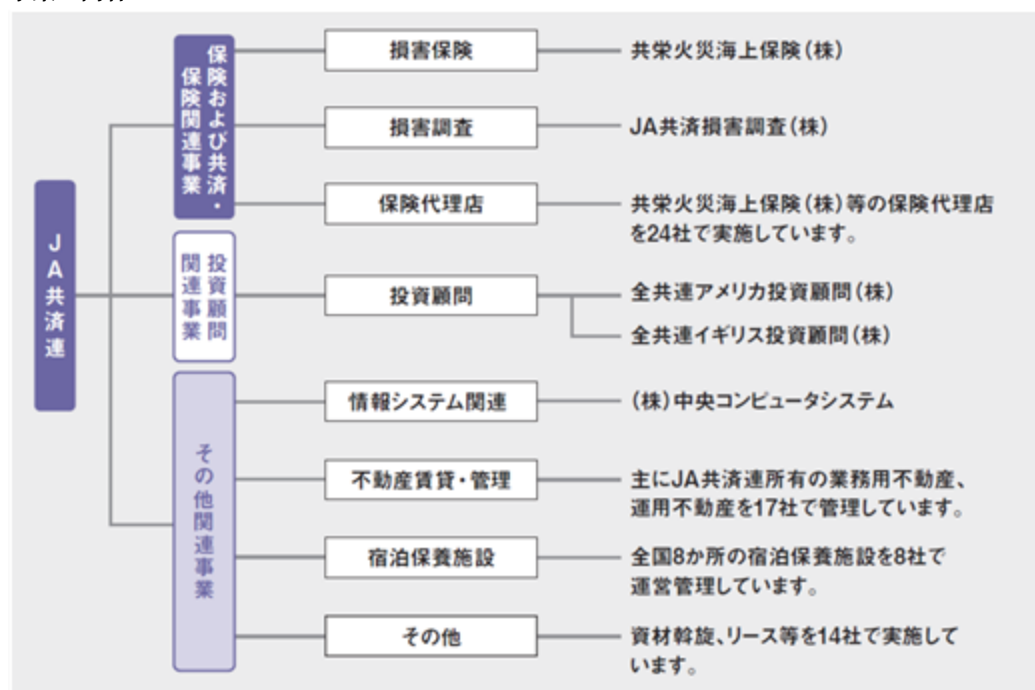
b 組織形態

農業協同組合法第4条に定める農業協同組合連合会

c 沿革

昭和23年	J A（農協）共済事業開始
昭和26年	全国共済農業協同組合連合会（全共連）設立
昭和48年	中伊豆、別府リハビリテーションセンター開設
昭和60年	大阪センター開設
昭和63年	全共連アメリカ投資顧問（株）設立
平成1年	全共連イギリス投資顧問（株）設立
平成4年	C Iを導入し、愛称をJ A共済に変更
平成6年	石岡センター開設
平成10年	J A共済50周年
平成12年	47都道府県共済連と全共連が一斉統合
平成15年	共栄火災を子会社化
平成16年	川崎センター開設
平成17年	東日本引受センター、西日本引受センター設立
平成18年	J A共済幕張研修センター開設
平成22年	J A共済ビル落成
平成26年	業務センター設立（全国8地区）
～27年	
令和3年	豊洲センター開所

d 事業の内容



※1 保険代理店、不動産賃貸・管理、宿泊保養施設およびその他の会社数は、当該事業を営んでいる会社数をそれぞれ記載していますので、重複して計上されている会社があります。

e 営業の概況

JA共済連の営業の概況については、後記第4「発行者及び関係法人情報」2「原保有者その他関係法人の概況」「その他関係法人の概況」「全国共済農業協同組合連合会」をご参照下さい。

f 割合その他の管理資産における本劣後ローン債権への集中の状況

JA共済連は、管理資産を構成する本劣後ローン債権の唯一の債務者です。

g 本劣後ローン債権の内容

前記「本劣後ローン債権の概要」をご参照下さい。

③ 管理資産を構成する資産に係る価格等の調査の結果及び方法の概要等

管理資産を構成する資産である本劣後ローン債権については、価格等の調査は行われていません。

（4）【管理資産を構成する資産の回収方法】

管理資産を構成する資産である本劣後ローン債権に係る本劣後ローン利息の支払及び本劣後ローンの元本の弁済については、原保有者である大和証券から当社に対して本劣後ローン債権が譲渡された後においては、JA共済連は直接当社に対してこれを行うものとされています。本劣後ローン利息の支払及び本劣後ローンの元本の弁済の詳細については、前記（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」をご参照下さい。

3【管理及び運営の仕組み】

（1）【資産管理等の概要】

①【管理資産の管理】

管理資産を構成する本劣後ローン債権は、本劣後ローン契約に基づき原保有者である大和証券が貸付金の貸付をJA共済連に対して行うことによって発生したものです。

原保有者である大和証券は、本劣後ローン債権譲渡契約に基づく本劣後ローン債権の譲渡に際して、当社及びJA共済連に対して、自らが、その保有している本劣後ローン債権の単独唯一の権利者であり、その権利は他者のいかなる担保権その他の権利にも服するものではなく、自分のみがその処分権限を有することを除き、本劣後ローン債権に関連して、その有効性を含む一切の事項についての実事表明及び保証を何ら行っていません。

本劣後ローン債権の債務者であるJA共済連は、本劣後ローン契約において、本劣後ローン契約の締結日である2022年10月7日付及び本劣後ローン貸付実行日付で、本劣後ローン貸付人に対し、前記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」k「事実の表明及び保証」記載の事実を表明し、保証しています。

当社の普通株式及びA種優先株式の状況並びにその保有者については後記第4「発行者及び関係法人情報」1「発行者の状況」をご参照下さい。

なお、当社は、未償還の本社債が残存する限り当該株式の保有者たる株主に対する配当を行わないこと並びに資本金の額及び資本準備金の額の減少を行わないことを本社債管理委託契約において約束しています。

JA共済連による本劣後ローン債権に係る本劣後ローン利息の支払及び本劣後ローンの元本の弁済は、それぞれ各本劣後ローン利払日及び本劣後ローン弁済日において、当社に対して直接行われます。本社債管理委託契約においては、本劣後ローン利息の支払による回収金は当社の本社債関連口座内の利息支払勘定において、本劣後ローンの元本の弁済による回収金は当社の本社債関連口座内の元金償還勘定において、それぞれ保管するものとされています。

当社は、本資産管理委託契約に基づき、三井住友信託銀行に対し、本劣後ローン債権の管理及び処分に関する業務を委託しています。

なお、当社は、管理資産である本劣後ローン債権の管理又は処分により得られる金銭の全部又は一部を当該資産又は他の資産の取得に係る資金の全部又は一部に充てることを予定していません。

本①に記載される事項のほか管理資産たる本劣後ローンの元本の弁済及び利子の支払等に重大な影響を及ぼす要因については、前記1「概況」（1）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」をご参照下さい。

a 管理資産からの支出

(a) 本社債管理委託契約において、当社は、本社債管理委託契約に定めるとおり、本社債関連口座を開設するものとし、本社債関連口座内の金銭を、(i)利息支払勘定、(ii)元金償還勘定及び(iii)出資金勘定に区分して管理するものとされています。

(b) 本社債管理委託契約において、当社は、本社債管理者の事前の書面による承諾がある場合を除き、以下に定める方法と順序においてのみ金銭の支払を行うことができるものとされています。また、当社は、保有する金銭を下記に定める方法に基づき本社債関連口座においてのみ保管するものとされています（但し、本社債買入消却関連合意に基づき受領した金銭については、本社債買入消却関連合意に従い、随時、本社債買入消却に関連する支払に充当することができます。）。但し、本社債関連口座を開設している金融機関について、JCRによる短期格付（又はこれと同等とみなされる長期格付）がJ-1（又はこれと同順位の格付）未満に格下げされた場合（以下「格付事由」といいます。）には、当社は、かかる事由の発表の日の翌日から14銀行営業日以内に、JCRによる短期格付（又はこれと同等とみなされる長期格付）がJ-1（又はこれと同順位の格付）以上である金融機関に新たに本社債関連口座を開設し、従来の本社債関連口座において保管されていた金銭をそれぞれ本社債管理者に書面による通知の上移転し、新たな本社債関連口座内の金銭を、従前と同様に(i)利息支払勘定、(ii)元金償還勘定及び(iii)出資金勘定に区分して管理するもの（以下「本社債関連口座移転行為」といいます。）とし、以後も同様とします。なお、当社は、格付事由が生じていない場合であっても、i本社債に付された格付の格下げを避けるために合理的に必要又は望ましいものと認められる場合及びii本社債に付された格付の格上げのために合理的に必要又は望ましいと認められる場合には、本社債関連口座を開設する金融機関と協議の上、随時、本社債関連口座移転行為を行うことができます。

管理資産からの支払順序及び方法は、以下によるものとします。

- (i) 本劣後ローン債権に基づきJA共済連から受領した金銭のうち、i 元本として受領した金銭については元金償還勘定において管理し、ii 利息、その他元本以外として受領した金銭については利息支払勘定において管理します。iii 当社がその普通株式及びA種優先株式の発行によって受領した発行代わり金は全て出資金勘定において管理します。iv 当社が本社債の発行によって受領した社債発行代わり金は全て出資金勘定において管理します。v 上記 i からivまでの事由以外の事由によって受領した金銭（前記(a)に基づき開設する口座又は上記に基づき新たに開設された口座に係る預金利息を含みます。）は全て出資金勘定において管理します。
- (ii) 各利払日、最終償還日、本社債期限前償還日(利払日)及び本社債期限前償還日(利払日以外)において、以下の方法及び順序により、費用並びに本社債の元金及び利息（未払残高を含みます。以下本(ii)において同じです。）の支払を行うものとします。但し、本社債の元金及び利息の支払に関しては、後記4「証券所有者の権利」（3）「償還期限及び償還の方法」②「償還の方法及び期限」及び（2）「利払日及び利息支払の方法」に記載のとおりとします。
- i 最終償還日に該当しない利払日（この日が本社債期限前償還日(利払日)及び本社債期限前償還日(利払日以外)である場合を除きます。）においては、利息支払勘定から本社債の利息の支払を行い、かかる支払の後の残余については、全て利息支払勘定に留保します。
- ii 最終償還日、本社債期限前償還日(利払日)又は本社債期限前償還日(利払日以外)においては、利息支払勘定及び元金償還勘定から本社債の利息、元金の順で支払を行い、かかる支払の後の残余については、全て出資金勘定に振り替えます。
- (iii) 当社は、以下の項目に該当する支払については、その支払時期が到来した時点において、随時、出資金勘定から行うことができます。
- i 公租公課の支払
- ii 諸費用の支払
- 本a「管理資産からの支出」において「諸費用」とは、(イ)資産の維持・管理に係る諸費用（本資産管理委託契約に基づき支払う資産管理委託手数料を含みます。）、(ロ)本社債の維持、管理及び支払に係る諸費用（本社債管理委託契約及び本社債事務委託契約に基づき支払う報酬・費用及び社債管理委託手数料を含みます。）、(ハ)当社の業務又は維持に係る諸費用（取締役・監査役に対する報酬、会計士及び監査法人手数料、格付手数料を含みます。）、並びに(ニ)本社債管理委託契約第18条及び第19条に基づく損害、債務及び費用の支払を総称したものをいいます。
- (iv) 前記(i)から(iii)までの規定にかかわらず、当社は、払込期日に（但し、下記iii及びivの支払については、支払期日の到来又は請求のあり次第速やかに）以下の項目に該当する支払については、出資金勘定から行うことができます。
- i 本引受契約に基づく当社から本社債の引受会社に対して支払う引受手数料及び費用の支払
- ii 本劣後ローン債権譲渡契約第2条第1項に基づく当社から大和証券に対する本劣後ローン債権の売買代金の支払
- iii 払込期日までに当社が支払うべき公租公課の支払
- iv その他本社債の発行に関連して必要となる費用（弁護士費用、会計士費用、本格付機関に対して支払う格付手数料等を含みますがこれに限られません。）の支払

②【管理報酬等】

管理資産から支払われる手数料等としては以下のものがあります。

- a 当初支払手数料として、当社は、本社債の引受会社に対する引受手数料、本社債事務受託会社に対する社債事務委託手数料、本資産管理受託会社に対する資産管理委託手数料、本社債の発行に関連して必要となる弁護士費用、会計士費用、本格付機関に対する格付手数料及び目論見書（仮目論見書及びその訂正事項分を含みます。以下同じです。）等印刷費用、A種優先株式の発行に係る登録免許税、その他当初において会社の設立・維持のために当社が負担すべき費用等を支払い、その合計は約383百万円でした。

- b 期中費用として、当社は、以下の費用を支払います。

- (a) 本社債事務受託会社を通じて、本社債権者が本社債を保有する口座管理機関に対して、(i)元金支払手数料として、当該本社債の元金金額（期限前償還する場合には、償還価額の総額）につき、10,000分の0.075の料率により計算された金額にこれに係る消費税相当額を加えた金額を、(ii)利金支払手数料として、当該本社債の元金金額（期限前償還日において本社債の全部が償還されるときにおける利息支払の場合には、償還価額の

総額）につき、10,000分の0.075の料率により計算された金額及びこれに係る消費税相当額を加えた金額を、それぞれ支払います。

当社は、(i)元金支払手数料を本社債の元金が償還される日の1銀行営業日前の日までに、(ii)利金支払手数料を本社債の利息が支払われる日の1銀行営業日前の日までに、それぞれ本社債事務受託会社へ交付します。

- (b) 本社債事務受託会社に対して、2027年10月21日を初回として、その後毎年10月21日に本社債の全額又は一部が残存している場合（同日に償還又は買入消却その他の事由により本社債の全てが消滅する場合を除きます。）、同日に金50万円を支払います（支払期日が銀行営業日以外の日にあたる場合は、その前銀行営業日に繰り上げて支払い、それぞれ消費税及び地方消費税は外税とします。）。
- (c) 本社債管理者に対して、2023年10月21日を第1回の支払期日とし、その後毎年10月21日を支払期日として、当該支払期日（当該日が銀行営業日でない場合にはその前銀行営業日）に、毎1か年（第1回の支払期日においては、本社債の払込期日の翌日（当日を含みます。）から第1回の支払期日（当日を含みます。）までの期間）につきその前年の支払期日における本社債現存額に対し、10,000分の0.5（消費税及び地方消費税別）を乗じた金額（第1回の支払期日に支払うべき手数料については、本(c)但書記載の金額）に、これに係る消費税及び地方消費税相当額を加えた金額を本社債管理委託手数料として支払います。但し、第1回の支払期日においては、本社債の払込期日における本社債の総額に10,000分の0.5（消費税及び地方消費税別）を乗じた額を支払います。
- (d) 本資産管理受託会社に対して、期中委託報酬として、2022年10月18日を初回とし、その後は2023年10月21日以降毎年10月21日に、2052年10月21日を最終支払期日として、金100万円を、それぞれ支払います（支払期日が銀行営業日以外の日にあたる場合は、その前銀行営業日に繰り上げて支払い、それぞれ消費税及び地方消費税は外税とします。）。但し、本資産管理委託契約が終了する日（当日を含みます。）以降に到来する支払期日においては期中委託報酬を支払わないものとし、2052年10月21日以降において本資産管理委託契約の期間が延長される場合には、当該期間における委託報酬額について、当社及び本資産管理受託会社が別途合意するものとします。また、支払期日以外の日において本資産管理委託契約が終了した場合には、その直前の支払期日に支払った期中委託報酬額から、当該支払期日の翌日から本資産管理委託契約が終了した日までについて1年365日の日割で計算した額（1円未満を切り捨てます。）を控除した金額並びにこれに係る消費税及び地方消費税相当額が、当社の請求に基づき、当社の指定する日までに払い戻されるものとします。
- (e) 当社は、年間950,000円の法人住民税を支払います。
- (f) 前記(a) ないし (e) 以外の主な期中費用として、当社は、本格付機関に対する格付監視手数料、当社の会計監査人に対する報酬、公告費用及びその他当社を維持するために必要となる費用等を支払うものとし、その合計は年間約15百万円です。

③【その他】

本社債管理委託契約において、当社は、本社債要項に別途定めるところに加え、以下の事項につき事前に本社債管理者の書面による承諾を得るものとされています。

- a 当社の定款の変更（但し、法令の改正に対応するための形式的な変更、本一般社団法人に対して普通株式を発行するために必要となる定款の変更並びにJA共済連及び本一般社団法人に対してA種優先株式を発行するために必要となる定款の変更を除きます。）をする場合
- b 当社が、本劣後ローン債権譲渡契約又は本資産管理委託契約を解除、変更又は修正する場合

なお、当社の定款の変更は、株主総会の決議によらなければできません。

本社債管理委託契約に定められた事項の変更その他特に必要と認められる事項については、そのつど当社及び本社債管理者は、相互にこれに関する協定をします。本社債管理委託契約が変更された場合には、当社は速やかにその旨を本格付機関に書面にて通知します。但し、本社債権者の利害に重大な関係を有する事項の変更（法令の改正又は制定に伴う変更を除きます。）については、社債権者集会の決議を要するものとし、さらに当該決議に係る裁判所の認可を必要とします。

定款の変更、関係法人との契約の更改等を行った場合には、公告その他の会社法等に従った所定の措置を取ります。

（２）【信用補完等】

本社債については、特段の信用補完・流動性補完は行われていません。なお、当社の普通株式及びA種優先株式の払込金は当社の本社債関連口座内の出資金勘定において保管され、公租公課の支払や諸費用の支払の原資として利用されますが、本社債関連口座内の利息支払勘定及び元金償還勘定内の金銭が、本社債の利息及び元金の支払に不足する場合においても、当該不足に係る金額については、本社債関連口座内の出資金勘定から支払われるものではありません。

（３）【利害関係人との取引制限】

該当事項はありません。

4【証券所有者の権利】

本社債権者への利息金額及び償還金額の計算方法については、（２）「利払日及び利息支払の方法」及び（３）「償還期限及び償還の方法」をご参照下さい。

本社債の元利金は、社債等振替法及び業務規程等に従い、各本社債権者に係るそれぞれの口座管理機関を通じて支払われます（但し、直接加入者の自己保有分については、本社債事務受託会社よりかかる直接加入者に対し、直接、支払われます。）。

本社債権者が有する利息支払請求権及び元金償還請求権は、各々、本社債の各利払日及び償還日に、期限が到来した金銭債権となります。

本社債の消滅時効は、その支払期日から（元金の場合）10年及び（利息の場合）5年となります。

本社債権者は、本社債の元利金が全て償還され又は支払われてから1年と1日を経過するまでの間は、当社又はその資産について、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始、特別清算開始その他法令上適用のあり得る同様の法的倒産手続の開始を自ら又は第三者を通じて申し立てないものとし、第三者による申立てに対し参加、同意等もしないものとします。

本社債権者は、当社による本社債に基づく元利金その他の債務の履行は、当社の財産（以下本4「証券所有者の権利」において「本責任財産」といいます。）のみを責任財産として、かつ、前記3「管理及び運営の仕組み」（1）「資産管理等の概要」①「管理資産の管理」a「管理資産からの支出」(b)の(i)から(iv)に記載されている順序及び方法によってのみ行われることに合意し、ここにおいて、本社債権者は、かかる債務の履行による満足を得るために本責任財産以外の財産について、強制執行、差押、仮差押、保全処分その他類似の手続の申立てを行わないことに合意するものとされています。

本社債権者は、償還日が到来した場合において、本責任財産から支払が行われた後に、なお本社債について未償還の元金又は未払の利息が存在する場合、本社債の未償還元金総額及び未払利息額が本責任財産が換価された金額を超過する範囲においてその債権を放棄するものとします。

（1）利率

- ① 本社債の利率は、a 払込期日の翌日（当日を含みます。）から2027年10月21日（当日を含みます。）までは年1.100%とし、b 2027年10月21日の翌日（当日を含みます。）から2032年10月21日（当日を含みます。）までは、利率改定日に改定され、当該利率改定日に係る改定後利率適用期間については当該改定後利率適用期間に係る利率基準日における5年国債金利に1.035%（年率）を加えた値とし、c 2032年10月21日の翌日（当日を含みます。）以降は、各利率改定日に改定され、当該各利率改定日に係る改定後利率適用期間については当該各改定後利率適用期間に係る利率基準日における5年国債金利に2.035%（年率）を加えた値とします。但し、当該利率は0%を下回りません。

- ② 前記①b及びcにおける「5年国債金利」とは、利率基準日のレートとして利率決定日の午前9時30分（東京時間）以降に国債金利情報ページに表示される5年国債金利をいいます。

ある改定後利率適用期間に係る利率決定日の午前10時（東京時間）に、国債金利情報ページに利率基準日のレートとしての5年国債金利が表示されていない場合、又は国債金利情報ページが利用不能となった場合には、利率決定日に当社は全ての参照国債ディーラーに対し、利率基準日の午後3時（東京時間）現在提示可能であった参照5年国債の売買気配の仲値の半年複利利回り（本②において、以下「提示レート」といいます。）の提示を求めるものとします。

提示レートが4つ以上の参照国債ディーラーから提示された場合には、その最も高い値と低い値をそれぞれ1つずつ除き、残りの提示レートの算術平均値（小数第4位を四捨五入します。本②において以下同じです。）を当該改定後利率適用期間に適用される5年国債金利とします。提示レートが2つ又は3つの参照国債ディーラーから提示された場合には、それらの算術平均値を当該改定後利率適用期間に適用される5年国債金利とします。提示レートが2つに満たなかった場合には、当該利率決定日の午前10時（東京時間）に国債金利情報ページに表示済みの最新の5年国債金利を当該改定後利率適用期間に適用される5年国債金利とします。

当社は、本社債管理者に前記①b及びc並びに本②に定める利率確認事務を委託し、本社債管理者は各利率決定日に当該利率を確認します。

本②における「参照国債ディーラー」とは、当社が本社債管理者と協議の上で国債市場特別参加者（財務省が指定する国債市場特別参加者をいいます。）又は市場で国債の売買を活発に行っていると認められる金融機関から最大5者選定する金融機関をいいます。

本②における「参照5年国債」とは、参照国債ディーラーから当社が選定する金融機関が選定する国債で、当該改定後利率適用期間の最終日又はその前後に満期が到来し、選定時において市場の慣行として5年満期の円建て社債の条件決定において参照するものをいいます。

- ③ 当社及び本社債管理者は、各改定後利率適用期間の開始日（当日を含みます。）から5銀行営業日以内に、前記①b及びc並びに前記②により決定された本社債の利率を、各本店において、その営業時間中、一般の閲覧に供します。

（2）利払日及び利息支払の方法

- ① 本社債利息は、払込期日の翌日（当日を含みます。）からこれを付し、2023年4月21日を第1回の利払日としてその日（当日を含みます。）までの分を支払い、その後毎年4月21日及び10月21日にその日（当日を含みます。）までの前半か年分を支払います。
- ② 利払日が銀行営業日でない場合は、その支払は前銀行営業日にこれを繰り上げます。なお、かかる繰り上げは、支払われる本社債利息の金額に影響を与えるものではありません。
- ③ 半年に満たない期間につき本社債に係る利息を計算するときは、その半年の日割りをもってこれを計算し、円位未満の端数が生じた場合にはこれを切り捨てます。また、第1回の利払日に支払うべき本社債に係る利息を計算するときは、a1円に（1）「利率」①aに定める利率を乗じ、2で除して算出した金額（小数点以下13桁未満切捨）と、b上記aの金額に、払込期日の翌日（当日を含みます。）から2022年10月21日（当日を含みます。）までの実日数を乗じ、183で除して算出した金額（小数点以下13桁未満切捨）の合計額に、各本社債権者が各口座管理機関の各口座に保有する各本社債の金額の総額を乗じて計算し、円位未満の端数が生じた場合にはこれを切り捨てます。
- ④ 本社債の償還日以降、当該償還額（本社債の元金の支払が不当に留保若しくは拒絶された場合又は本社債の元金の支払に関して債務不履行が生じている場合を除きます。）に係る利息は発生しないものとします。なお、a(a)当該償還日において残存する経過利息又は(b)当該償還日が利払日に該当する場合の本社債利息及びb未払残高は、後記（3）「償還期限及び償還の方法」②「償還の方法及び期限」の記載に従い償還とともに支払われます。
- ⑤ 本社債利息及び経過利息の支払については、前記①から④までのほか、後記⑥「利息支払の停止」及び⑦「未払残高の支払」並びに前記1「概況」（1）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」⑨「劣後条件等」a「劣後特約（当社劣後事由）」及びb「劣後特約（本劣後ローン劣後事由（本社債）」に従います。

⑥ 利息支払の停止

当社は、利払停止事由が生じた場合には、本社債権者及び本社債管理者に対し、速やかに（但し、当該利払日の10銀行営業日前までに）通知を行うことにより、当該通知に係る利払日における本社債利息の支払の全部（一部は不可）を繰り延べます。当該繰り延べられた本社債利息の未払金額である利払停止金額には、利息を付しません。

⑦ 未払残高の支払

- a 当社は、未払残高支払事由が生じた場合には、当該未払残高支払事由に係る本劣後ローン未払残高支払額相当額である支払金額を、本社債権者及び本社債管理者に対し、本aの記載に従った支払を行う利払日から10銀行営業日以上15銀行営業日以内の事前の通知（かかる通知には支払われる未払残高を記載することを要します。）を行うことにより、未払残高支払事由が発生した後最初に到来する利払日（但し、当該利払日に先立って上記の事前通知を行うことが実務上不可能な場合には、翌利払日）に、当該利払日時点の本社債権者に支払います。その場合、支払われる金額は、各本社債権者が各口座管理機関の各口座に保有する各本社債の金額の総額に、支払金額の一通貨あたりの利子額を乗じて算出されます。
- b 当社が未払残高の一部を支払う場合、当該支払は、最も早い利払日に係る利払停止金額から順に充当されます。
- c 未払残高の支払については、本⑦「未払残高の支払」の記載のほか、前記1「概況」（1）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」⑨「劣後条件等」 a「劣後特約（当社劣後事由）」及びb「劣後特約（本劣後ローン劣後事由（本社債）」記載の劣後特約に従います。

（3）償還期限及び償還の方法

① 償還価額

各本社債の金額100円につき金100円

② 償還の方法及び期限

- a 本社債の元金は、後記b又はcの記載に基づき期限前償還される場合及び後記eの記載に基づき買入消却される場合を除き、最終償還日に、その残存総額を、最終償還日を利払日とする本社債利息及び未払残高の支払とともに償還します。但し、前記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」 e「弁済の方法及び期限」(a)の記載に基づき、本劣後ローン最終弁済日が延長された場合には、最終償還日は延長後の本劣後ローン最終弁済日の直後の利払日まで延長されるものとし、その間も、当該利払日（当日を含みます。）まで、前記(1)「利率」①cに記載の利率による利息が発生するものとします。当社は、前記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」 e「弁済の方法及び期限」(a)の記載に基づく本劣後ローン弁済要件の充足有無の通知を受領後、速やかに（但し、最終償還日（延長後の最終償還日を含みます。以下本aにおいて同じです。）より30日以上60日以内の事前の）通知を行うことにより、本社債権者及び本社債管理者に対して、当該最終償還日における本社債の元金の償還の有無及び最終償還日が延長される場合はかかる延長後の最終償還日を通知するものとします。
- b 当社は、前記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」 e「弁済の方法及び期限」(b)の記載に基づき、本劣後ローン期限前弁済が本劣後ローン利払日において行われる旨の通知を受領した場合には、本社債権者及び本社債管理者に対し、速やかに（但し、当該本劣後ローン利払日の直後の利払日である本社債期限前償還日（利払日）より30日以上60日以内の事前の）通知（撤回不能とします。）を行うことにより、本社債期限前償還日（利払日）において、当該時点で残存する本社債の元金の全部（一部は不可）を、各社債の金額100円につき金100円の割合で、当該利払日における本社債利息及び未払残高の支払とともに償還します。
- c 当社は、前記2「管理資産を構成する資産の概要」（3）「管理資産を構成する資産の内容」①「本劣後ローン債権の概要」 e「弁済の方法及び期限」(b)の記載に基づき、本劣後ローン期限前弁済が本劣後ローン利払日以外の日において行われる旨の通知を受領した場合には、本社債権者及び本社債管理者に対し、速やかに（但し、当該本劣後ローン期限前弁済が行われる日の3銀行営業日後の日である本社債期限前償還日（利払日以外）より30日以上60日以内の事前の）通知（撤回不能とします。）を行うことにより、本社債期限前償還日（利払日以外）において、当該時点で残存する本社債の元金の全部（一部は不可）を、各社債の金額100円につき金100円の割合で、当該日（当日を含みます。）までの経過利息及び未払残高の支払とともに償還します。

- d 前記 a から c までの記載に基づき本社債が償還される償還日が銀行営業日でない場合は、その支払は前銀行営業日にこれを繰り上げます。なお、かかる繰り上げは、償還日（当日を含みます。）までの経過利息又は償還日が利払日に該当する場合の本社債利息の金額に影響を与えるものではありません。
- e 本社債買入消却は、払込期日の翌日以降、前記 1 「概況」（1）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」⑪「振替機関に関する事項」記載の振替機関が別途定める場合を除き、本劣後ローンの弁済がJA共済連と当社の間で合意された場合に、いつでもこれを行うことができます。
- f 本社債の償還又は本社債買入消却については、本②「償還の方法及び期限」の記載のほか、前記 1 「概況」（1）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」⑨「劣後条件等」 a 「劣後特約（当社劣後事由）」及び同 b 「劣後特約（本劣後ローン劣後事由（本社債）」記載の劣後特約に従います。

5【管理資産を構成する資産の状況】**（１）【管理資産を構成する資産の管理の概況】**

管理資産を構成する資産の管理の状況は、前記２「管理資産を構成する資産の概要」（３）「管理資産を構成する資産の内容」をご参照ください。

（２）【損失及び延滞の状況】

	総債権残高	延滞額	比率
2022年12月	49,009,343千円	一千円	—％

※ 総債権残高とは、当該月末における管理資産の元利金合計額をいいます。

（３）【収益状況の推移】

	第１期 自 2022年８月10日 至 2022年12月31日
(1) 収益 金融収益	109,343千円
(2) 費用	153,961千円
(3) 期末残高 元本金額の期末残高	48,900,000千円
(4) 元本金額の期末残高に 占める収益額の比率	0.22％
(5) 元本金額の期末残高に 占める費用額の比率	0.31％

（４）【買戻し等の実績】

該当事項はありません。

6【投資リスク】

（１）【投資に関するリスクの特性】

当社は、本劣後ローン債権を裏付けとして本社債を発行しました。本社債の元利金の支払は、当社が取得した本劣後ローン債権の元利金を支払原資として行われますが、JA共済連の信用状態が悪化した場合その他の理由により、かかる支払債務の履行が行われない可能性があります。従って、本社債の元利金支払の前提となっている本劣後ローン債権の支払債務の履行が必ずしも確実に行われるとは限らない以上、本社債においてはその元本や一定の投資成果が保証されているものではありません。

本劣後ローン債権に係る支払債務の履行の程度その他の理由に基づく本劣後ローン債権の価値の下落、その他、前記1「概況」（１）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」に記載される事由により、投資家各位は損失を被ることがあります。

また、本社債は預貯金や保険契約とは異なり、預金保険機構、農水産業協同組合貯金保険機構、保険契約者保護機構の保護の対象とはなりません。

本社債に関する投資リスクに関する、経営者が当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があるとして認識している主要なリスク（投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項）については、前記1「概況」（１）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」をご参照下さい。

上記、前記1「概況」（１）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」は本報告書提出日現在において判断したものです。

（２）【投資リスクに関する管理体制】

当社は、法令及び本社債管理委託契約の定めに従い、本社債について、本社債への投資者たる本社債権者のために、本社債に基づく弁済の受領、債権の保全その他の本社債の管理を行うことを本社債管理者に委託しています。本社債管理者は、本社債権者のために、本社債の弁済を受け、又は本社債に基づく本社債権者の債権の実現を保全するために必要な一切の裁判上又は裁判外の行為をなす権限を有します。

本社債管理者は、上記の本社債の管理を行うために、本社債管理委託契約に基づき、その企業金融部において、本社債の管理業務を行います。上記管理のための本社債管理委託契約その他の合意及び法令の遵守状況については、企業金融部により定期的に確認される体制が整備されています。

なお、本社債に関する投資リスクに関する、経営者が当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があるとして認識している主要なリスク（投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項）に対する対応については、前記1「概況」（１）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」をご参照下さい。

第2【管理資産の経理状況】**1【主な資産の内容】**

	第1期 2022年12月31日
I 管理資産残高	49,009,343千円
元本相当部分	48,900,000千円
利息相当部分（未収利息相当額）	109,343千円
II 証券所有者への利息支払基金の残高	－千円
III 証券所有者への元本償還基金の残高	－千円
IV 管理資産の維持管理費支払基金の残高	－千円

2【主な損益の内容】

	第1期 自 2022年8月10日 至 2022年12月31日
I 総収入	－千円
管理資産の回収額	－千円
うち元本返済相当部分	－千円
利息相当部分	－千円
その他の手数料収入	－千円
管理資産の再譲渡に伴う収入	－千円
その他	－千円
II 総費用	－千円
管理報酬	－千円
管理資産の維持管理費	－千円
信用補完手数料	－千円
その他の手数料	－千円
管理資産の貸倒償却額	－千円
うち元本相当部分	－千円
利息相当部分	－千円
III 収入金（I－II）	－千円

3【収入金（又は損失金）の処理】

	第1期 2022年12月31日
新たに管理資産に組み入れる資産への再投資	－千円
証券所有者への利息支払（又は基金への積立）	－千円
証券所有者への償還（又は基金への積立）	－千円
管理資産の維持管理費（又は基金への積立）	－千円
その他	－千円

4【監査等の概要】

本社債の管理資産について、法令及び契約等により、公認会計士又は監査法人の監査を受けるものとする義務は課されていません。

第3【証券事務の概要】

1 本社債の名義書換

本社債は、社債等振替法第66条第2号の規定に基づき、その全部について社債等振替法の適用を受けることとする旨を定めた社債であり、当社は、社債等振替法第67条第1項の規定に基づき、本社債の社債券を発行しません。社債原簿管理人は設置されず、本社債の譲渡については、社債等振替法に基づき、社債権者が振替機関又は口座管理機関に対して振替の申請を行い、譲受人がその口座における保有欄（社債等振替法に規定する機関口座にあっては、社債等振替法第68条第5項第2号に掲げる事項を記載し、又は記録する欄）に当該譲渡に係る金額の増額の記載又は記録を受けなければ、その効力を生じません。

なお、社債等振替法第86条の4に基づき、本社債の社債原簿においては本社債権者の氏名又は名称及び住所並びに本社債権者が本社債を取得した日は記載されず、社債原簿に係る取扱場所、取次所、代理人の名称及び住所並びに手数料に関する事項については、該当事項はありません。

2 証券所有者に対する特典

通常の社債権者の権利である元利金受領権のほかには、特典等はありません。

3 譲渡制限

本社債について譲渡制限はありません。

4 その他

本社債については、保管振替機構が定める社債等に関する業務規程第58条の23の規定に従い、償還日及び利払日の前銀行営業日並びに業務規程等において振替停止日とされている日においては、本社債に係る振替を行うための振替の申請はすることができません。

第4【発行者及び関係法人情報】

1【発行者の状況】

（1）【発行者の概況】

① 主要な経営指標等の推移

回次	第1期
決算年月	2022年12月
営業収益 (千円)	109,343
経常損失 (△) (千円)	△44,617
当期純損失 (△) (千円)	△44,934
持分法を適用した場合の投資利益 (千円)	—
資本金 (千円)	539,175
発行済普通株式数 (株)	2
発行済優先株式数 (株)	21,565
純資産額 (千円)	1,033,415
総資産額 (千円)	50,063,417
1株当たり純資産額 (円)	△22,417,025.00
1株当たり当期純損失 (△) (円)	△22,467,025.00
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—
1株当たり配当額 (円)	—
(うち1株当たり中間配当額) (円)	(—)
自己資本比率 (%)	2.0
自己資本利益率 (%)	—
配当性向 (%)	—
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	△364,582
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	—
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	1,078,250
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	713,767
従業員数 (名)	—

（注1）当社は、連結財務諸表を作成しておりませんので、連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移については、記載しておりません。

（注2）当社と雇用契約を締結している従業員はおりません。

（注3）潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。

（注4）株主総利回り、比較指標、最高株価及び最低株価については、当社株式は非上場でありますので記載しておりません。

② 沿革

当社は、2022年8月10日に本一般社団法人によって資本金及び資本準備金の額をそれぞれ5万円にて会社法に基づく株式会社として設立されました。

当社の本店は、東京都千代田区丸の内三丁目1番1号東京共同会計事務所内に所在します。

③ 事業の内容

当社の目的は、劣後ローン債権の取得並びにその保有、管理及び処分、当該劣後ローン債権を裏付けとする社債の発行、並びにこれらに附帯又は関連する一切の業務を行うことです。

④ 関係会社の状況

当社の親会社は、本一般社団法人たる一般社団法人全共連債権流動化ホールディングスです。なお、当社は子会社、関連会社、その他関係会社を有していませんので、関係会社の状況のうち子会社、関連会社、その他の関連会社の記載は行っていません。

親会社

名称	住所	資本金又は出資金	主要な事業の内容
一般社団法人全共連債権流動化ホールディングス	東京都千代田区丸の内三丁目1番1号東京共同会計事務所内	基金2,910万円	- 資産流動化法に基づいて設立された特定目的会社の特定出資の取得、保有及び処分 - 資産の流動化に係る業務を目的として設立された株式会社、合同会社その他の法人の株式、出資その他の持分の取得、保有及び処分
議決権の被所有割合	関係内容		
	役員の兼任等	事業上の関係	
直接100%	本一般社団法人の理事兼社員である関口陽平は当社の取締役を兼任しています。本一般社団法人の監事兼社員である関口三枝子は当社の監査役を兼任しています。	なし	

⑤ 従業員の状況

当社と雇用契約を締結している従業員はいません。三井住友信託銀行に本資産管理委託契約に基づき管理資産を構成する資産である本劣後ローン債権の管理及び処分の業務を委託します。

⑥ 株式等の状況

a 株式の総数等

種 類	発行可能株式総数（株）
普通株式	8
A種優先株式	80,000
計	80,008

	種類	事業年度末 発行数（株） （2022年12月31日）	提出日現在 発行数（株） （2023年3月30日）	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容（注1）
発行済 株 式	普通株式	2	2	該当なし	
	A種優先株式	21,565	21,565	該当なし	・定款において、会社法第108条第1項第1号（注2）、第2号（注3）及び第3号（注4）に掲げる事項について定めています。 ・定款において、会社法第322条第2項に規定する定めをしています。 ・定款において、会社法第199条第4項及び第238条第4項の規定による種類株主総会の決議を要しない旨を定めています。
	計	21,567	21,567	—	—

（注1） 定款において、会社法第107条第1項第1号に掲げる事項を定めています。

（注2） 定款において、①当社は、各事業年度の末日を基準日とする剰余金の配当を行うときは、当該剰余金の配当に係る基準日の最終の株主名簿に記載又は記録されたA種優先株式を有する株主（以下「A種優先株主」といいます。）又はA種優先株式の登録株式質権者（以下A種優先株主と総称して「A種優先株主等」といいます。）に対して、普通株式を有する株主（以下「普通株主」といいます。）又は普通株式の登録株式質権者（以下普通株主と総称して「普通株主等」といいます。）に先立ち、法令上可能な範囲内において、A種優先株式1株につき、A種優先株式1株当たりの払込金額相当額に0.05を乗じた額に相当する金額の配当金（以下「A種優先配当金」といいます。）を支払う旨、並びに、②ある事業年度においてA種優先株主等に対して支払われた剰余金の配当の額が、A種優先配当金の額に達しないときは、その不足分は切り捨てられるものとし、翌事業年度以降に累積しない旨を定めています。

（注3） 定款において、①当社は、残余財産の分配をするときは、A種優先株主等に対し、普通株主等に先立ち、A種優先株式1株につき、A種優先株式1株当たりの払込金額を支払う旨、及び、②A種優先株主等に対しては、①のほか、残余財産の分配を行わない旨を定めています。

（注4） 定款において、A種優先株主は、全ての事項につき株主総会において議決権を有しない旨を定めています。

b 新株予約権等の状況
該当事項はありません。

c 発行済株式総数、資本金等の推移
当社の発行済株式総数及び資本金等の推移は以下のとおりです。
当社は新株予約権、新株予約権付社債を発行していません。

年月日	発行済株式総数 増減数（株）	発行済株式総数 残高（株）	資本金増減額 （円）	資本金残高 （円）	資本準備金 増減額（円）	資本準備金 残高（円）
2022年 8月10日	普通株式 2	普通株式 2	50,000	50,000	50,000	50,000
2022年 10月13日	A種優先株式 21,565	A種優先株式 21,565	539,125,000	539,125,000	539,125,000	539,125,000

d 所有者別状況

本報告書提出日現在、当社の発行済普通株式2株の全ては、本一般社団法人に所有されており、当社の発行済A種優先株式21,565株のすべてはJA共済連に所有されています。

e 大株主の状況

(a) 普通株式の株主の状況

2022年12月31日現在			
氏名又は名称	住所	所有株式数 （株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（％）
一般社団法人全共連債権流動化ホールディングス	東京都千代田区丸の内三丁目1番1号東京共同会計事務所内	2	100%
計		2	100%

(b) A種優先株式の株主の状況

2022年12月31日現在			
氏名又は名称	住所	所有株式数 （株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（％）
全国共済農業協同組合連合会	東京都千代田区平河町二丁目7番9号	21,565	100%
計		21,565	100%

f 議決権の状況

(a) 発行済株式

2022年12月31日現在

区分	株式数（株）	議決権の数（個）	内容
無議決権株式	21,565	—	A種優先株式
議決権制限株式 （自己株式等）	—	—	—
議決権制限株式 （その他）	—	—	—
完全議決権株式 （自己株式等）	—	—	—
完全議決権株式 （その他）	2	2	普通株式
単元未満株式	—	—	—
発行済株式総数	21,567	—	—
総株主の議決権	—	2	—

(注) A種優先株式の株主は、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会において議決権を有しません。

(b) 自己株式等

2022年12月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数（株）	他人名義所有株式数（株）	所有株式数の合計（株）	発行済株式数に対する所有株式数の割合（%）
該当事項なし					

⑦ 自己株式の取得等の状況

該当事項はありません。

⑧ 配当政策

当社は、未償還の本社債が残存する限り普通株式及びA種優先株式の株主に対する配当を行わないことを本社債管理委託契約において約束しています。

⑨ コーポレート・ガバナンスの状況等

a コーポレートガバナンスの概要

会社の機関として、取締役及び監査役が存在します。取締役及び監査役に報酬は支払われません。定款において、取締役の定数は1名以上と定められています。

b 役員の状況

男性1名 女性1名 （役員のうちの女性比率50%）

役職名	氏 名	生年月日	略 歴	任期	所有口数 (株)
取締役	関口陽平	1973年 3月9日	1997年4月 株式会社住友銀行（現 株式会社三井住友銀行） 入行 2003年10月 東京共同会計事務所 入所（現職） 2009年3月 税理士登録 2022年8月 当社取締役 就任	(注1)	—
監査役	関口三枝子	1967年 4月21日	1995年12月 増山良裕税理士事務所入所 2001年4月 株式会社さくら総合事務所入所 2001年10月 税理士登録 2003年7月 有限会社青山総合会計事務所（現株式会社青山総合会計事務所）入所 2009年12月 東京共同会計事務所 入所（現職） 2022年8月 当社監査役 就任	(注2)	—
計					—

(注1) 任期は、2023年12月期に係る定時株主総会の終結の時までです。

(注2) 任期は、2025年12月期に係る定時株主総会の終結の時までです。

c 監査の状況

(a) 監査役監査の状況

当社は、監査役1名が選任されています。監査役は、取締役の職務執行の監査を行うとともに計算書類及びその附属明細書につき監査を行い、会計監査人から会計監査に関する報告、説明を受けます。

(b) 内部監査の状況等

該当事項はありません。

(c) 会計監査の状況

当社の会計監査人として、EY新日本有限責任監査法人が選任されています。

同監査法人は、会計監査人に必要とされる専門性及び独立性を備えており、監査実施体制及び品質管理体制も整備されている上、当社と業態が類似する会社の監査実績も有しているところから、当社において適任と判断したものです。継続監査期間は2022年12月期以降です。

業務を執行した公認会計士は、窪寺信であり、EY新日本有限責任監査法人に所属しています。監査業務に係る補助者の構成は、公認会計士4名及びその他3名であります。

(d) 監査報酬の内容等

(i) 監査公認会計士等に対する報酬

当事業年度	
監査証明業務に基づく 報酬（円）	非監査業務に基づく 報酬（円）
3,300,000	4,000,000（注2）

(注1) 当事業年度が設立後最初の事業年度であるため、当事業年度の前の事業年度の監査報酬はありません。

(注2) 当社における非監査業務の内容は、当社の発行する社債の元引受を大和証券株式会社等が行うにあたっての当社の財務情報の調査となっております。

(ii) 監査公認会計士等と同一のネットワークに属する組織に対する報酬（(i)を除く）

該当事項はありません。

(iii) その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

(iv) 監査報酬の決定方針

該当事項はありません。

(v) 監査役が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役は、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積りの算出根拠などが適切であるかどうかについて必要な検証をおこなったうえで、会計監査人の報酬等の額について同意しております。

d 役員の報酬等

当社は非上場会社でありますので、記載すべき事項はありません。

e 株式の保有状況

当社は、他の会社の株式を保有していないため、記載事項はありません。

（２）【事業の概況】**① 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等**

当社は、資産を譲り受け、社債を発行することを目的とした会社であるため、社債権者への社債償還事務について、安全性の確保と同時に事務面では、一層の合理化を経営の重要課題としています。

② 事業等のリスク

本（２）「事業の状況」及び後記（５）「経理の状況」等に関する事項のうち、経営者が当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスク（投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項）については、前記第１「管理会社の状況」１「概況」（１）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」の中の一部に記載されていますので、そちらをご参照下さい。

③ 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析**a 経営成績等の状況の概要****(a) 財政状態及び経営成績の状況**

第1期事業年度（2022年8月10日から2022年12月31日まで）

（資産）

当事業年度末における資産の残高は50,063,417千円となりました。主な資産は本劣後ローン債権48,900,000千円です。

（負債）

当期末における負債の残高は49,030,001千円となりました。主な負債は本社債48,900,000千円です。

(b) キャッシュ・フローの状況

第1期事業年度（2022年8月10日から2022年12月31日まで）

当社の第1期事業年度末における現金及び現金同等物は、713,767千円となりました。また、第1期事業年度におけるキャッシュ・フローの状況については以下の通りです。

（営業活動におけるキャッシュ・フロー）

第1期事業年度の営業活動におけるキャッシュ・フローは、本社債の発行による収入があったものの、本劣後ローン債権の取得等による支出により364,582千円の資金減少となりました。

（財務活動におけるキャッシュ・フロー）

第1期事業年度の財務活動におけるキャッシュ・フローは、A種優先株式の発行による収入により1,078,250千円の資金増加となりました。

(c) 生産、受注及び販売の状況

該当事項はありません。

b 財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に関する分析・検討内容

当社の代表者による経営成績に重要な影響を与える要因についての分析については、前記第１「管理会社の状況」１「概況」（１）「管理資産の流動化の形態及び基本的仕組み等」④「元金の償還及び利息の支払等に重大な影響を及ぼす要因」の中の一部に記載されていますので、そちらをご参照下さい。なお、その中における将来に関する事項は、本報告書提出日現在において判断したものです。

④ 経営上の重要な契約等

該当事項はありません。

⑤ 研究開発活動

該当事項はありません。

（３）【営業の状況】

前記（１）「発行者の概況」③「事業の内容」に記載した通り、金銭債権の取得、保有、売買及び処分、並びにそれに付随関連する一切の業務のみを行っています。

（４）【設備の状況】

① 設備投資等の概要

該当事項はありません。

② 主要な設備の状況

当社は、記載すべき重要な設備を有していません。

③ 設備の新設、除却等の計画

該当事項はありません。

（５）【経理の状況】

1. 財務諸表の作成方法について

当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、当事業年度（2022年8月10日から2022年12月31日）の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人の監査を受けております。

3. 連結財務諸表について

当社は子会社及び関連会社を有しておらず、連結財務諸表は作成しておりません。

①【財務諸表】

イ【貸借対照表】

(単位：千円)

当事業年度 (2022年12月31日)	
資産の部	
流動資産	
現金及び預金	713,767
前払費用	4,065
未収利息	109,343
流動資産合計	827,176
固定資産	
投資その他の資産	
買入貸付債権	48,900,000
投資その他の資産合計	48,900,000
固定資産合計	48,900,000
繰延資産	
社債発行費	336,240
繰延資産合計	336,240
資産の部合計	50,063,417
負債の部	
流動負債	
未払金	17,913
未払費用	109,884
未払法人税等	2,203
流動負債合計	130,001
固定負債	
社債	48,900,000
固定負債合計	48,900,000
負債の部合計	49,030,001
純資産の部	
株主資本	
資本金	539,175
資本剰余金	
資本準備金	539,175
資本剰余金合計	539,175
利益剰余金	
その他利益剰余金	
繰越利益剰余金	△44,934
利益剰余金合計	△44,934
純資産の部合計	1,033,415
負債及び純資産の部合計	50,063,417

ロ【損益計算書】

(単位：千円)

	当事業年度 (自 2022年8月10日 至 2022年12月31日)
営業収益	
金融収益	109,343
営業収益合計	109,343
営業費用	
金融費用	※ 1 112,161
販売費及び一般管理費	※ 2 41,799
営業費用合計	153,961
営業損失（△）	△44,617
経常損失（△）	△44,617
税引前当期純損失（△）	△44,617
法人税、住民税及び事業税	316
法人税等合計	316
当期純損失（△）	△44,934
前期繰越利益又は前期繰越損失（△）	—
当期末処分利益又は当期末処理損失（△）	△44,934

ハ【株主資本等変動計算書】

当事業年度（自 2022年8月10日 至 2022年12月31日）

（単位：千円）

	株主資本						純資産合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		株主資本 合計	
		資本準備金	資本剰余金 合計	その他利益 剰余金	利益剰余金 合計		
				繰越利益剰 余金			
当期首残高	50	50	50	—	—	100	100
当期変動額							
新株の発行	539,125	539,125	539,125			1,078,250	1,078,250
当期純損失（△）				△44,934	△44,934	△44,934	△44,934
当期変動額合計	539,125	539,125	539,125	△44,934	△44,934	1,033,315	1,033,315
当期末残高	539,175	539,175	539,175	△44,934	△44,934	1,033,415	1,033,415

ニ【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	当事業年度 (自 2022年8月10日 至 2022年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー	
買入貸付債権の取得による支出	△48,900,000
社債の発行による収入	48,900,000
社債発行費	△323,058
その他の営業支出	△41,524
小計	△364,582
法人税等の支払額	—
法人税等の還付額	—
営業活動によるキャッシュ・フロー	△364,582
投資活動によるキャッシュ・フロー	
投資活動によるキャッシュ・フロー	—
財務活動によるキャッシュ・フロー	
優先株式の発行による収入	1,078,250
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,078,250
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	713,667
現金及び現金同等物の期首残高	100
現金及び現金同等物の期末残高	※1 713,767

【注記事項】

(重要な会計方針)

当事業年度 (自 2022年8月10日 至 2022年12月31日)	
1. 繰延資産の処理方法	
社債発行費	
定額法により社債発行期間内である30年間で均等償却を行っております。	
2. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲	
キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金からなっております。	

(損益計算書関係)

(※1) 金融費用の主要な費目及び金額は次の通りであります。

当事業年度 (自 2022年8月10日 至 2022年12月31日)	
社債利息	109,343千円
社債発行費償却	2,817千円

(※2) 販売費及び一般管理費の主要な費目及び金額は次の通りであります。

当事業年度 (自 2022年8月10日 至 2022年12月31日)	
業務委託手数料	1,032千円
資産管理手数料	203千円
社債管理手数料	491千円
租税公課	39,914千円
なお、販売費及び一般管理費のうち一般管理費の占める割合は100%です。	

(株主資本等変動計算書関係)

当事業年度（自 2022年8月10日 至 2022年12月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数に関する事項

	当事業年度期首株式数	当事業年度増加株式数	当事業年度減少株式数	当事業年度末株式数
発行済株式				
普通株式	2株	—	—	2株
優先株式	—	21,565株	—	21,565株
合計	2株	21,565株	—	21,567株

(注) 優先株式の株式数の増加21,565株は、A種優先株式の発行による増加です。

2. 自己株式の種類及び株式数に関する事項

該当項目はありません。

3. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当項目はありません。

4. 配当に関する事項

該当事項はありません。

(キャッシュ・フロー計算書関係)

(※1) 現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

当事業年度
(自 2022年8月10日
至 2022年12月31日)

現金及び現金同等物の期末残高は貸借対照表に掲記されている現金及び預金の残高と同額であります。

(リース取引関係)

該当項目はありません。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は金融資産である買入貸付債権を管理資産として保有しており、当該資産の購入のために必要な資金を、本件資産から将来生ずるキャッシュフローを裏付けとする社債の発行により調達しています。なお、一時的な余資は安全性の高い金融資産（普通預金）で運用しています。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当社が保有する金融資産は主として買入貸付債権であり、金融負債は主として社債であります。本件買入貸付債権の元本償還及び利息を受け、同額を社債の元利金支払に充当しております。買入貸付債権は、抛出先である全国共済農業協同組合連合会の信用リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

①信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社の保有する資産は、買入貸付債権のみであり、本件買入貸付債権の債務者である全国共済農業協同組合連合会による債務の履行につき、他のいかなる第三者も保証を行っているものではありません。従って、信用リスクは、全国共済農業協同組合連合会の財務状態の健全性悪化に起因して発生いたします。

なお、当事業年度期末日現在における最大信用リスク額は、信用リスクに晒される金融資産の貸借対照表価額により表されております。

②市場リスク（市場金利等の変動リスク）の管理

買入貸付債権の金利及び社債の金利は固定金利であり、市場金利変動に伴う価格変動リスクに晒されておりますが、買入貸付債権及び社債は発行条件が実質的に近似しており、実質的に同一のキャッシュフローを生み出す金融商品であることから、価格変動の影響が資産サイドと負債サイドで相殺されるため、市場リスクは限定的であります。

③資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

上記（2）で述べたとおり、社債の元利金の支払いは、買入貸付債権の元本償還及び利息により行われます。買入貸付債権の償還額及び利払額は、その受領日の3営業日後の社債の元利金の支払いに同額が充当される仕組みとなっております。

このように社債の元利金及び諸費用の支払いは、買入貸付債権の元本償還及び利息によりほぼ全額が賄われる仕組みとなっておりますので、流動性リスクは僅少であります。

また、社債要項において、流動性補完のために一定の資金を準備金として維持しております。

（4）金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

買入貸付債権及び社債については、市場価格はなく、合理的に算定された価額によっております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等による場合、当該価額が異なることがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりです。なお、「現金及び預金」については、現金であること、及び預金は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

当事業年度（2022年12月31日）

（単位：千円）

	貸借対照表計上額	時価	差額
買入貸付債権	48,900,000	48,087,771	△812,229
資産計	48,900,000	48,087,771	△812,229
社債	48,900,000	48,087,771	△812,229
負債計	48,900,000	48,087,771	△812,229

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

（1）時価で貸借対照表に計上している金融商品

該当項目はありません。

(2) 時価で貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品
当事業年度（2022年12月31日）

(単位：千円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
買入貸付債権	—	48,087,771	—	48,087,771
資産計	—	48,087,771	—	48,087,771
社債	—	48,087,771	—	48,087,771
負債計	—	48,087,771	—	48,087,771

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定にかかるインプットの説明

資産

買入貸付債権

買入貸付債権については、市場価格はないものの、社債と発行条件が極めて近似しており、また実質的に同一のキャッシュフローを生み出す金融商品であるため、社債の時価を用いて算定しており、レベル2の時価に分類しております（下記負債参照）。

負債

社債

社債については、情報ベンダーにより一般に公表されている価格を基に算定した価額をもって時価としており、レベル2の時価に分類しております。

4. 金銭債権の決算日後の償還予定額

当事業年度（2022年12月31日）

(単位：千円)

	1年以内	1年超5年以内	5年超10年以内	10年超
買入貸付債権	—	—	—	48,900,000
合計	—	—	—	48,900,000

5. 社債の決算日後の償還予定額

当事業年度（2022年12月31日）

(単位：千円)

	1年以内	1年超5年以内	5年超10年以内	10年超
社債	—	—	—	48,900,000
合計	—	—	—	48,900,000

(有価証券関係)

該当項目はありません。

(退職給付関係)

該当項目はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内容

当事業年度
(2022年12月31日)

繰延税金資産

繰越欠損金	13,663千円
繰延税金資産小計	13,663千円
評価性引当金	△13,663千円
繰延税金資産合計	—

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

当事業年度（2022年12月31日）

税引前当期純損失が計上されているため、記載しておりません。

(デリバティブ取引関係)

該当項目はありません。

(ストックオプション等関係)

該当項目はありません。

(持分法損益等関係)

該当項目はありません。

(企業結合等関係)

該当項目はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社は、資産の譲受け並びにその管理を目的とし、その資金の大部分を社債の発行により調達している会社であります。その為、報告すべきセグメントは1つしかないためセグメント情報の記載を省略しております。

【関連情報】

1. 製品及びサービスごとの情報

単一のサービス区分の外部顧客への営業収益が損益計算書の営業収益の90%を超えている為、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

国内の外部顧客への営業収益に分類した額が損益計算書の営業収益の90%を超えている為、また、有形固定資産は保有しておりませんので、地域ごとの営業収益及び有形固定資産の記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

当事業年度（自 2022年8月10日 至 2022年12月31日）

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	営業収益	関連するセグメント名
全国共済農業協同組合連合会	109,343	資産の譲り受け及びその管理

【報告セグメントとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

（関連当事者との取引）

該当事項はありません。

（1株当たり情報）

1. 1株当たり純損失及び算定上の基礎は次の通りであります。

	当事業年度 (自 2022年8月10日 至 2022年12月31日)
1株当たり当期純損失金額(△)	△22,467,025円00銭
(算定上の基礎)	
当期純損失(△) (千円)	△44,934
普通株式に帰属しない金額 (千円)	—
普通株式にかかる当期純損失(△) (千円)	△44,934
期中平均普通株式数 (株)	2

(注) 潜在株式調整後1株当たり当期純利益額については、潜在株式がないため記載しておりません。

2. 1株当たり純資産額及び算定上の基礎は次の通りであります。

	当事業年度 (2022年12月31日)
1株当たり純資産額	△22,417,025円00銭
(算定上の基礎)	
純資産の部の合計額 (千円)	1,033,415
純資産の部の合計額から控除する金額 (千円)	1,078,250
(うち優先株式) (千円)	1,078,250
普通株式に係る当事業年度末の純資産額 (千円)	△44,834
1株当たり純資産額の算定に用いられた当事業年度の普通株式数 (株)	2

（重要な後発事象）

該当事項はありません。

ホ【附属明細表】

1) 資産及び固定資産等明細表

(単位：千円)

資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	償却累計額	当期償却額	差引 当期末残高
資産							
買入貸付債権	—	48,900,000	—	48,900,000	—	—	48,900,000
資産計	—	48,900,000	—	48,900,000	—	—	48,900,000
繰延資産							
社債発行費	—	339,058	—	339,058	2,817	2,817	336,240
繰延資産計	—	339,058	—	339,058	2,817	2,817	336,240

2) 社債明細表

(単位：千円)

銘柄	発行年月日	当期首 残高	当期末 残高	利率	担保	償還期限	摘要
社債	2022年 10月18日	— (—)	48,900,000 (—)	1.10	無担保	2052年 10月21日	—
合計	—	— (—)	48,900,000 (—)	—	—	—	—

(注) 1. 当期末残高の()の金額は貸借対照表日の翌日から1年以内に償還予定の金額を内書で示しております。

2. 貸借対照表日後5年以内における1年毎の償還予定額の総額

(単位：千円)

1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
—	—	—	—	—

3) 借入金等明細表

財務諸表等規則第125条の規定により、借入金の金額が当事業年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため借入金等明細表は作成しておりません。

4) 営業収益及び営業費用の明細

(単位：千円)

区分	科目	内訳	金額	摘要
営業収益	金融収益	受取利息	109,343	—
	計		109,343	
営業費用	金融費用	社債利息	109,343	—
		社債発行費償却	2,817	—
	販売費及び一般管理費	業務委託手数料	1,032	—
		資産管理手数料	203	—
		社債管理手数料	491	—
		租税公課	39,914	—
		その他	157	—
	計		153,961	

②【主な資産及び負債の内容】

流動資産

現金及び預金

(単位：千円)

種類	金額
普通預金	713,767
合計	713,767

(6)【企業集団等の状況】

① 企業集団等の状況

当社は子会社を有しておりません。当社の親会社は一般社団法人全共連債権流動化ホールディングスです。本報告書提出日現在一般社団法人全共連債権流動化ホールディングスは当社及び全共連第1回劣後ローン流動化株式会社以外に子会社を有しておりません。また、一般社団法人全共連債権流動化ホールディングスは当社及び全共連第1回劣後ローン流動化株式会社の株式を保有する以外に事業を営んでおりません。一般社団法人全共連債権流動化ホールディングスは全国共済農業協同組合連合会より、基金の拠出を受けております。

② 関連当事者の状況

当社は子会社を有しておらず、連結財務諸表は作成しておりません。

③ 関連当事者との取引

該当事項はありません。

(7)【その他】

該当事項はありません。

2【原保有者その他関係法人の概況】

【原保有者の概況】

【大和証券株式会社】

（1）【名称、資本金の額及び事業の内容】

（ア）名称

大和証券株式会社

（イ）資本金の額

100,000百万円（2022年9月30日現在）

（ウ）事業の内容

金融商品取引業

（2）【関係業務の概要】

管理資産である当社の資産を構成する本劣後ローン債権の原保有者です。

（3）【資本関係】

該当事項はありません。

（4）【経理の概況】

（ア）最近2事業年度における主な資産、負債の概況

（単位：百万円）

	（単体） 2021年3月31日現在	（単体） 2022年3月31日現在
資産合計	13,097,445	14,645,276
負債合計	12,303,030	14,134,533
純資産合計	794,415	510,743

（イ）最近2事業年度における損益の概況

（単位：百万円）

	（単体） 2020年4月1日から 2021年3月31日まで	（単体） 2021年4月1日から 2022年3月31日まで
営業収益	315,179	326,039
経常利益	66,283	78,234
当期純利益	41,393	57,401

（ウ）その他

大和証券株式会社の経理の概況の詳細については、2021年3月期及び2022年3月期の有価証券報告書、半期報告書、（提出されている場合には）臨時報告書並びにこれらの訂正報告書をご参照下さい。

（5）【その他】

該当事項はありません。

【その他関係法人の概況】

【三井住友信託銀行株式会社】

(1) 【名称、資本金の額及び事業の内容】

(ア) 名称

三井住友信託銀行株式会社

(イ) 資本金の額

342,037百万円（2022年9月30日現在）

(ウ) 事業の内容

信託業務、普通銀行業務及びその他兼営業務

(2) 【関係業務の概要】

当社から管理資産である本劣後ローン債権の管理及び処分に関する業務の委託を受けます。

(3) 【資本関係】

該当事項はありません。

(4) 【経理の概況】

(ア) 最近2事業年度における主な資産、負債の概況

(単位：百万円)

	(連結) 2021年3月31日現在	(連結) 2022年3月31日現在
資産合計	63,149,243	64,346,726
負債合計	60,807,748	61,998,216
純資産合計	2,341,495	2,348,510

(イ) 最近2事業年度における損益の概況

(単位：百万円)

	(連結) 2020年4月1日から 2021年3月31日まで	(連結) 2021年4月1日から 2022年3月31日まで
経常収益	1,255,551	1,249,695
経常利益	156,885	203,664
当期純利益	126,119	150,379

(ウ) その他

三井住友信託銀行株式会社の最近2事業年度における経理の状況の詳細については、2021年3月期及び2022年3月期の有価証券報告書、半期報告書、（提出されている場合には）臨時報告書並びにこれらの訂正報告書をご参照下さい。

(5) 【その他】

本資産管理委託契約の解約

- (a) 本資産管理委託契約の期間は、本資産管理委託契約の締結日から本社債の全額が償還された日までとします。但し、当該期間終了後において、本業務がなお現存する場合には、本資産管理委託契約の期間は本資産管理委託契約所定の本資産管理受託会社の業務が終了するまで延長されるものとし、本資産管理受託会社は引続き当該業務を遂行するものとします。なお、当該期間の終了については、当社及び本資産管理受託会社は本資産管理委託契約において定められる様式による書面によりこれを確認するものとします。
- (b) 本資産管理委託契約の期間中、本資産管理受託会社において次のいずれかの事由が生じた場合には、当社は、書面による通知をなすことにより本資産管理委託契約を解除することができます。この場合、当社は、解除を理由として損害賠償その他名目の如何を問わず本資産管理受託会社に対し一切債務を負担しないものとします。
- ① 本資産管理受託会社が、本資産管理委託契約に基づく義務の履行を怠り、当社からその旨の通知の到着後30日以内にその履行がなされないとき
 - ② 本資産管理受託会社について、支払の停止が生じたとき、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始若しくは特別清算開始の申立てがなされたとき、本資産管理受託会社について銀行取引停止処分がなされたとき、又は本資産管理受託会社の重要な資産につき滞納処分による差押、仮差押、保全処分、差押、競売手続の開始その他の強制執行手続若しくは担保権実行手続が開始されたとき
 - ③ その他当社が本資産管理受託会社の責に帰すべき事由により本資産管理委託契約の継続が困難であることを合理的・客観的な理由をもって認定し、かつ、本社債管理者が書面でこれを承諾したとき

【全国共済農業協同組合連合会】

(1) 【名称、資本金の額及び事業の内容】

(ア) 名称

全国共済農業協同組合連合会（愛称：JA共済連）

(イ) 出資金の額

756,537百万円（2022年9月30日現在）

(ウ) 事業の内容

共済事業

(2) 【関係業務の概要】

JA共済連は、本劣後ローン債権の債務者となります。また、JA共済連は本一般社団法人に対する基金の抛出者であり、当社のA種優先株式を全て取得しています。

(3) 【資本関係】

該当事項はありません。

(4) 【経理の概況】

(ア) 最近2事業年度における主な資産、負債の概況

（単位：百万円）

	(単体) (2021年3月31日現在)	(単体) (2022年3月31日現在)
資産合計	58,036,342	58,192,687
負債合計	53,457,146	53,713,106
純資産合計	4,579,196	4,479,581

(イ) 最近2事業年度における損益の概況

（単位：百万円）

	(単体) (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	(単体) (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
経常収益	5,987,857	5,992,749
経常利益	166,548	170,334
当期剰余金	103,427	102,937

(5) 【その他】

該当事項はありません。

【全国共済農業協同組合連合会の概況】

JA共済連の2021年度（2021年4月1日～2022年3月31日）の決算及び2022年度上半期（2022年4月1日～2022年9月30日）の業績は以下のとおりです。なお、以下に掲げられた「令和3年度 JA共済連の決算概要」及び「令和4年度上半期業績報告」の全部又は一部については、金融商品取引法第193条の2の規定に基づく監査証明を受けていません。

令和3年度 JA共済連の決算概要

《目次》

1. 事業成績・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
(1) 新契約高	
(2) 保有契約高(長期共済)	
(3) 解約・失効率の状況	
(4) 共済金支払実績	
2. 主な経営指標等・・・・・・・・・・・・・・・・	8
(1) 資産の状況	
(2) 支払余力（ソルベンシー・マージン）比率	
(3) 基礎利益	
(4) 実質純資産額	
3. 財務の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
＜参考1＞財務状況	
＜参考2＞運用資産の内訳	
4. 収支の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
＜参考3＞経常損益状況	
5. 貸借対照表・・・・・・・・・・・・・・・・・・	14
6. 損益計算書・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
7. 注記表・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16
8. JA共済連および子会社の状況(連結)・・・・・・・・	31

(注) 本報告における金額は、記載単位未満を切り捨てて表示しています。
したがって、各表上の数値を合計しても合計欄と一致しない場合があります。
なお、切り捨てる前の金額が記載単位未満の場合は、「0」と表示し、切り捨てる前の
金額が0円の場合は、「－」と表示しています。
また、比率は、小数点記載単位未満を四捨五入して表示しています。

【令和3年度 JA共済連の決算概要について】

（１）契約状況および受入共済掛金・支払共済金

新契約高は、建物更生共済の減少などにより 16 兆 2,332 億円となり、保有契約高は、生命総合共済の減少などから 231 兆 4,504 億円となりました。

受入共済掛金は、前年度同水準の 4 兆 6,396 億円となり、支払共済金は、前年度同水準の 3 兆 8,709 億円となりました。

（２）基礎利益

令和3年度は、年度末の急激な円安による為替変動リスク抑制のための費用の増加や令和2年度に発生した地震による支払共済金の増加などにより、基礎利益は前年度から 1,070 億円減少の 4,356 億円となりました。

1. 事業成績

(1) 新契約高

① 長期共済

(単位 件数：件、金額：億円)

共済種類		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度		
		保障共済金額	保障共済金額	保障共済金額	契約件数	満期共済金額	保障共済金額
生命総合共済	終身共済	19,580	19,969	22,521	306,401	10,070	21,458
	定期生命共済	297	3,269	3,421	30,028	—	3,440
	養老生命共済	6,823	4,414	4,367	99,532	2,149	3,488
	(うちこども共済)	(3,803)	(2,307)	(2,354)	(79,776)	(1,737)	(1,877)
	生命計	26,701	27,653	30,311	435,961	12,220	28,388
	医療共済	657	469	458	740,563	1,089	875
	がん共済	—	—	—	61,978	—	—
	医療系計	657	469	458	802,541	1,089	875
	介護共済	1,453	1,480	1,977	73,713	2,581	2,188
		[1,924]	[1,878]	[2,348]			
	生活障害共済	[1,743]	[2,133]	[3,072]	56,465	2,334	3,093
		[3,222]	[2,200]	[2,766]			
	特定重度疾病共済	—	—	3,028	104,402	—	1,842
建物更生共済	年金共済	0	0	—	129,080	866	—
		[1,859]	[3,319]	[2,627]			
	生命総合計	28,811	29,603	32,747	1,602,162	12,220	31,452
建物更生共済		242,668	188,982	161,152	863,498	11,055	130,879
生命総合・建物更生共済計		271,480	218,586	193,899	2,465,660	23,275	162,332
財産形成貯蓄共済		16	12	13	1,900	11	11
合計		271,497	218,599	193,912	2,467,560	23,287	162,343

- (注) 1. 終身共済(養老生命共済)の保障共済金額は、終身共済金額(満期共済金額)と定期特約、三大疾病前払特約、生存特約、家族収入保障特約(特約金額×共済期間×1/2)の共済金額および生活保障特約の総支払額の合計です。
2. 定期生命共済の保障共済金額には、三大疾病前払特約および生存特約の共済金額を含みます。
3. 共済金額増支特約付こども共済の保障金額は、共済金額の5倍相当額としています。
4. 医療共済の満期共済金額は治療共済金額であり、保障共済金額は定期特約と家族収入保障特約(特約金額×共済期間×1/2)の共済金額および生活保障特約の総支払額の合計です。
5. がん共済の保障共済金額は、がん死亡共済金額(がん入院共済金額の100倍)です。なお、平成24年度以降に契約されたがん共済にはがん死亡共済金額はありません。
6. 介護共済の満期共済金額は介護共済金額であり、保障共済金額は一時払介護共済の死亡給付金額です。なお、介護共済には死亡給付金額はありません。平成30年度・令和元～2年度については、上段に一時払介護共済の死亡給付金額、下段の[]内に介護共済金額を表示しています。
7. 生活障害共済の満期共済金額は定期年金型生活障害年金原資(年金年額×共済期間×1/2)であり、保障共済金額は一時型生活障害共済金額です。平成30年度・令和元～2年度については、上段[]内に一時型生活障害共済金額、下段の[]内に定期年金型生活障害年金原資を表示しています。
8. 特定重度疾病共済の保障共済金額は特定重度疾病共済金額です。
9. 年金共済の満期共済金額は年金年額、保障共済金額は定期特約共済金額であり、契約件数欄および満期共済金額(年金年額)欄には、年金開始された契約の件数・年金年額を含みません。
なお、平成30年度・令和元～2年度については、上段に定期特約共済金額、下段の[]内に年金年額を表示しており、平成30年度・令和元年度の定期特約共済金額は、それぞれ800万円・800万円です。
10. 「生命総合計」、「生命総合・建物更生共済計」および「合計」の満期共済金額には、医療共済の治療共済金額、介護共済の介護共済金額、生活障害共済の定期年金型生活障害年金原資(年金年額×共済期間×1/2)および年金共済の年金年額を含みません。
11. 「生命総合計」、「生命総合・建物更生共済計」および「合計」の保障共済金額には、生活障害共済の一時型生活障害共済金額、特定重度疾病共済の特定重度疾病共済金額を含みません。

② 短期共済

(単位 件数：件、金額：億円、掛金：百万円)

共済種類	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度		
	共済掛金	共済掛金	共済掛金	契約件数	共済金額	共済掛金
火災共済	11,130	10,722	10,454	1,216,056	148,282	10,258
自動車共済	266,542	266,881	268,000	8,130,636	—	266,433
傷害共済	8,654	8,210	7,771	5,310,696	167,988	7,514
団体定期生命共済	21,569	21,004	22,183	180,233	17,284	23,768
自賠責共済	62,087	60,129	49,856	3,220,106	—	45,540
その他短期共済	6,141	6,485	7,494	416,907	90,132	7,218
合 計	376,125 [480,494]	373,433 [475,141]	365,760 [466,279]	18,474,634	423,688	360,734 [458,788]

(注) 1. 共済掛金額の合計欄の上段は連合会が収納した共済掛金、下段の〔 〕内は「A」が契約者から収納した共済掛金を表示しています。

2. 「その他短期共済」とは、団体建物火災共済、定額定期生命共済、賠償責任共済の合計であり、共済金額は、団体建物火災共済の金額を表示しています。

3. 契約件数は、以下のとおりです。

火災共済、団体建物火災共済・・・・・・・・・・・・・符号（目的）件数
自動車共済、傷害共済（福祉事業就業中・福祉事業利用者）、賠償責任共済・・・・・・・・・・・・・証書件数
傷害共済（福祉事業就業中・福祉事業利用者以外）、団体定期生命共済、定額定期生命共済・・・・・・・・・被共済者数
自賠責共済・・・・・・・・・・・・・契約台数

(2) 保有契約高（長期共済）

(単位 件数：件、金額：億円)

共済種類		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度		
		保障共済金額	保障共済金額	保障共済金額	契約件数	満期共済金額	保障共済金額
生命総合共済	終身共済	752,545	718,793	687,293	7,372,409	238,264	651,750
	定期生命共済	5,930	8,522	10,656	116,771	—	12,616
	養老生命共済	295,762	260,230	230,146	3,438,148	71,163	204,661
	(うちこども共済)	(84,414)	(80,075)	(75,777)	(1,772,731)	(29,694)	(71,600)
	生命計	1,054,239	987,546	928,095	10,927,328	309,427	869,029
	医療共済	26,753	24,763	22,680	4,749,615	1,274	20,017
	がん共済	2,551	2,459	2,372	1,218,070	—	2,280
	定期医療共済	5,783	5,287	4,948	222,701	—	4,494
	医療系計	35,088	32,511	30,002	6,190,386	1,274	26,792
	介護共済	8,486	9,641	11,344	654,089	18,661	13,253
		[14,167]	[15,143]	[16,756]			
	生活障害共済	[1,727]	[3,666]	[6,261]	186,701	7,783	8,546
		[3,145]	[4,817]	[6,659]			
	特定重度疾病共済	—	—	2,999	237,423	—	4,205
	年金共済	2,631	2,402	2,164	3,826,284	23,191	1,945
		[19,674]	[21,905]	[23,422]			
	生命総合計	1,100,445	1,032,101	971,607	22,022,211	309,427	911,021
建物更生共済		1,426,162	1,421,855	1,415,833	9,372,353	131,924	1,403,483
生命総合・建物更生共済計		2,526,607	2,453,957	2,387,440	31,394,564	441,352	2,314,504
財産形成貯蓄共済		118	118	118	10,809	116	116
合計		2,526,726	2,454,075	2,387,559	31,405,373	441,468	2,314,621

- (注) 1. 平成5年度以前に契約された終身共済、養老生命共済、年金共済については、生命総合共済の終身、養老生命、年金の各共済に含算しています。
2. 終身共済（養老生命共済）の保障共済金額は、終身共済金額（満期共済金額）と定期特約、三大疾病前払特約、生存特約、家族収入保障特約（特約金額×共済期間×1/2）の共済金額および生活保障特約の総支払額の合計です。
3. 定期生命共済の保障共済金額には、三大疾病前払特約および生存特約の共済金額を含みます。
4. 共済金割増支払特約付こども共済の保障金額は、共済金額の5倍相当額としています。
5. 医療共済の満期共済金額は治療共済金額であり、保障共済金額は死亡給付金額（入院共済金額の100倍）、定期特約と家族収入保障特約（特約金額×共済期間×1/2）の共済金額および生活保障特約の総支払額の合計です。なお、平成22年度以降に契約された医療共済には死亡給付金額はありません。
6. がん共済の保障共済金額は、がん死亡共済金額（がん入院共済金額の100倍）です。なお、平成24年度以降に契約されたがん共済にはがん死亡共済金額はありません。
7. 定期医療共済の保障共済金額は、死亡給付金額です。
8. 介護共済の満期共済金額は介護共済金額であり、保障共済金額は一時払介護共済の死亡給付金額です。なお、介護共済には死亡給付金額はありません。また、平成30年度・令和元～2年度については、上段に一時払介護共済の死亡給付金額、下段の〔 〕内に介護共済金額を表示しています。
9. 生活障害共済の満期共済金額は定期年金型生活障害年金原資（年金年額×共済期間×1/2）であり、保障共済金額は一時金型生活障害共済金額です。平成30年度・令和元～2年度については、上段〔 〕内に一時金型の生活障害共済金額、下段の〔 〕内に定期年金型生活障害年金原資を表示しています。
10. 特定重度疾病共済の保障共済金額は特定重度疾病共済金額です。
11. 年金共済の満期共済金額は年金年額であり、保障共済金額は定期特約共済金額です。なお、平成30年度・令和元～2年度については、上段に定期特約共済金額、下段の〔 〕内に年金年額を表示しています。
12. 「生命総合計」、「生命総合・建物更生共済計」および「合計」の満期共済金額には、医療共済の治療共済金額、介護共済の介護共済金額、生活障害共済の定期年金型生活障害年金原資（年金年額×共済期間×1/2）および年金共済の年金年額を含みません。
13. 「生命総合計」、「生命総合・建物更生共済計」および「合計」の保障共済金額には、生活障害共済の一時金型生活障害共済金額、特定重度疾病共済の特定重度疾病共済金額を含みません。

(3) 解約・失効率の状況

		令和3年度末 到達目標	令和3年度末 実績	(参考)	
				令和2年度末	前年度差 ※2
解約・失効率 ※1 (保有ポイント)	生命共済	1.61%以内	2.51%	2.17%	+0.34%
	建物更生共済	1.66%以内	2.14%	2.05%	+0.09%

※1 解約新規を除く保障非継続契約を対象とする。

※2 前年度差のプラスは悪化、マイナスは改善を示す。

(4) 共済金支払実績

(単位：百万円)

共済種類		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度		
		共済金支払計	共済金支払計	共済金支払計	事故共済金	満期共済金	共済金支払計
長期共済	終身共済	317,363	346,148	380,884	417,105	11,541	428,646
	定期生命共済	1,551	1,269	1,714	1,935	3	1,938
	養老生命共済	1,846,714	1,179,821	930,964	60,740	664,677	725,417
	(うちこども共済)	(133,997)	(126,122)	(123,664)	(4,266)	(116,943)	(121,209)
	医療共済	68,103	73,270	69,653	77,069	—	77,069
	がん共済	10,352	11,239	10,977	11,618	—	11,618
	定期医療共済	5,565	5,459	4,647	4,617	382	4,999
	介護共済	5,049	6,691	8,278	10,455	—	10,455
	生活障害共済	9	163	225	372	—	372
	特定重度疾病共済	—	—	147	660	—	660
	年金共済	617,087	633,200	611,791	18,266	585,168 (年金585,143)	603,435
	計	2,871,796	2,257,264	2,019,285	602,841	1,261,772	1,864,613
	建物更生共済	1,371,784	1,584,223	1,593,838	225,694	1,461,386	1,687,081
	財産形成貯蓄共済	2,778	2,028	1,986	—	2,074	2,074
	計 ①	4,246,360	3,843,515	3,615,109	828,535	2,725,233	3,553,769
短期共済	火災共済	5,159	5,189	4,391	4,412	—	4,412
	自動車共済	193,954	190,111	166,265	165,998	—	165,998
	傷害共済	7,098	6,751	6,319	5,878	—	5,878
	団体定期生命共済	12,801	11,992	13,127	13,231	—	13,231
	自賠責共済	35,631	33,722	30,486	28,192	—	28,192
	その他短期共済	7,245	4,440	5,440	4,174	—	4,174
	計 ②	261,892	252,207	226,031	221,887	—	221,887
長期・短期共済合計①+②		4,508,252	4,095,723	3,841,140	1,050,423	2,725,233	3,775,657
その他の共済 ③		40,079	41,523	39,286	5,735	32,918	38,653
(うち建物短期再共済)		(5,037)	(6,123)	(4,790)	(5,735)	—	(5,735)
合計 ① + ② + ③		4,548,331	4,137,246	3,880,427	1,056,159	2,758,151	3,814,311

(注) 1. 平成5年度以前に契約された終身共済、養老生命共済、年金共済については、生命総合共済の終身、養老生命、年金の各共済に合算しています。

2. 生命総合共済の各種入院特約、通院特約、生前給付特約、重度障害年金特約、三大疾病前払特約、がん死亡給付特約、生活保障特約、家族収入保障特約および満期前払特約等については、それぞれの特約が付されている共済契約の種類に含めて計上しています。

3. 短期共済の「その他短期共済」とは、団体建物火災共済、定期定期生命共済、賠償責任共済の合計です。

4. 「その他の共済」とは、退職年金共済、国民年金基金共済、確定拠出年金共済、建物短期再共済の合計です。

2. 主な経営指標等

（1）資産の状況

（単位：億円）

科 目	令和3年度末		令和2年度末
		前年度比 (%)	
総 資 産	581,926	100.3	580,363
うち運用資産	560,292	99.8	561,484

（2）支払余力（ソルベンシー・マージン）比率

（単位：億円）

	令和3年度	令和2年度	前年度差
支払余力の総額 a	126,161	123,455	2,706
リスクの合計額 b	18,590	19,336	△ 746
支払余力比率 $a / ((1/2) \times b) \times 100$	1,357.3%	1,276.9%	80.4%

（注）支払余力（ソルベンシー・マージン）比率とは、通常の手測を超えて発生する諸リスク（巨大災害など）に対応するため、どのくらいの支払余力を備えているかを判断するための経営指標のひとつです。
また、JA共済連では、生命共済事業と損害共済事業の両方を実施しているため、生命保険会社または損害保険会社のソルベンシー・マージン比率と単純に比較はできません。
なお、この比率が200%を下回った場合には、監督官庁による業務改善命令等の対象となります。

（3）基礎利益

（単位：億円）

	令和3年度	令和2年度	前年度差
基 礎 利 益	4,356	5,426	△ 1,070
（うち費差損益）	877	901	△ 23
（うち利差損益）	290	945	△ 654
（うち危険差損益）	3,187	3,578	△ 391

（注）基礎利益とは、共済事業本来の期間損益を示す指標で、具体的には、損益計算書の「経常利益」から、有価証券売却損益などの「キャピタル損益」および異常危険準備金取崩額などの「臨時損益」を除いて算出しています。共済事業は、長期間にわたって契約者への保障を確実に履行するために、共済基金（予定事業費率、予定利率、予定死亡・予定危険率）の設定にあたって、あらかじめ将来のリスクに備えて適度の安全性を確保しています。そのため、この予定の率と決算による実績との差額が発生することになります。

（4）実質純資産額

（単位：億円）

	令和3年度	令和2年度	前年度差
実質純資産額	167,187	181,351	△ 14,163
対総資産比率	28.7%	31.2%	△ 2.5%

（注）実質純資産額とは、実質的な債務超過かどうかを判定するための基準です。
具体的には、「時価評価した資産の額」から「負債から自己資本とみなされるもの（異常危険準備金、価格変動準備金など）を除いた額」を控除して算出しています。

3. 財務の状況

令和3年度末の財務状況は、次のとおりです。

（1）資産の状況

- ① 総資産は、前年度末から1,563億円増加の58兆1,926億円（前年度比100.3%）となりました。
- ② 運用資産は、前年度末から1,192億円減少の56兆292億円（前年度比99.8%）となりました。

（2）負債の状況

- ① 負債の部は、前年度末から2,559億円増加の53兆7,131億円（前年度比100.5%）となりました。
- ② 責任準備金は、前年度末から1,882億円減少の50兆2,710億円（前年度比99.6%）となりました。

（3）純資産の状況

純資産の部は、前年度末から996億円減少の4兆4,795億円（前年度比97.8%）となりました。

＜参考１＞財務状況

(単位：億円、％)

科 目	令和３年度末		令和２年度末		増減額	前年度比
	金額	構成比	金額	構成比		
(資産の部)						
運用資産	560,292	96.3	561,484	96.7	△ 1,192	99.8
未収共済掛金	2,531	0.4	2,184	0.4	346	115.9
業務用固定資産	1,500	0.3	1,402	0.2	98	107.0
資本貸付金	2,000	0.3	2,000	0.3	-	100.0
外部出資	1,099	0.2	1,088	0.2	10	101.0
繰延税金資産	11,826	2.0	10,480	1.8	1,346	112.9
貸倒引当金	△ 24	△ 0.0	△ 28	△ 0.0	3	87.5
外部出資等損失引当金	△ 7	△ 0.0	△ 7	△ 0.0	△ 0	100.7
その他	2,707	0.5	1,758	0.3	949	154.0
資産の部合計	581,926	100.0	580,363	100.0	1,563	100.3
(負債の部)						
共済契約準備金	517,943	89.0	519,965	89.6	△ 2,021	99.6
(うち責任準備金)	(502,710)	(86.4)	(504,593)	(86.9)	(△ 1,882)	(99.6)
(うち契約者割戻準備金)	(5,493)	(0.9)	(5,614)	(1.0)	(△ 121)	(97.8)
その他負債	5,688	1.0	1,958	0.3	3,730	290.5
諸引当金	415	0.1	425	0.1	△ 9	97.7
価格変動準備金	12,900	2.2	12,027	2.1	873	107.3
その他	182	0.0	194	0.0	△ 12	93.7
負債の部合計	537,131	92.3	534,571	92.1	2,559	100.5
(純資産の部)						
会員資本合計	31,450	5.4	30,709	5.3	741	102.4
(うち出資金)	(7,565)	(1.3)	(7,565)	(1.3)	(-)	(100.0)
評価・換算差額等合計	13,345	2.3	15,082	2.6	△ 1,737	88.5
純資産の部合計	44,795	7.7	45,791	7.9	△ 996	97.8
負債及び純資産の部合計	581,926	100.0	580,363	100.0	1,563	100.3

＜参考２＞運用資産の内訳

(単位：億円、％)

科 目	令和３年度末		令和２年度末		増減額	前年度比
	金額	構成比	金額	構成比		
現預金・コールローン	6,102	1.1	8,917	1.6	△ 2,815	68.4
金銭の信託	2,409	0.4	2,305	0.4	103	104.5
金銭債権	140	0.0	201	0.0	△ 60	70.0
有価証券	543,059	96.9	540,453	96.3	2,606	100.5
公社債	438,290	78.2	450,407	80.2	△ 12,116	97.3
外国証券	54,708	9.8	45,669	8.1	9,039	119.8
株式	15,269	2.7	14,764	2.6	505	103.4
その他の有価証券	34,791	6.2	29,612	5.3	5,178	117.5
貸付金	5,661	1.0	6,653	1.2	△ 991	85.1
運用不動産	2,918	0.5	2,954	0.5	△ 35	98.8
合計	560,292	100.0	561,484	100.0	△ 1,192	99.8

4. 収支の状況

令和3年度の収支状況は、次のとおりです。

（1）経常損益の状況

① 経常損益

経常収益は、前年度から48億円増加の5兆9,927億円（前年度比100.1%）となりました。経常費用は、前年度から11億円増加の5兆8,224億円（前年度比100.0%）となりました。

以上の結果、経常利益は、前年度から37億円増加の1,703億円（前年度比102.3%）となりました。

② 経常損益の主要科目

ア. 受入共済掛金は、前年度同水準の4兆6,396億円（前年度比100.4%）となりました。

イ. 支払共済金は、生命総合共済の満期共済金が減少したことなどから、前年度から397億円減少の3兆8,709億円（前年度比99.0%）となりました。

ウ. 財産運用収益から財産運用費用を差し引いた正味財産運用益は、クーポン（利率）の高い債券の償還による円建債券利息収入が減少したことなどにより、前年度から214億円減少の8,956億円となり、正味運用利回りは1.66%（前年度1.70%）となりました。

エ. 事業普及費と事業管理費の合計は、前年度から11億円増加の1,388億円（前年度比100.9%）となりました。

＜参考3＞経常損益状況

(単位：億円、%)

科 目	令 和 3 年 度	令 和 2 年 度	増 減 額	前 年 度 比
経 常 収 益	59,927	59,878	48	100.1
直 接 事 業 収 益	46,526	46,326	199	100.4
（うち受入共済掛金）	(46,396)	(46,203)	(192)	(100.4)
共済契約準備金戻入額	2,466	2,590	△ 124	95.2
（うち責任準備金戻入額）	(1,876)	(1,961)	(△ 84)	(95.7)
財 産 運 用 収 益	10,797	10,865	△ 67	99.4
そ の 他 経 常 収 益	136	94	41	143.8
経 常 費 用	58,224	58,213	11	100.0
直 接 事 業 費 用	53,193	52,906	286	100.5
（うち支払返戻金）	(12,590)	(11,915)	(674)	(105.7)
（うち支払共済金）	(38,709)	(39,106)	(△ 397)	(99.0)
共済契約準備金繰入額	137	991	△ 853	13.9
（うち支払備金繰入額）	(41)	(895)	(△ 853)	(4.7)
財 産 運 用 費 用	1,841	1,694	146	108.7
価格変動準備金繰入額	873	390	483	223.8
事業普及費・事業管理費	1,388	1,376	11	100.9
そ の 他 経 常 費 用	789	853	△ 64	92.5
経 常 利 益	1,703	1,665	37	102.3
特 別 利 益	20	29	△ 8	70.4
特 別 損 失	20	50	△ 29	41.2
税 引 前 当 期 剰 余	1,703	1,644	58	103.6
法 人 税 等 合 計	301	275	25	109.4
契約者割戻準備金繰入額	372	334	37	111.3
当 期 剰 余 金	1,029	1,034	△ 4	99.5

（２）法人税等合計・契約者割戻準備金繰入額および剰余金の状況**① 法人税等合計**

法人税等合計は、前年度から 25 億円増加の 301 億円（前年度比 109.4%）となりました。

（単位：億円、%）

科 目	令和3年度	令和2年度	増減額	前年度比
法人税等合計	301	275	25	109.4
法人税、住民税及び事業税	979	954	24	102.6
法人税等調整額	△ 677	△ 679	1	99.8

② 契約者割戻準備金繰入額

契約者割戻準備金繰入額は、前年度から 37 億円増加の 372 億円（前年度比 111.3%）となりました。

（単位：億円、%）

科 目	令和3年度	令和2年度	増減額	前年度比
契約者割戻準備金繰入額	372	334	37	111.3

③ 当期剰余金・当期末処分剰余金

当期剰余金は、前年度から 4 億円減少の 1,029 億円（前年度比 99.5%）となりました。

また、当期末処分剰余金は、前年度から 50 億円減少の 2,243 億円（前年度比 97.8%）となりました。

5. 貸借対照表

第72年度〔令和4年3月31日現在〕貸借対照表

(単位：百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資 産 の 部)		(負 債 の 部)	
預金	610,211	共済契約準備金	51,794,398
系統預金	593,443	支払備金	973,965
系統外預金	16,767	責任準備金	50,271,061
金銭の信託	240,905	契約者割戻準備金	549,372
金銭債権	14,092	未払再保険勘定	11,239
有価証券	54,305,987	代理店勘定	516
国債	38,436,871	共済資金	6,467
地方債	2,466,467	その他負債	568,834
政府保証債	840,102	借入金	200,000
短期社債	299,974	未払法人税等	81,410
社債	1,785,626	金融派生商品	135,473
外国証券	5,470,861	前受収益	492
株式	1,526,973	未払費用	2,218
その他の有価証券	3,479,108	リース債務	3,543
貸付金	566,154	資産除去債務	1,920
共済契約貸付	81,577	その他の負債	143,775
一般貸付	386,005	諸引当金	41,569
その他の貸付	98,571	賞与引当金	2,922
運用不動産	291,893	退職給付引当金	38,337
有形固定資産	289,171	役員退職慰労引当金	310
無形固定資産	2,722	価格変動準備金	1,290,080
未収共済掛金	253,168		
未収再保険勘定	11,861	負 債 の 部 合 計	53,713,106
その他資産	258,851		
金融派生商品	10,905	(純 資 産 の 部)	
金融商品等差入担保金	599	出資金	756,537
前払費用	1,367	利益剰余金	2,388,527
未収収益	102,195	利益準備金	451,064
その他の資産	143,783	その他利益剰余金	1,937,462
業務用固定資産	150,077	特別危険積立金	138,349
有形固定資産	77,142	災害救援積立金	28,986
建物	31,834	共済契約特別積立金	1,373,248
土地	36,335	交通事故対策基金	67,194
リース資産	3,885	経営基盤整備積立金	38,145
建設仮勘定	18	地域・農業活性化積立金	67,218
その他の有形固定資産	5,068	当期末処分剰余金	224,319
無形固定資産	72,934	(うち当期剰余金)	102,937
資本貸付金	200,000	会 員 資 本 合 計	3,145,064
外部出資	109,984	その他有価証券評価差額金	1,334,516
系統出資	34,609	評価・換算差額等合計	1,334,516
系統外出資	12,812		
子会社等出資	62,562	純 資 産 の 部 合 計	4,479,581
繰延税金資産	1,182,686		
貸倒引当金	△ 2,474		
外部出資等損失引当金	△ 713		
資 産 の 部 合 計	58,192,687	負債及び純資産の部合計	58,192,687

6. 損益計算書

第72年度 令和3年4月1日から
令和4年3月31日まで 損益計算書

(単位：百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
経常収益	5,992,749	価格変動準備金繰入額	87,333
直接事業収益	4,652,645	事業普及費	22,188
受入共済掛金	4,639,646	事業管理費	116,672
再保険金	2,770	人件費	62,390
再保険払戻金	13	業務費	25,984
その他の直接事業収益	10,214	諸税負担金	14,052
共済契約準備金戻入額	246,665	施設費	13,696
責任準備金戻入額	187,677	雑費	548
契約者割戻準備金戻入額	58,987	その他経常費用	78,955
財産運用収益	1,079,779	寄付金	3
利息及び配当金収入	780,782	交通事故対策事業費	1,354
預金利息	8	経営基盤整備事業費	61,854
有価証券利息配当金	749,019	地域・農業活性化事業費	11,698
貸付金利息	6,854	その他の経常費用	4,045
不動産賃貸料	22,189	経常利益	170,334
その他の利息及び配当金	2,710	特別利益	2,061
金銭の信託運用益	16,582	固定資産処分益	1,068
有価証券売却益	116,059	異常危険準備金限度超過取崩額	587
その他の運用収益	166,353	その他の特別利益	405
特別勘定資産運用益	1	特別損失	2,073
その他経常収益	13,657	固定資産処分損	500
受取出資配当金	1,348	減損損失	7
受取特別配当金	6	災害救援金	1,013
その他の経常収益	12,303	その他の特別損失	552
経常費用	5,822,414	税引前当期剰余	170,322
直接事業費用	5,319,350	法人税等合計	30,141
支払払戻金	52,159	法人税、住民税及び事業税	97,939
支払返戻金	1,259,025	法人税等調整額	△ 67,798
支払共済金	3,870,956	契約者割戻準備金繰入額	37,242
支払割戻金	58,766	当期剰余金	102,937
再保険料	65,335	当期首繰越剰余金	45,461
その他の直接事業費用	13,108	災害救援積立金取崩額	1,013
共済契約準備金繰入額	13,798	交通事故対策基金取崩額	1,354
支払備金繰入額	4,171	経営基盤整備積立金取崩額	61,854
割戻金据置利息繰入額	9,627	地域・農業活性化積立金取崩額	11,698
財産運用費用	184,115	当期未処分剰余金	224,319
有価証券売却損	5,473		
有価証券評価損	0		
金融派生商品費用	163,747		
貸付事務費	0		
不動産管理費	5,417		
不動産償却費	4,766		
その他の運用費用	4,710		

7. 注記表

I. 継続組合の前提に関する注記

該当事項はありません。

II. 重要な会計方針に係る事項に関する注記

1. 有価証券等の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

有価証券（「有価証券」のほか「金銭債権」及び「外部出資」中の有価証券を含む。）の評価基準及び評価方法は、以下のとおりであります。

① 売買目的有価証券

時価（売却原価の算定は移動平均法）により評価しております。

② 満期保有目的の債券

移動平均法による償却原価（定額法）により評価しております。

③ 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価により評価しております。

なお、子会社株式とは、「農業協同組合法施行規則」第6条第2項に規定する子法人等が発行する株式のことであり、関連会社株式とは、「農業協同組合法施行規則」第6条第3項に規定する関連法人等が発行する株式のことであります。

④ 責任準備金対応債券

移動平均法による償却原価（定額法）により評価しております。

なお、「責任準備金対応債券」とは、「保険業における『責任準備金対応債券』に関する当面の会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第21号 平成12年11月16日）に準じた一定の要件を満たす円貨建債券を分類したものであります。

⑤ その他有価証券

ア 市場価格のない株式等以外のもの

有価証券の評価は期末日の市場価格等に基づく時価（売却原価の算定は移動平均法）により評価しております。

イ 市場価格のない株式等

移動平均法による原価により評価しております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(2) 金銭の信託

金銭の信託において信託財産を構成している有価証券の評価基準及び評価方法は、上記(1)の有価証券と同様の方法によっております。

また、評価は信託の契約単位ごとに行い、その評価額の合計額を貸借対照表に計上しております。

(3) デリバティブ取引

時価により評価しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

運用不動産及び業務用固定資産の減価償却の方法は、以下のとおりであります。

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法により償却しております。

但し、平成10年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く。）並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法により償却しております。

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法により償却しております。

なお、ソフトウェアの減価償却の方法は、利用可能期間（5年）に基づく定額法により償却しております。

（３）リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法により償却しております。

３．外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建の資産及び負債は、期末日の為替相場により円換算しております。但し、海外子会社株式については、取得時の為替相場により円換算しております。

４．引当金の計上基準

（１）貸倒引当金

貸倒引当金は、債権の貸倒れ等による損失に備えるため、資産査定基準及び償却・引当基準に則り、以下のとおり計上しております。

- ① 破産・会社更生・特別清算・民事再生等、法的・形式的な経営破綻の事実が発生している債務者（以下、「破綻先」という。）に対する債権及び実質的に経営破綻に陥っている債務者（以下、「実質破綻先」という。）に対する債権については、下記Ⅲ．１．に記載されている直接減額後の債権額から担保の処分可能見込額及び保証等による回収可能見込額を控除した残額を計上しております。

また、現状では経営破綻の状況にはないものの、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下、「破綻懸念先」という。）に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証等による回収可能見込額を控除し、その残額のうち債務者の支払能力を総合的に判断して必要と認められる額を計上しております。

- ② 上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。
- ③ すべての債権は、資産査定基準に基づき、関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した部署が検証しており、その査定結果に基づいて引当金の計上を行っております。

（２）外部出資等損失引当金

外部出資等損失引当金は、外部出資先への出資に係る損失に備えるため、資産査定基準及び償却・引当基準に則り、必要と認められる額を計上しております。

（３）賞与引当金

賞与引当金は、職員賞与の支払に備えるため、支給見込額のうち当期に帰属する額を計上しております。

（４）退職給付引当金

退職給付引当金は、職員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当期末までに発生していると認められる額を計上しております。

なお、退職給付債務並びに退職給付費用の処理方法は以下のとおりであります。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当年度までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

数理計算上の差異については、各年度の発生時における職員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（13年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の年度から費用処理しております。

過去勤務費用は、その発生時の職員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（13年）による定額法により費用処理しております。

（５）役員退職慰労引当金

役員退職慰労引当金は、役員の退職慰労金の支払に備えるため、役員退職慰労金規程に定める支給見込額を計上しております。

（６）価格変動準備金

価格変動準備金は、「農業協同組合法」第11条の34の規定に基づく準備金であり、「農業協同組合法施行規則」第36条の規定に基づいて算出した所要額を計上しております。

5. 消費税及び地方消費税の会計処理の方法

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜経理方式によっております。

なお、資産に係る控除対象外消費税等は、その他の資産に計上し、5年間で均等償却しております。

6. 決算書類に記載した金額の端数処理の方法

決算書類に記載した金額は、百万円未満を切り捨てて表示しております。

7. その他決算書類の作成のための基本となる重要な事項

(1) 受入共済掛金

受入共済掛金は、収納があり、共済契約上の責任が開始しているものについて、当該収納した金額により計上しております。

なお、収納した共済掛金のうち、期末時点において未経過となっている期間に対応する部分については、「農業協同組合法」第11条の32及び「農業協同組合法施行規則」第31条第1項第2号の規定に基づき、責任準備金に積み立てております。

(2) 支払共済金、支払返戻金、支払払戻金、支払割戻金（以下、「支払共済金等」という。）

支払共済金等は、共済約款に基づく支払事由が発生し、当該約款に基づいて算定された金額を支払った契約について、当該金額により計上しております。

なお、「農業協同組合法」第11条の33及び「農業協同組合法施行規則」第33条の規定に基づき、期末時点において支払義務が発生しているが支払いが行われていない、または支払事由の報告を受けていないが支払事由が既に発生したと認められる共済金等について、支払備金に積み立てております。

(3) 責任準備金の積立方法

責任準備金は、期末時点において、共済契約上の責任が開始している契約について、共済契約に基づく将来における債務の履行に備えるため、「農業協同組合法」第11条の32の規定に基づき、共済掛金及び責任準備金の算出方法書（「農業協同組合法」第11条の17第1項及び第2項）に記載された方法に従って計算し、積み立てております。

責任準備金のうち共済掛金積立金については、「農業協同組合法施行規則」第31条第4項の規定に基づき、平準純共済掛金式により計算しております。

なお、期末時点における責任準備金には、生命総合共済・建物更生共済の一部の契約を対象に、「農業協同組合法施行規則」第31条第5項の規定により、追加して積み立てた責任準備金が含まれております。

この規定に基づき、当期に一部の生命総合共済を対象に積み立てた額は117,787百万円であり、このうち、当期より新たに積立対象とした共済契約に係る必要財源は、前期末までに積み立てた異常危険準備金63,533百万円を取り崩して充当しております。

また、責任準備金のうち異常危険準備金については、「農業協同組合法」第11条の32及び「農業協同組合法施行規則」第31条第1項第3号の規定に基づき、共済契約に基づく将来の債務を確実に履行するため、将来発生が見込まれる危険に備えて積み立てております。

(4) 責任準備金対応債券

責任準備金対応債券に関する事項は、以下のとおりであります。

- ① 生命総合共済及び建物更生共済の当期末の保有契約から発生すると予測される支出額（共済金・事業費等）のデュレーション（金利変動に対する時価変動の程度を表す指標）と、当該保有契約から発生すると予測される共済掛金のうち予め定められた一定割合の収入額及び責任準備金対応債券とのデュレーションが、定められた範囲となるように責任準備金対応債券を管理しております。
- ② 責任準備金対応債券のデュレーション及び資金配分に係る運用方針を理事会において定めており、収支分析の結果に基づき運用方針の見直しを行っております。
- ③ 責任準備金対応債券に係る小区分の設定に当たっては、将来における一定期間の共済収支に基づくデュレーションを勘案した方法を採用しております。この方法に用いた将来の共済収支の期間は40年、保有契約から将来40年以内に発生すると予測される支出額のデュレーションは11.9年、保有契約から将来40年以内に発生すると予測される共済掛金のデュレーションは8.9年、責任準備

備金対応債券のデュレーションは12.6年であります。

(会計方針の変更)

「時価の算定に関する会計基準」（企業会計基準第30号 令和元年7月4日、以下「時価算定会計基準」という。）等を当会計期間の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号 令和元年7月4日）第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することといたしました。これにより、その他有価証券のうち市場価格のない株式等以外のものは、期末日前1か月平均に基づいた市場価格等により評価しておりましたが、当会計期間末より期末日の市場価格により評価しております。

Ⅲ. 貸借対照表に関する注記

1. 資産に係る引当金を直接控除した場合における各資産の資産項目別の引当金の金額

破綻先及び実質破綻先に対する債権については、債権額から担保の評価額及び保証等による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は31百万円であります。

2. 運用不動産及び業務用固定資産の減価償却累計額及び圧縮記帳額

運用不動産及び業務用固定資産の減価償却累計額、国庫補助金又は保険差益の受領等により取得価額から控除している圧縮記帳額は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

種類	減価償却累計額	圧縮記帳額
運 用 不 動 産	121,098	0 (うち当期分：-)
業務用固定資産	83,754	366 (うち当期分：-)
合 計	204,852	366 (うち当期分：-)

3. リース契約により使用する重要な固定資産

オペレーティング・リース取引については、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。なお、未経過リース料は以下のとおりであります。

1年内	124 百万円
1年超	1,105
合 計	1,230

4. 本会が貸手となっているリース契約

オペレーティング・リース取引については、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。なお、未経過リース料は以下のとおりであります。

1年内	8,784 百万円
1年超	22,419
合 計	31,203

5. 担保に供している資産

担保に供している資産の種類等は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

種類	担保に供している資産		担保に係る債務	
	期末帳簿価額	担保の種類	内容	期末残高
有価証券	654,152	質権	該当なし	-

6. 貸付有価証券

消費貸借契約により貸し付けている有価証券の貸借対照表計上額は、5,796,696百万円であります。

7. 子会社等に対する金銭債権及び金銭債務

子会社等に対する金銭債権の総額は 369 百万円であり、金銭債務の総額は 47,883 百万円であります。

8. 役員との間の取引による役員に対する金銭債権及び金銭債務

理事、経営管理委員及び監事に対する金銭債権・金銭債務はありません。

9. 「農業協同組合法施行規則」第 200 条第 1 号に規定する額

「農業協同組合法施行規則」第 200 条第 1 号に規定する額はありません。

10. 特別法上の準備金等

自動車損害賠償責任共済の責任準備金は、「自動車損害賠償保障法」第 28 条の 3 の規定に基づき「自動車損害賠償保障法第 28 条の 3 第 1 項に規定する準備金の積立て等に関する命令」に定める額を計上しております。

11. リスク管理債権の状況

債権のうち、「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」、「危険債権」、「三月以上延滞債権」並びに「貸付条件緩和債権」の合計額は 10,673 百万円であります。なお、内訳については以下のとおりであります。

(1) 債権のうち、破産更生債権及びこれらに準ずる債権額はあります。

なお、「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

(2) 債権のうち、危険債権額はあります。

なお、「危険債権」とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」に該当しない債権であります。

(3) 債権のうち、三月以上延滞債権額はあります。

なお、「三月以上延滞債権」とは、元本または利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸付金で「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」、「危険債権」に該当しないものであります。

(4) 債権のうち、貸付条件緩和債権額は 10,673 百万円であります。

なお、「貸付条件緩和債権」とは、債務者の経営再建または支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸付金で、「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」、「危険債権」、「三月以上延滞債権」に該当しないものであります。

(表示方法の変更)

「農業協同組合法施行規則の一部を改正する省令」（農林水産省令第 85 号 令和 2 年 12 月 23 日）が令和 4 年 3 月 31 日から施行されたことに伴い、農業協同組合法施行規則の「リスク管理債権」の区分等を、金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく開示債権の区分等に合わせて表示しております。

12. 特別勘定の資産及び負債

「農業協同組合法」第 11 条の 37 に規定する特別勘定（確定拠出年金共済）の資産の額は 63 百万円であります。

なお、負債の額も同額であります。

13. 再保険契約に係る責任準備金

「農業協同組合法施行規則」第32条に規定する再保険に付した部分に相当する責任準備金の額は3,740百万円であります。

14. 資本貸付金

農林中央金庫に対する永久劣後ローンであります。

15. 借入金

円建劣後ローンであります。

IV. 損益計算書に関する注記

1. 子会社等との取引高

子会社等との取引高は、以下のとおりであります。

(単位：百万円)

区分	収益総額	費用総額
事業取引	4,949	30,207
事業取引以外	5,356	7
合 計	10,306	30,214

2. 減損損失

当期における固定資産の減損損失に関する事項は、以下のとおりであります。

(1) 資産のグルーピング方法

共済事業の用に供している不動産等については、共済事業全体で1つの資産グループとしております。

また、共済事業の用に供していない賃貸用不動産及び遊休資産等については、それぞれの物件ごとに1つの資産グループとしております。

(2) 減損損失の認識に至った経緯

不動産市況の悪化等により、一部の資産グループに著しい収益性の低下または時価の下落が見られたことから、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

(3) 減損損失を認識した資産グループと減損損失計上額の固定資産の種類ごとの内訳

用途	場所	件数 (件)	減損損失（百万円）		
			土地	建物等	計
賃貸用不動産	該当なし	-	-	-	-
遊休資産等	長野県他	5	2	5	7
合 計		5	2	5	7

(4) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、賃貸用不動産については物件により使用価値または正味売却価額を、遊休資産等については正味売却価額を適用しております。なお、使用価値については将来キャッシュ・フローを3%で割り引いて算定しております。また、正味売却価額については不動産鑑定評価基準に基づく鑑定評価額または固定資産税評価額に一定の倍率を乗じて計算した評価額等から処分費用見込額を差し引いて算定しております。

V. 金融商品に関する注記

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

本会は、生命・損害両分野の共済事業を行っており、長期の予定利率固定型仕組みを主力としていることから、責任準備金が長期の固定金利資金として負債の大部分を占めております。

この負債特性を考慮し、共済金や返戻金等の支払を将来にわたって確実に実行するため、円貨建の確定利付資産（公社債等）を主体とした運用を行うなか、収益性向上に向けた外国証券運用等にも取り組んでおります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

本会が保有する金融資産は、主として国債、地方債、政府保証債及び社債を中心とした円貨建債券であり、その大部分を責任準備金対応債券として保有しております。そのほか主に、国内の貸付金、株式及び投資信託への投資を行っております。これらは、与信先の信用リスク、市場価格の変動リスク及び為替リスクに晒されております。なお、資産と負債を経済価値ベースで評価した場合には、金利の変動による資産・負債の感応度の違いにより生じる金利リスクを有しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

本会は、「リスク管理基本方針」のもと、「資産運用リスク管理方針」及び「資産運用リスク管理規程」を設け、各リスクに関する管理諸規程を定め、リスクの管理を行っております。

また、各リスクの状況については、資産運用リスク管理部門が、定期的に理事会等に報告を行っております。

① 信用リスクの管理

本会は、信用リスクに関する管理諸規程等に従い、貸付金については、個別案件ごとの与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部信用格付、保証や担保の設定及び問題債権への対応等、与信管理に関する体制を整備し運営しております。これらの与信管理は、投融資執行部門のほか信用評価・審査部門及び資産運用リスク管理部門により行われております。

有価証券の発行体等の信用リスクに関しては、信用状況や時価の把握を定期的に行うことで管理しております。

また、特定の企業または企業グループに対する与信集中の回避を目的とした与信限度額設定による管理を行っております。

② 市場リスクの管理

投融資執行部門は、理事会で決定した資金運用計画に基づき、部署ごとに運用方針、運用基準及び手続要領等を設定して、購入前の事前審査、購入後の継続的なモニタリングを実施しております。また、資産運用リスク管理部門は、リスク管理方法や手続等を定めた要領に基づき、想定以上の損失の発生を未然に防止するため、評価損益の一元的な管理や限度枠の設定等を行い、ポートフォリオ全体の管理を行っております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。金融商品の時価の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

(1) 金融商品の貸借対照表計上額及び時価

当期末における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等及び組合等への出資は、次表には含めず(2)に記載しております。また、預金は短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

(単位：百万円)

種類	貸借対照表計上額	時価	差額
有価証券			
売買目的有価証券	63	63	-
満期保有目的の債券	3,360,448	4,297,157	936,709
責任準備金対応債券	34,840,153	38,645,665	3,805,512
其他有価証券	15,981,662	15,981,662	-
貸付金	566,154		
貸倒引当金(*)	△ 1,483		
貸倒引当金控除後	564,670	576,250	11,580
合 計	54,746,997	59,500,799	4,753,801

(*)貸付金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(2) 市場価格のない株式等及び組合等への出資

市場価格のない株式等及び組合等への出資の貸借対照表計上額は次のとおりであり、これらは

(1)の金融商品の時価情報には含まれておりません。

(単位：百万円)

区分	貸借対照表計上額
市場価格のない株式等(*)	89,522
組合等への出資(*)	34,137
合 計	123,660

(*)市場価格のない株式等には非上場株式等が含まれ、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 令和2年3月31日)第5項に従い、時価開示の対象とはしていません。

(*)組合等への出資は主に匿名組合、投資事業組合等であります。これらは「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和元年7月4日)第27項に従い、時価開示の対象とはしていません。

(3) 貸付金及び満期のある有価証券の決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

種類	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
有価証券	1,556,782	3,657,939	3,955,934	3,235,564	7,315,022	28,570,456
満期保有目的の債券	-	-	-	13,666	-	3,320,234
責任準備金対応債券	1,118,283	2,596,191	2,719,910	2,032,046	5,179,261	20,973,274
其他有価証券のうち満期があるもの	438,499	1,061,748	1,236,024	1,189,852	2,135,761	4,276,947
貸付金(*)	86,335	90,163	94,279	113,466	89,523	10,257
合 計	1,643,117	3,748,103	4,050,214	3,349,030	7,404,545	28,580,713

(*)貸付金のうち、農村還元等貸付及び共済契約貸付81,578百万円は含めておりません。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、同一の資産又は負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価
時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価をもって貸借対照表計上額とする金融商品

(単位:百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券(*)				
其他有価証券				
国債	3,375,814	-	-	3,375,814
地方債	-	378,378	-	378,378
政府保証債	-	120,557	-	120,557
短期社債	-	299,974	-	299,974
社債	-	1,453,716	-	1,453,716
外国証券	1,450,084	1,134,482	55,014	2,639,582
株式	1,526,973	-	-	1,526,973
その他の有価証券	-	-	-	-
合 計	6,352,873	3,387,109	55,014	9,794,997

(*)投資信託については、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和元年7月4日）第26項の経過措置を適用しており、注記を省略しております。なお、令和4年3月31日における貸借対照表計上額は、6,186,727百万円であります。

(2) 時価をもって貸借対照表計上額としない金融商品

(単位:百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券				
満期保有目的の債券				
国債	4,088,937	-	-	4,088,937
地方債	-	156,139	-	156,139
政府保証債	-	52,081	-	52,081
社債	-	-	-	-
責任準備金対応債券				
国債	35,413,482	-	-	35,413,482
地方債	-	2,131,456	-	2,131,456
政府保証債	-	732,684	-	732,684
社債	-	368,042	-	368,042
貸付金	-	-	576,250	576,250
合 計	39,502,419	3,440,403	576,250	43,519,074

(注1) 時価の算定に用いた評価技法及びインプットの説明

① 有価証券

有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しています。主に上場株式や国債がこれに含まれます。

公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しています。主に地方債、社債がこれに含まれます。

相場価格が入手できない場合には、ブローカー等から入手する評価額をもって時価としており、重要な観察できないインプットを用いている場合にはレベル3、そうでない場合はレベル2の時価に分類しております。

② 貸付金

貸付金のうち、一般貸付、公共団体貸付及び外国政府等貸付については、内部信用格付、期間及び担保・保証に基づき、契約別に信用リスク等を考慮した将来キャッシュ・フローを見積もり、市場金利等を基に算出した割引率を用いた割引現在価値法により、時価を算定しております。なお、破綻懸念先、実質破綻先及び破綻先となる貸付金については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて個別貸倒引当金を算定しており、時価は債権額から個別貸倒引当金を控除した金額に近似しているものと想定されることから、当該価額をもって時価としております。

農村還元等貸付については、金額の重要性が乏しいことから、帳簿価額を時価としております。

また、共済契約貸付については当該貸付を担保の範囲内に限り、返済期間を1年以内としているものの解約返戻金の一定の範囲内であれば延長が可能である契約もしくは返済期限の定めのない契約であります。返済の見込まれる期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額に近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

いずれの時価においても観察できないインプットを使用しており、レベル3の時価に分類しています。

(注2) 時価をもって貸借対照表計上額とする金融商品のうちレベル3の時価に関する情報

① 重要な観察できないインプットに関する定量的情報

本会自身が観察できないインプットを推計していないため、注記を省略しております。

② 期首残高から期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益

(単位：百万円)

	有価証券 其他有価証券 外国証券	合計
期首残高	32,993	32,993
当期の損益	△772	△772
評価・換算差額等に計上(*1)	△772	△772
購入、売却、発行及び決済	3,000	3,000
レベル3の時価への振替(*2)	19,794	19,794
レベル3の時価からの振替(*3)	-	-
期末残高	55,014	55,014
当期の損益に計上した額のうち貸借対照表日において保有する金融資産及び金融負債の評価損益	-	-

(*1) 貸借対照表の評価・換算差額等の其他有価証券評価差額金に含まれています。

(*2) レベル2の時価からレベル3の時価への振替であり、外国証券についての市場の活動の減少により観察可能な市場データが不足していることによるものです。当該振替は会計期間の末日に行っています。

(*3) レベル3の時価からレベル1又はレベル2の時価への振替はありません。

(3) 時価の評価プロセスの説明

本会は決算担当部門にて時価の算定に関する方針及び手続を定めており、これに沿って各取引部門が時価を算定しています。算定された時価は、独立した評価部門にて、時価の算定に用いられた評価技法及びインプットの妥当性並びに時価のレベルの分類の適切性を検証しています。検証結果は毎期決算担当部門に報告され、時価の算定の方針及び手続に関する適正性が確保されています。

時価の算定にあたっては、個々の資産の性質、特性及びリスクを最も適切に反映できる評価モデルを用いています。また、第三者から入手した相場価格を利用する場合においても、利用されている評価技法及びインプットの確認や類似の金融商品の時価との比較等の適切な方法により価格の妥当性を検証しています。

(4) 重要な観察できないインプットを変化させた場合の時価に対する影響に関する説明

本会自身が観察できないインプットを推計していないため、注記を省略しております。

VI. 有価証券に関する注記

1. 市場価格のない株式等以外のもの

保有目的ごとの有価証券に関する注記事項は以下のとおりであります。

(1) 売買目的有価証券

(単位：百万円)

種類	貸借対照表計上額	当期の損益に含まれた評価差額
投資信託	63	1

(2) 満期保有目的の債券

(単位：百万円)

種類		貸借対照表計上額	時価額	評価差額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	国債	3,198,289	4,088,937	890,648
	地方債	121,575	156,139	34,563
	政府保証債	40,583	52,081	11,497
	小計	3,360,448	4,297,157	936,709
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	国債	-	-	-
	地方債	-	-	-
	政府保証債	-	-	-
	小計	-	-	-
合計		3,360,448	4,297,157	936,709

(3) 責任準備金対応債券

(単位：百万円)

種類		貸借対照表 計上額	時価額	評価差額
時価が貸借対照 表計上額を超えるもの	国債	27,137,939	31,003,498	3,865,558
	地方債	1,522,778	1,701,164	178,386
	政府保証債	546,331	611,161	64,829
	社債	331,910	368,042	36,131
	小計	29,538,961	33,683,866	4,144,905
時価が貸借対照 表計上額を超えないもの	国債	4,724,827	4,409,983	△314,843
	地方債	443,735	430,291	△13,443
	政府保証債	132,628	121,523	△11,105
	社債	-	-	-
	小計	5,301,191	4,961,798	△339,393
合計		34,840,153	38,645,665	3,805,512

(4) その他有価証券

(単位：百万円)

種類		取得原価 または償却原価	貸借対照表 計上額	評価差額
貸借対照表計上 額が取得原価ま たは償却原価を 超えるもの	金銭債権	13,452	14,092	639
	国債	1,151,551	1,247,748	96,197
	地方債	347,838	352,337	4,499
	政府保証債	87,555	94,413	6,857
	短期社債	17,999	17,999	0
	社債	1,038,668	1,086,776	48,107
	外国証券	2,236,431	3,045,272	808,840
	株式	609,834	1,424,172	814,338
	その他の有価証券	1,274,428	1,713,188	438,760
	小計	6,777,761	8,996,002	2,218,240
貸借対照表計上 額が取得原価ま たは償却原価を 超えないもの	金銭債権	-	-	-
	国債	2,253,519	2,128,066	△125,453
	地方債	26,956	26,041	△914
	政府保証債	28,163	26,144	△2,018
	短期社債	281,994	281,974	△20
	社債	372,761	366,939	△5,822
	外国証券	2,574,205	2,425,589	△148,616
	株式	115,521	102,801	△12,720
	その他の有価証券	1,781,748	1,642,196	△139,551
	小計	7,434,870	6,999,752	△435,118
合計		14,212,632	15,995,754	1,783,122

なお、上記の評価差額の合計額 1,783,122 百万円に下記 5. (4) の評価差額 61,702 百万円を加えた 1,844,824 百万円から、繰延税金負債 510,308 百万円を差し引いた額 1,334,516 百万円をその他有価証券評価差額金に計上しております。

2. 当期中に売却した有価証券

当期中に売却した満期保有目的の債券、責任準備金対応債券及びその他有価証券に関する事項は、以下のとおりであります。

(1) 満期保有目的の債券

当期中に売却した有価証券はありません。

(2) 責任準備金対応債券

(単位：百万円)

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
国 債	1,024,475	7,255	-
合 計	1,024,475	7,255	-

(3) その他有価証券

(単位：百万円)

種類	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
国 債	285,266	5,320	1,048
地 方 債	71,198	56	10
社 債	156,737	157	-
外 国 証 券	437,798	79,247	2,679
株 式	39,136	4,532	1,735
その他の有価証券	79,697	19,491	-
合 計	1,069,835	108,804	5,473

3. 保有目的が変更となった有価証券

当期中に保有目的が変更となった有価証券はありません。

4. 当期中に減損処理を行った有価証券

当期中に減損処理を行った有価証券はありません。

5. 金銭の信託

金銭の信託の保有目的区分別の内訳は、以下のとおりであります。

(1) 売買目的有価証券

(単位：百万円)

貸借対照表計上額	当期の損益に含まれた評価差額
6,779	-

(2) 満期保有目的の債券

貸借対照表計上額はあります。

(3) 責任準備金対応債券

貸借対照表計上額はあります。

(4) その他有価証券

(単位：百万円)

取得原価	貸借対照表計上額	評価差額		
			うち評価益	うち評価損
172,424	234,126	61,702	61,702	-

Ⅶ. 退職給付に関する注記

1. 退職給付に関する事項

退職給付に関する事項は、以下のとおりであります。

(1) 採用している退職給付制度の概要

就業規則に基づき、退職一時金制度及び確定給付企業年金制度を採用しております。

(2) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

イ. 期首における退職給付債務	154,223
ロ. 勤務費用	5,033
ハ. 利息費用	400
ニ. 数理計算上の差異の当期発生額	878
ホ. 退職給付の支払額	△ 6,940
ヘ. 過去勤務費用の当期発生額	-
ト. 期末における退職給付債務 (イ+ロ+ハ+ニ+ホ+ヘ)	153,595

(3) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

イ. 期首における年金資産	101,990
ロ. 期待運用収益	1,315
ハ. 数理計算上の差異の当期発生額	115
ニ. 事業主からの拠出額	6,302
ホ. 退職給付の支払額	△ 5,356
ヘ. 期末における年金資産 (イ+ロ+ハ+ニ+ホ)	104,367

(4) 退職給付債務及び年金資産と貸借対照表で計上された退職給付引当金及び前払年金費用の調整表

(単位：百万円)

イ. 積立型制度の退職給付債務	127,013
ロ. 年金資産	△ 104,367
(イ+ロ)	22,646
ハ. 非積立型制度の退職給付債務	26,582
ニ. 未認識数理計算上の差異	△ 12,049
ホ. 未認識過去勤務費用	1,157
ヘ. 貸借対照表に計上された負債と資産の純額 (イ+ロ+ハ+ニ+ホ)	38,337
ト. 退職給付引当金	38,337
チ. 前払年金費用	-
リ. 貸借対照表に計上された負債と資産の純額	38,337

(5) 退職給付に関連する損益

(単位：百万円)

イ、勤務費用	5,033
ロ、利息費用	400
ハ、期待運用収益	△ 1,315
ニ、数理計算上の差異の当期の費用処理額	2,688
ホ、過去勤務費用の当期の費用処理額	△ 87
ヘ、その他	△ 17
ト、確定給付制度にかかる退職給付費用 (イ+ロ+ハ+ニ+ホ+ヘ)	6,702

(6) 年金資産の主な内訳

一般勘定	100%
------	------

(7) 長期期待運用収益率の設定方法に関する記載

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、年金資産の過去の運用実績等を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

イ、割引率	0.26%
ロ、長期期待運用収益率	1.29%

2. 旧農林共済組合に対する特例業務負担金

法定福利費（人件費）には、「厚生年金保険制度及び農林漁業団体職員共済組合制度の統合を図るための農林漁業団体職員共済組合法等を廃止する等の法律」附則第 57 条の規定に基づき、旧農林共済組合（存続組合）が行う特例年金給付等の業務に要する費用に充てるため提出した特例業務負担金 714 百万円を含めて計上しております。

なお、同組合より示された令和 4 年 3 月現在における令和 14 年 3 月までの特例業務負担金の将来見込額は 7,397 百万円であります。

Ⅷ. 税効果会計に関する注記

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

- (1) 繰延税金資産の総額は 1,702,841 百万円であり、繰延税金負債の総額は 511,106 百万円であります。繰延税金資産のうち評価性引当額として控除した額は、9,049 百万円であります。
- (2) 繰延税金資産の発生原因別の主な内訳は、共済契約準備金（自動車損害賠償責任共済の責任準備金を除く。）1,262,946 百万円、価格変動準備金 360,190 百万円、自動車損害賠償責任共済の責任準備金 24,658 百万円、退職給付引当金 10,703 百万円であります。
- (3) 繰延税金負債の発生原因別の主な内訳は、その他有価証券の評価差額によるものであります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異

当期における法定実効税率は 27.92%であり、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率（17.70%）との間の主要な差異は、契約者割戻準備金繰入額△6.11%であります。

Ⅸ. 重要な後発事象に関する注記

該当事項はありません。

Ⅹ. その他の注記

該当事項はありません。

8. JA共済連および子会社の状況（連結）

JA共済連および子会社の状況（連結）にかかる直近連結会計年度の状況は、以下のとおりです。なお、連結子会社は共栄火災海上保険株式会社、持分法適用会社は農林中金全共連アセットマネジメント株式会社となっております。

【連結貸借対照表】

第72年度（令和4年3月31日現在）連結貸借対照表

（単位：百万円）

科 目	金 額	科 目	金 額
（資 産 の 部）		（負 債 の 部）	
現金	4	共済契約準備金	52,218,192
預金	644,658	諸引当金	3,378
金銭の信託	240,905	退職給付に係る負債	55,160
金銭債権	14,092	その他負債	604,519
有価証券	54,754,486	価格変動準備金	1,295,033
貸付金	568,919	再評価に係る繰延税金負債	3,104
運用不動産	298,954		
有形固定資産	296,232		
無形固定資産	2,722	負 債 の 部 合 計	54,179,388
業務用固定資産	190,150		
有形固定資産	117,065	（純 資 産 の 部）	
建物	44,895	出資金	756,537
土地	61,843	利益剰余金	2,402,789
その他の有形固定資産	10,326	会 員 資 本 合 計	3,159,326
無形固定資産	73,085	その他有価証券評価差額金	1,362,477
資本貸付金	200,000	退職給付に係る調整累計額	△ 8,723
外部出資	57,666	評 価 ・ 換 算 差 額 等 合 計	1,353,753
その他資産	551,550	非支配株主持分	32,589
繰延税金資産	1,206,932		
貸倒引当金	△ 2,550	純 資 産 の 部 合 計	4,545,668
外部出資等損失引当金	△ 713		
資 産 の 部 合 計	58,725,057	負 債 及 び 純 資 産 の 部 合 計	58,725,057

【連結損益計算書】

第72年度 〔 令和3年4月 1日から
令和4年3月31日まで 〕 連結損益計算書

(単位：百万円)

科 目	金 額
経常収益	6,251,568
直接事業収益	4,882,559
共済契約準備金戻入額	262,460
財産運用収益	1,094,347
利息及び配当金収入	788,620
金銭の信託運用益	16,582
有価証券売却益	117,423
その他の運用収益	171,721
その他経常収益	12,201
経常費用	6,067,375
直接事業費用	5,534,542
共済契約準備金繰入額	13,570
財産運用費用	184,671
有価証券売却損	5,670
有価証券評価損	66
有価証券償還損	145
その他の運用費用	178,788
価格変動準備金繰入額	88,027
事業普及費	22,187
事業管理費	145,367
その他経常費用	79,007
経 常 利 益	184,193
特別利益	2,207
固定資産処分益	1,213
異常危険準備金限度超過取崩額	587
その他の特別利益	405
特別損失	2,794
固定資産処分損	657
減損損失	571
災害救援金	1,013
その他の特別損失	552
税金等調整前当期剰余	183,606
法人税等合計	33,939
法人税、住民税及び事業税	101,902
法人税等調整額	△ 67,962
契約者割戻準備金繰入額	37,242
当期利益	112,423
非支配株主に帰属する当期利益	2,759
当期剰余金	109,663

令和4年度上半期業績報告

<目次>

1. 主要業績	1
(1) 新契約高	1
(2) 保有契約高	1
(3) 解約・失効の状況（長期共済）	1
(4) 主要収支項目	2
(5) 資産の状況	2
2. 基礎利益	3
3. 実質純資産額	3
4. 支払余力（ソルベンシー・マージン）比率の明細	3
5. 上半期貸借対照表	4
6. 上半期損益計算書	5
7. 上半期注記事項	6
8. 運用資産の明細	8

（注）本資料における金額は、記載単位未満を切り捨てて表示しております。
したがって、各数表上の数字を合計しても合計欄と一致しない場合があります。
なお、切り捨てる前の金額が記載単位未満の場合は、「0」と表示し、切り捨てる前の
金額が0円の場合は、「－」と表示しております。
また、比率は小数点記載単位未満を四捨五入して表示しております。

令和4年度上半期業績報告

1. 主要業績

(1) 新契約高

① 長期共済

(単位：千件、億円、%)

	令和3年度上半期		令和4年度上半期					
	件 数	金 額	件 数	金 額		共済掛金		
				前年同期比	前年同期比	前年同期比	前年同期比	
生 命 総 合 共 済	827	17,584	733	88.6	13,247	75.4	3,778	82.0
建 物 更 生 共 済	518	77,430	428	83.2	84,458	83.2	1,885	71.0
生命・建物更生共済合計	1,344	94,885	1,162	88.5	77,705	81.8	5,674	84.8
年 金 共 済	70	484	70	100.0	472	97.5	183	89.5
財産形成貯蓄共済	1	8	0	91.1	8	102.4	0	97.2

(注1)「金額」は、「生命・建物更生共済」および「財産形成貯蓄共済」は保障共済金額、「年金共済」は年金金額の実績です。

(注2)「共済掛金」は、連合会が収納する共済掛金です。

② 短期共済

(単位：千件、億円、%)

	令和3年度上半期		令和4年度上半期			
	件 数	共済掛金	件 数	共済掛金		
				前年同期比	前年同期比	
火 災 共 済	558	47	545	98.0	48	98.3
自 動 車 共 済	4,038	1,321	4,034	99.9	1,308	98.9
傷 害 共 済	2,783	28	3,388	121.3	28	99.4
団 体 定 期 生 命 共 済	118	118	121	101.7	127	107.4
自 賠 責 共 済	1,824	227	1,582	97.4	222	97.8
そ の 他 短 期 共 済	280	45	250	98.0	47	105.1
合 計	9,383	1,780	9,822	105.8	1,780	99.4

(注1)「共済掛金」は、連合会が収納する共済掛金です。

(注2)「その他短期共済」は、団体建物火災共済、定期定期生命共済および賠償責任共済の合計です。

(2) 保有契約高

(単位：千件、億円、%)

	令和3年度末		令和4年度上半期末			
	件 数	金 額	件 数	金 額		
				前年度末比	前年度末比	
生 命 総 合 共 済	18,186	911,021	18,284	100.5	877,545	98.3
建 物 更 生 共 済	9,372	1,403,483	9,309	99.3	1,397,187	99.5
生命・建物更生共済合計	27,558	2,314,504	27,593	100.1	2,274,712	98.3
年 金 共 済	3,828	23,191	3,823	99.9	23,138	99.8
財 産 形 成 貯 蓄 共 済	10	118	10	98.6	113	97.1

(注)「金額」は、「生命・建物更生共済」および「財産形成貯蓄共済」は保障共済金額、「年金共済」は年金金額の実績です。

(3) 解約・失効の状況（長期共済）

(単位：%)

	令和3年度上半期		令和4年度上半期	
				前年同期との差異
解約・失効率	1.81		1.50	△ 0.11
解約率	1.42		1.31	△ 0.11

(注)解約・失効率は、(解約+失効+減額(保障金額のみ)-復活)÷(期首契約+過年度新契約+月払新契約)により算出しています。

（４）主要収支項目

（単位：億円、％）

	令和3年度上半期	令和4年度上半期	
			前年同期比
受 入 共 済 掛 金	25,341	20,473	80.8
支 払 共 済 金	22,572	16,919	75.0
財 産 運 用 収 益	4,708	7,328	155.6
財 産 運 用 費 用	257	2,673	1,038.8

（５）資産の状況

（単位：億円、％）

	令和3年度末	令和4年度上半期末	
			前年度末比
総 資 産	581,926	572,263	98.3
う ち 運 用 資 産	560,292	548,504	97.9

2. 基礎利益

（単位：億円）

	令和3年度上半期	令和4年度上半期	前年同期差
基礎利益	2,795	1,395	△ 1,400
（うち費差損益）	516	478	△ 38
（うち利差損益）	532	648	116
（うち危険差損益）	1,746	268	△ 1,478

（注1）基礎利益とは、共済事業本来の期間損益を示す指標で、具体的には、損益計算書の「経常利益」から、有価証券売却損益などの「キャピタル損益」および異常危険準備金取崩額などの「臨時損益」を除いて算出しています。共済事業は、長期間にわたって契約者への保障を確実に履行するために、共済掛金（予定事業費率、予定利率、予定死亡・予定危険率）の設定にあたって、あらかじめ将来のリスクに備えて適度の安全性を確保しています。そのため、この予定の率と決算による実績との差額が発生することになります。

（注2）当上半期業績報告から基礎利益の計算方法を見直しております。上表の数値は、令和4年度上半期、令和3年度上半期ともに計算方法見直し後の数値（基礎利益から投資信託の解約損益を除外し、為替に係るヘッジコストを算入）を記載しています。

3. 実質純資産額

（単位：億円）

	令和3年度末	令和4年度上半期末	前年度末差
実質純資産額	167,187	138,680	△ 28,507
対総資産比率	28.7%	24.2%	△ 4.5%

（注）実質純資産額とは、実質的な債務超過かどうかを判定するための基準です。具体的には、「時価評価した資産の額」から自己負債から自己資本とみなされるもの（異常危険準備金、価格変動準備金など）を除いた額を控除して算出しています。

4. 支払余力（ソルベンシー・マージン）比率の明細

（単位：億円）

	令和3年度末	令和4年度上半期末
(1) 支払余力の総額 $(= ①+②+③+④+⑤+⑥+⑦-⑧)$	126,161	116,054
① 純資産の部の合計（剰余金の処分として支出する金額、評価・換算差額等合計を除く）	31,153	31,788
② 価格変動準備金	12,900	13,109
③ 異常危険準備金	33,131	33,245
④ 一般貸倒引当金	21	21
⑤ その他有価証券評価差額（税効果控除前）の90%（負債の場合は100%）	18,803	5,827
⑥ 土地の含み損益の85%（負債の場合は100%）	1,273	1,273
⑦ 上記に準ずるものの額	31,845	31,258
⑧ 繰延税金資産の不算入額及び控除項目（-）	587	587
(2) リスクの合計額 $(= [(R_1)^2 + (R_2 + R_3 + R_4)^2]^{1/2} + R_2 + R_3)$	18,590	17,863
R ₁ 一般共済リスク相当額	1,784	1,809
R ₂ 巨大災害リスク相当額	8,888	8,538
R ₃ 予定利率リスク相当額	1,187	1,147
R ₄ 財産運用リスク相当額	10,188	9,842
R ₅ 経営管理リスク相当額	388	382
(3) 支払余力比率 $(= (1) / ((2) \times 1/2) \times 100)$	1,357.3%	1,299.4%

（注）J A共済では、生命共済事業と損害共済事業の両方を実施しているため、生命保険会社または損害保険会社のソルベンシー・マージン比率と単純に比較はできません。

5. 上半期貸借対照表

(単位：百万円、%)

科 目	令和3年度末要約貸借対照表 (令和4年3月31日現在)		令和4年度上半期末 (令和4年9月30日現在)	
	金 額	構成比	金 額	構成比
(資産の部)				
現金	-	-	0	0.0
預金	610,211	1.0	733,118	1.3
金銭の信託	240,905	0.4	238,105	0.4
金銭債権	14,092	0.0	12,059	0.0
有価証券	54,305,987	93.3	53,032,977	92.7
(うち国債)	38,438,871	88.1	37,758,537	88.0
(うち地方債)	2,488,487	4.2	2,428,030	4.2
(うち社債)	1,785,628	3.1	1,824,838	2.8
(うち外国証券)	5,470,881	9.4	5,508,898	9.8
(うち株式)	1,528,873	2.8	1,458,448	2.8
貸付金	568,154	1.0	544,289	1.0
共済契約貸付	81,577	0.1	81,788	0.1
一般貸付	388,005	0.7	375,524	0.7
その他の貸付	88,571	0.2	88,887	0.2
運用不動産	291,893	0.5	289,861	0.5
未収共済掛金	253,168	0.4	222,317	0.4
未収再保険勘定	11,861	0.0	11,330	0.0
その他の資産	258,851	0.4	172,767	0.3
業務用固定資産	150,077	0.3	150,357	0.3
資本貸付金	200,000	0.3	200,000	0.3
外部貸出資産	109,984	0.2	109,653	0.2
繰延税金資産	1,182,686	2.0	1,512,514	2.6
貸倒引当金	△ 2,474	△ 0.0	△ 2,350	△ 0.0
外部出資等損失引当金	△ 713	△ 0.0	△ 695	△ 0.0
資産の部合計	58,192,687	100.0	57,226,307	100.0
(負債の部)				
共済契約準備金	51,794,398	89.0	51,774,660	90.5
支払準備金	873,885	1.7	878,770	1.7
責任準備金	50,271,081	88.4	50,277,804	87.9
契約者割戻準備金	549,372	0.9	520,285	0.9
未払再保険勘定	11,239	0.0	12,320	0.0
代理店勘定	516	0.0	110	0.0
共済資金	8,467	0.0	2,305	0.0
その他の負債	568,834	1.0	396,010	0.7
諸引当金	41,569	0.1	41,117	0.1
(うち退職給付引当金)	38,337	0.1	37,928	0.1
価格変動準備金	1,290,080	2.2	1,310,931	2.3
負債の部合計	53,713,106	92.3	53,537,456	93.6
(純資産の部)				
出資金	756,537	1.3	756,537	1.3
利益剰余金	2,388,527	4.1	2,454,530	4.3
利益準備金	451,084	0.8	471,852	0.8
その他利益剰余金	1,637,482	3.3	1,882,877	3.5
特別危険積立金	138,349	0.2	138,937	0.2
災害救援積立金	28,888	0.0	28,824	0.1
共済契約特別積立金	1,373,248	2.4	1,423,881	2.5
交通事故対策基金	87,184	0.1	87,422	0.1
経営基盤整備積立金	38,145	0.1	81,888	0.1
地域・農業活性化積立金	87,218	0.1	77,411	0.1
中間未処分剰余金	224,319	0.4	183,434	0.3
(うち中間剰余金)	102,837	0.2	85,722	0.2
会 員 資 本 合 計	3,145,064	5.4	3,211,067	5.6
その他有価証券評価差額金	1,334,516	2.3	478,338	0.8
繰延ヘッジ損益	-	-	△ 555	△ 0.0
評価・換算差額等合計	1,334,516	2.3	477,783	0.8
純資産の部合計	4,479,581	7.7	3,688,850	6.4
負債及び純資産の部合計	58,192,687	100.0	57,226,307	100.0

(注1) 令和3年度末要約貸借対照表の中間未処分剰余金、中間剰余金は、それぞれ当期未処分剰余金、当期剰余金を記載しております。

(注2) 共済契約の一部に対する金利変動リスクをヘッジするために利用している金利スワップ取引について、当上半期よりヘッジ会計を適用しており、当該金利スワップの評価差額（税効果控除後）を「繰延ヘッジ損益」に計上しております。

6. 上半期損益計算書

(単位:百万円、%)

科 目	令和3年度上半期 令和3年4月 1日から 令和3年9月30日まで		令和4年度上半期 令和4年4月 1日から 令和4年9月30日まで	
	金 額	百分比	金 額	百分比
経 常 収 益	3,379,147	100.0	2,825,174	100.0
直接事業収益	2,540,412		2,054,280	
(うち受入共済掛金)	2,534,194		2,047,377	
(うち再保険金)	1,614		1,860	
共済契約準備金戻入額	361,809		33,901	
支払備金戻入額	32,055		-	
責任準備金戻入額	293,853		-	
契約者割戻準備金戻入額	35,900		33,901	
財産運用収益	470,826		732,834	
(うち利息及び配当金収入)	432,202		409,416	
(うち有価証券売却益)	30,095		66,551	
(うちその他の運用収益)	8,527		256,866	
その他の経常収益	6,099		4,158	
経 常 費 用	3,193,280	94.5	2,696,898	95.5
直接事業費用	3,055,712		2,308,516	
(うち支払払戻金)	25,354		23,487	
(うち支払返戻金)	701,078		523,292	
(うち支払共済金)	2,257,239		1,691,959	
(うち支払割戻金)	35,605		33,584	
共済契約準備金繰入額	4,842		14,162	
支払備金繰入額	-		2,805	
責任準備金繰入額	-		6,542	
割戻金勘置利息繰入額	4,842		4,814	
財産運用費用	25,734		267,332	
(うち金銭の信託運用費)	26		9	
(うち有価証券売却損)	4,996		13,825	
(うち有価証券評価損)	0		188	
(うち金融派生商品費用)	12,558		245,259	
(うちその他の運用費用)	3,299		3,190	
価格変動準備金繰入	19,875		20,851	
事業普及費	7,038		6,701	
事業管理費	55,823		56,173	
その他の経常費用	24,253		23,160	
経 常 利 益	185,867	5.5	128,276	4.5
特 別 利 益	1,099	0.0	909	0.0
特 別 損 失	458	0.0	549	0.0
税 引 前 中 間 剰 余	186,507	5.5	128,636	4.6
法 人 税 等 合 計	49,732	1.5	32,913	1.2
中 間 剰 余 金	136,775	4.0	95,722	3.4

7. 上半期注記事項

I. 上半期貸借対照表関係

1. 責任準備金の積立方法

責任準備金は、上半期末時点において、共済契約上の責任が開始している契約について、共済契約に基づく将来における債務の履行に備えるため、「農業協同組合法」第11条の32の規定に基づき、共済掛金及び責任準備金の算出方法書（「農業協同組合法」第11条の17第1項及び第2項）に記載された方法に従って計算し、積み立てております。

2. 責任準備金対応債券

生命総合共済及び建物更生共済の当上半期末の保有契約から発生すると予測される支出額（共済金・事業費等）のデュレーション（金利変動に対する時価変動の程度を表す指標）と、当該保有契約から発生すると予測される共済掛金のうち予め定められた一定割合の収入額及び責任準備金対応債券とのデュレーションが、定められた範囲となるように責任準備金対応債券を管理しております。

3. 貸付有価証券

消費貸借契約により貸し付けている有価証券の貸借対照表計上額は、6,667,885百万円であります。

4. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建の資産及び負債は、上半期末日の為替相場により円換算しております。但し、海外子会社株式については、取得時の為替相場により円換算しております。

5. リスク管理債権の状況

債権のうち、「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」、「危険債権」、「三月以上延滞債権」並びに「貸付条件緩和債権」の合計額は10,673百万円であります。なお、内訳については以下のとおりであります。

（1）債権のうち、破産更生債権及びこれらに準ずる債権額はあります。

なお、「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

（2）債権のうち、危険債権額はあります。

なお、「危険債権」とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」に該当しない債権であります。

（3）債権のうち、三月以上延滞債権額はあります。

なお、「三月以上延滞債権」とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸付金で「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」、「危険債権」に該当しないものであります。

（4）債権のうち、貸付条件緩和債権額は10,673百万円であります。

なお、「貸付条件緩和債権」とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸付金で、「破産更生債権及びこれらに準ずる債権」、「危険債権」、「三月以上延滞債権」に該当しないものであります。

6. 特別勘定の資産及び負債

「農業協同組合法」第11条の37に規定する特別勘定（確定拠出年金共済）の資産の額は51百万円であります。

なお、負債の額も同額であります。

Ⅱ. 上半期損益計算書関係

1. 減損損失

当上半期における固定資産の減損損失に関する事項は、以下のとおりであります。

(1) 資産のグルーピング方法

共済事業の用に供している不動産等については、共済事業全体で1つの資産グループとしております。

また、共済事業の用に供していない賃貸用不動産及び遊休資産等については、それぞれの物件ごとに1つの資産グループとしております。

(2) 減損損失の認識に至った経緯

不動産市況の悪化等により、一部の資産グループに著しい収益性の低下または時価の下落が見られたことから、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

(3) 減損損失を認識した資産グループと減損損失計上額の固定資産の種類ごとの内訳

用 途	件数 (件)	減損損失（百万円）		
		土地	建物等	計
賃貸用不動産	-	-	-	-
遊休資産等	8	2	5	7
合 計	8	2	5	7

(4) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、賃貸用不動産については物件により使用価値または正味売却価額を、遊休資産等については正味売却価額を適用しております。なお、使用価値については将来キャッシュ・フローを3%で割り引いて算定しております。また、正味売却価額については不動産鑑定評価基準に基づく鑑定評価額または固定資産税評価額に一定の倍率を乗じて計算した評価額等から処分費用見込額を差し引いて算定しております。

8. 運用資産の明細

(1) 運用資産の構成

(単位：億円、%)

区 分	令和3年度末		令和4年度上半期末	
	金 額	構成比	金 額	構成比
現 金 ・ 預 金	6,102	1.1	7,331	1.3
金 銭 の 信 託	2,409	0.4	2,331	0.4
金 銭 債 権	140	0.0	120	0.0
有 価 証 券	543,059	96.9	530,329	96.7
公 社 債	438,290	78.2	430,759	78.5
外 国 証 券	54,708	9.8	55,089	10.0
株 式	15,269	2.7	14,594	2.7
その他の有価証券	34,791	6.2	29,886	5.4
貸 付 金	5,661	1.0	5,442	1.0
共 済 契 約 貸 付	815	0.1	817	0.1
一 般 貸 付	3,860	0.7	3,755	0.7
そ の 他 の 貸 付	985	0.2	869	0.2
運 用 不 動 産	2,918	0.5	2,898	0.5
運 用 資 産 合 計	560,292	100.0	548,504	100.0

(注1) 一般貸付は、貸付金から取立不能見込額（令和4年度上半期末および令和3年度末は該当しません。）を減額した後の金額です。

(注2) 上記には、特別勘定にかかる資産を含めて表示しております。

（令和4年度上半期末：50百万円、令和3年度末：63百万円）

(2) 有価証券の時価情報

① 売買目的有価証券

(単位：億円)

区 分	令和3年度末		令和4年度上半期末	
	貸借対照表計上額	当期の損益に含まれた評価損益	貸借対照表計上額	当期の損益に含まれた評価損益
売買目的有価証券	-	-	-	-

(注) 上記の金額には特別勘定にかかる有価証券は含んでいません。

② 売買目的有価証券以外

(単位：億円)

区 分	令和3年度末					令和4年度上半期末				
	帳簿価額	時 価	差 損 益			帳簿価額	時 価	差 損 益		
			差益	差損				差益	差損	
責任準備金対応債券	348,401	388,458	38,056	41,448	3,393	340,822	383,821	23,299	32,291	8,992
満期保有目的の債券	33,804	42,971	9,387	9,387	-	33,595	40,893	7,097	7,097	-
子会社・関連会社株式	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他の有価証券	142,128	158,957	17,831	22,182	4,351	149,898	155,893	5,995	18,090	12,093
公 社 債	58,070	58,284	214	1,558	1,342	58,379	58,541	△ 2,837	1,168	4,005
外 国 証 券	48,108	54,708	6,602	8,088	1,486	53,850	55,089	1,239	8,309	5,070
外 債	27,450	28,385	△ 1,054	129	1,184	31,782	27,977	△ 3,814	35	3,850
外国株式等	20,655	28,312	7,658	7,958	301	22,068	27,112	5,054	8,273	1,219
株 式	7,253	15,289	8,018	8,143	127	7,378	14,594	7,216	7,393	177
その他の有価証券	30,581	33,553	2,982	4,387	1,395	29,173	29,547	373	3,214	2,840
譲渡性預金証書等	134	140	6	6	-	115	120	5	5	-
合 計	524,132	589,385	65,253	72,998	7,745	524,113	560,508	36,394	57,480	21,086
公 社 債	438,078	485,712	47,638	52,372	4,736	433,598	481,158	27,560	40,557	12,997
外 国 証 券	48,108	54,708	6,602	8,088	1,486	53,850	55,089	1,239	8,309	5,070
外 債	27,450	28,385	△ 1,054	129	1,184	31,782	27,977	△ 3,814	35	3,850
外国株式等	20,655	28,312	7,658	7,958	301	22,068	27,112	5,054	8,273	1,219
株 式	7,253	15,289	8,018	8,143	127	7,378	14,594	7,216	7,393	177
その他の有価証券	30,581	33,553	2,982	4,387	1,395	29,173	29,547	373	3,214	2,840
譲渡性預金証書等	134	140	6	6	-	115	120	5	5	-

(注) 有価証券のほか、譲渡性預金証書、コマーシャルペーパーなどの金銭債権を含んでいます。

③ 市場価格のない株式等

(単位：億円)

区 分	令和3年度末	令和4年度上半期末
	帳簿価額	帳簿価額
子会社・関連会社株式	-	-
その他の有価証券	1,236	339
外 国 証 券	-	-
外国株式等	-	-
株 式	-	-
その他の有価証券	1,236	339
合 計	1,236	339

(3) 金銭の信託の時価情報

① 金銭の信託

(単位：億円)

区 分	令和3年度末			令和4年度上半期末		
	貸借対照表計上額	時 価 額	差 損 益	貸借対照表計上額	時 価 額	差 損 益
金 銭 の 信 託	2,409	2,409	-	2,381	2,381	-

② 売買目的有価証券の金銭の信託

(単位：億円)

区 分	令和3年度末		令和4年度上半期末	
	貸借対照表計上額	当期の損益に 含まれた評価損益	貸借対照表計上額	当期の損益に 含まれた評価損益
売買目的有価証券	67	-	67	△ 0

③ 満期保有目的の債券、責任準備金対応債券、その他有価証券の金銭の信託

(単位：億円)

区 分	令和3年度末			令和4年度上半期末		
	帳簿価額	時 価 額	差 損 益	帳簿価額	時 価 額	差 損 益
満期保有目的の債券	-	-	-	-	-	-
責任準備金対応債券	-	-	-	-	-	-
その 他 有 価 証 券	1,724	2,341	617	1,724	2,313	589

第5【参考情報】

当社は、当事業年度開始日から本報告書提出日までの間において、以下に掲げる書類を関東財務局長宛に提出しました。

2022年9月9日提出 有価証券届出書及びその添付書類

2022年9月26日提出 有価証券届出書（2022年9月9日提出）の訂正届出書

2022年10月3日提出 有価証券届出書（2022年9月9日提出）の訂正届出書

2022年10月7日提出 有価証券届出書（2022年9月9日提出）の訂正届出書

独立監査人の監査報告書

2023年3月24日

全共連第2回劣後ローン流動化株式会社
代表取締役 関口 陽平 殿

EY新日本有限責任監査法人

東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士

窪寺 信

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている全共連第2回劣後ローン流動化株式会社の2022年8月10日から2022年12月31日までの第1期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、全共連第2回劣後ローン流動化株式会社の2022年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、財務諸表及びその監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役への責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者及び監査役の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

（※1）上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

（※2）XBRLデータは監査の対象には含まれていません。